

Acronis



Acronis Backup
for VMware

著作権情報

Copyright © Acronis International GmbH, 2002-2015. All rights reserved.

「Acronis」および「Acronis セキュア ゾーン」は、Acronis International GmbH の登録商標です。

「Acronis Compute with Confidence」、「Acronis Startup Recovery Manager」、「Acronis Active Restore」、「Acronis Instant Restore」、および Acronis ロゴは、Acronis International GmbH の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、VMware, Inc. の米国ならびにその他の地域における商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

ここに記載されているその他すべての商標および著作権は、それぞれの権利所有者に帰属します。

著作権所有者の明示的な許可なく本ドキュメントの実質的な修正版を配布することは禁止されています。

著作権所有者からの事前の許可がない限り、いかなる形態（紙媒体など）であっても商業目的で本ドキュメントまたはその派生物を配布することは禁止されています。

ドキュメントは、「現状のまま」で提供され、商品性に対する黙示的保証、特定の目的に対する適合性、権利を侵害していないことなどを含む明示的または黙示的な条件、言明、および保証に関する責任を負いません（免責条項の範囲が法的に無効と見なす場合を除く）。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある `license.txt` ファイルをご参照ください。本ソフトウェアまたはサービスと共に使用するサードパーティ コードおよび関連するライセンス条項の最新の一覧については、<http://kb.acronis.com/content/7696> をご参照ください。

Acronis の特許取得済みの技術

この製品で使用されている技術は、以下の番号の米国特許のうち 1 つ以上の保護対象です。
7,047,380; 7,275,139; 7,281,104; 7,318,135; 7,353,355; 7,366,859; 7,475,282; 7,603,533; 7,636,824;
7,650,473; 7,721,138; 7,779,221; 7,831,789; 7,886,120; 7,895,403; 7,934,064; 7,937,612; 7,949,635;
7,953,948; 7,979,690; 8,005,797; 8,051,044; 8,069,320; 8,073,815; 8,074,035; 8,145,607; 8,180,984;
8,225,133; 8,261,035; 8,296,264; 8,312,259; 8,347,137; 8,484,427; 8,645,748; 8,732,121 および出願中特許。

目次

1	Acronis Backup for VMware の概要	7
2	Acronis Backup for VMware とは	8
2.1	Acronis Backup for VMware の機能	8
3	Acronis Backup for VMware の仕組み	10
3.1	仮想コンピュータのバックアップと復元	10
3.2	バックアップ アーカイブの構造	10
3.2.1	複数ファイルのバックアップ スキーム (レガシー モード)	10
3.2.2	単一ファイルのバックアップ スキーム (Always Incremental モード)	11
4	Acronis Backup for VMware のインストール	12
4.1	要件	12
4.1.1	サポートされるオペレーティング システム	12
4.1.2	システム要件	12
4.1.3	VMware Tools をインストールする方法	14
4.1.4	VM バックアップおよび復元に関する権限	14
4.2	インストール オプション	21
4.2.1	ESX(i) ホストへの Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスのインストール	22
4.2.2	Acronis Backup for VMware Windows エージェントのインストール	23
4.2.3	インストール ファイルの取り出し	25
4.2.4	ESX(i) ホストの接続設定	26
4.2.5	ローカルに接続されたストレージの使用	26
4.3	Acronis Backup for VMware のアンインストール	27
5	はじめに	28
5.1	ダッシュボード管理	29
5.2	ウェブ コンソールの使用	30
5.2.1	[リボン] タブ	30
5.2.2	[ログアウト] リンク	33
6	vCenter 統合	34
7	集中管理ダッシュボード	37
8	バックアップ	39
8.1	バックアップする VM の選択	39
8.2	バックアップの実行時期	40
8.3	バックアップ先	41
8.4	バックアップ方法	46
8.4.1	アプリケーション アウェア バックアップの設定	46
8.4.2	バックアップのベリファイ	47
8.4.3	その他の設定	47
8.4.4	バックアップ タスクの作成ウィザードの完了	47
8.5	オプション	48
8.5.1	アーカイブの保護	48

8.5.2	[バックアップから除外するファイル].....	49
8.5.3	圧縮レベル	50
8.5.4	エラー処理.....	50
8.5.5	災害復旧計画.....	51
8.5.6	通知.....	52
8.5.7	その他の設定.....	54
8.6	作成済みバックアップ タスクの管理	54
9	レプリケーション	55
9.1	新しいレプリケーション タスク	55
9.1.1	レプリケーション VM の選択.....	55
9.1.2	レプリケーションの実行時期	56
9.1.3	レプリカのロケーションおよびデータストアの選択	56
9.1.4	レプリケーション タスク オプション.....	57
9.2	レプリケーションされた VM の管理.....	58
9.2.1	レプリケーションされた VM マネージャ	58
9.2.2	フェールオーバー	59
9.2.3	レプリカからの VM のフェールバック	60
9.2.4	レプリカ VM の削除.....	62
9.2.5	永続的フェールオーバー	62
10	復元	63
10.1	仮想コンピュータのバックアップの復元.....	63
10.1.1	復元する VM の選択.....	63
10.1.2	復元先.....	64
10.1.3	復元方法	67
10.1.4	オプション	67
10.1.5	作成済み復元タスクの管理.....	70
10.2	ファイルの復元	70
10.2.1	ファイルの抽出元の VM の選択.....	71
10.2.2	復元ポイントの参照	72
10.3	Microsoft Exchange Server バックアップの展開	73
10.3.1	データベースの展開	73
10.3.2	メールボックスの展開	75
10.3.3	メールボックスのコンテンツの展開.....	77
10.4	Microsoft SQL Server データベースの展開	78
10.5	Microsoft SharePoint Server データの展開.....	79
11	バックアップから VM を実行	80
11.1	バックアップから実行する VM の選択.....	80
11.2	VM を実行するロケーション.....	81
11.3	その他の設定	82
11.4	作成された「バックアップから VM を実行」アクティビティの管理.....	83
12	P2V 移行.....	85
12.1	P2V 移行の実行方法.....	85
13	ESXi ホストのベア メタル リカバリ	86
13.1	ESXi ホスト構成のバックアップ.....	86

13.2	ESXi ホスト構成の復元.....	89
14	タスクの管理.....	93
14.1	タスクの実行	93
14.2	タスクのキャンセル	94
14.3	タスクの編集	94
14.4	タスクの削除	94
14.5	タスク ログの表示	94
14.6	タスクの詳細の表示	95
15	復元ポイントの管理.....	98
15.1	バックアップの保存先の追加	99
15.2	仮想コンピュータのカatalog	100
15.3	復元ポイントのリスト	101
15.4	[概要] タブ	101
15.5	選択したアイテムの操作	101
15.5.1	復元.....	102
15.5.2	Exchange の復元	102
15.5.3	バックアップから VM を実行.....	102
15.5.4	ファイルの復元.....	102
15.5.5	ベリファイ	102
15.5.6	削除.....	103
16	その他の操作.....	104
16.1	バックアップのベリファイ	104
16.1.1	ベリファイの対象	104
16.2	マウントされた VM の管理.....	106
16.2.1	マウントされた VM のリスト.....	106
16.2.2	マウントされた VM の詳細.....	106
16.2.3	VM のマウント解除.....	107
16.3	ログの管理	107
16.3.1	ログ リスト.....	107
16.3.2	ログの消去	108
16.3.3	ログのクリーンアップ ルール	109
16.3.4	ログをファイルに保存	110
16.4	ライセンスの管理	110
16.4.1	ライセンスの追加	111
16.4.2	ライセンス追加の失敗	112
16.4.3	ライセンス/ESX(i) ホストの削除.....	112
16.4.4	使用可能なライセンス	113
16.5	ESX(i) ホストの管理	114
16.5.1	ESX(i) ホストのリスト	114
16.5.2	ESX(i) ホストの追加	115
16.5.3	vCenter の一部である ESX(i) ホストの追加.....	115
16.5.4	ログイン資格情報	116
16.5.5	ESX(i) ホストの削除	116
16.6	設定の管理	117

16.6.1	Cloud Backup サブスクリプション	117
16.6.2	Cloud Backup プロキシ	117
16.6.3	エージェント パスワード	119
16.6.4	構成のエクスポート/インポート	120
17	ベスト プラクティス	122
17.1	仮想コンピュータからネットワーク共有へのバックアップ	122
17.2	仮想コンピュータのバックアップを新しいロケーションに復元する	123
17.3	ファイル/フォルダの復元	123
18	サポート	124
18.1	テクニカル サポート	124
18.2	トラブルシューティング	124
19	用語集	125

1 Acronis Backup for VMware の概要

アクロニスでは、仮想化とクラウドへの移行が、最適なコンピューティングの実現だけでなく、コストを削減しながらダウンタイムの短縮と迅速な復元を可能にすると信じています。残念ながら、物理的システム用に設計されたバックアップと復元のソリューションのほとんどは、仮想環境に十分に対応できないか、仮想化の潜在的なメリットや能力をすべて引き出すことができません。

アクロニスでは、お客様やチャネル パートナーが仮想化を十分に活用できるよう全力で取り組んでおり、以下の方法を実践することにより、仮想化環境でのバックアップと復元の新たな標準を確立することを目指しています。

- 使いやすく導入が容易なテクノロジーを提供することで、IT の運用と保守にかかるコストを削減し、業績向上を支援します。
- 仮想化環境専用に設計されたバックアップと復元のソリューションを提供することで、間接費を削減して **VMware vSphere** 環境から十分な利益を生み出します。
- バックアップを **Acronis Cloud Storage** にオフサイトで保存し、データ損失のリスクを最小限に抑えます。

地域によっては、**Acronis Backup for VMware Cloud Backup Storage** を使用できない可能性があります。詳細については、<http://www.acronis.co.jp/my/backup-recovery-online/> をご覧ください。

2 Acronis Backup for VMware とは

Acronis Backup for VMware (旧 vmProtect 9) は、VMware vSphere™ 環境用に設計された総合的なバックアップと復元のソリューションです。本製品により、組織は、ESX(i) 仮想コンピュータ全体のバックアップをゲストマシンにエージェントをインストールすることなく実行したり、コンピュータ全体または個別のファイルやフォルダを復元したりできます。

2.1 Acronis Backup for VMware の機能

Acronis Backup for VMware は、受賞歴のある Acronis イメージング テクノロジーを使用して、ゲストのオペレーティング システム、構成ファイルおよびアプリケーション、リソース プール/vApp プロパティ、データストアの設定など、仮想コンピュータの正確なイメージ (バックアップ) を作成します。作成したバックアップは、元の ESX(i) ホストや、新しいホストに復元できます。実際の復元操作を実行することなくバックアップから仮想コンピュータを直接起動し、障害が発生しても数秒で VM を動作することができます。これは主要な新機能の 1 つです。

その他の新機能は次のとおりです。

- 仮想アプライアンスまたは Windows ベースのインストールを選択できるオプション
- 使いやすいウェブ ベースのインターフェイス
- LAN を使用しないバックアップ (共有ストレージに直接アクセス)
- 既存の ESX(i) ホスト上でバックアップから VM を即時実行して迅速に復元
- 新しい拡張されたバックアップ用の Always Incremental ストレージ フォーマット
- 複数の仮想コンピュータの同時バックアップ
- vApp/リソース プール設定のバックアップ/復元のサポート
- CBT (Changed Block Tracking) のサポート
- 災害復旧計画
- 集中管理ダッシュボード

Acronis Backup for VMware を使用する主な利点は次のとおりです。

1. **使いやすい** Acronis Backup for VMware は、仮想アプライアンスとして配置、もしくは Windows コンピュータにインストールして、新しいウェブ ベースのインターフェイスにより管理できます。直観的 GUI の設計におけるアクロニスの経験と VMware に焦点を当てたこのインターフェイスを使用すると、マニュアルを調べたり読んだりしなくてもすぐに使用でき、危険なミスや設定の間違いを避けられます。
2. **多機能性** 標準のバックアップと復元の機能のほかにも、Backup for VMware には次のような他に例のない機能が用意されています。バックアップからの仮想コンピュータの直接起動、無制限な P2V 変換、クラウド ベースの Acronis Cloud Storage へのバックアップ、業界標準の 256 ビット暗号化によるバックアップの保護、などです。
3. **低総所有コスト (TCO)** Backup for VMware は CPU ごとに必要なライセンス数量が決まるライセンス体系となっており、非常にお求めやすい定価が設定されています。仮想アプライアンスを動作させるために専用のコンピュータや Windows ライセンスは不要で

あり、加えて信頼性がある直観的なソリューションにより、管理者の時間と管理コストを節約できます。

4. 定評のあるベンダーとの連携による安全な投資

3 Acronis Backup for VMware の仕組み

3.1 仮想コンピュータのバックアップと復元

物理コンピュータと同様に、仮想コンピュータ（または複数の VM が 1 つの仮想インフラストラクチャを構成しているもの）も保護する必要があります。Acronis Backup for VMware エージェントをインストールすると、次の項目を実行できます。

- サーバー上の 1 つ以上の仮想コンピュータを、各仮想コンピュータに追加ソフトウェアをインストールすることなくバックアップします。
- 仮想コンピュータを同一の仮想コンピュータに復元する、または仮想コンピュータを同一もしくは別の仮想サーバー内にある別の仮想コンピュータに復元します。仮想コンピュータのバックアップおよび仮想ディスク データ内に保存されている仮想コンピュータの設定は、新しい仮想コンピュータに復元されます。

バックアップ中、仮想コンピュータは、オンライン（稼動）、オフライン（停止）、または一時停止にするか、3 つの状態を切り替えることができます。

このコンピュータへの復元中は、仮想コンピュータをオフライン（停止）にする必要があります。コンピュータは、復元する前に自動的に停止します。コンピュータを手動で停止するよう、設定することもできます。

詳細については、「仮想コンピュータのバックアップの作成 『39ページ』」セクションと「仮想コンピュータのバックアップの復元 『63ページ』」セクションをご参照ください。

3.2 バックアップ アーカイブの構造

Acronis Backup for VMware では、2 つのバックアップ アーカイブ スキーム（複数ファイルのバックアップ スキーム（レガシー モード）または単一ファイルのバックアップ スキーム（Always Incremental モード））のいずれかを使用して、仮想コンピュータのバックアップを作成できます。

Acronis Backup for VMware では、単一ファイルのバックアップ スキームがデフォルトとして設定されます。

3.2.1 複数ファイルのバックアップ スキーム（レガシー モード）

このスキームでは、各バックアップのデータは個別のアーカイブ ファイル（.tib 拡張子）に保存されます。完全バックアップは最初の起動時に作成され、その後のバックアップは増分方法に従って実行されます。

バックアップの保持ルールを設定し、適切な設定を指定します。指定された日数（保持ルールで定義された日数）よりも以前のバックアップなど、保持期間を過ぎたバックアップは次の手順に従って動的に削除されます。

依存関係があるバックアップは削除できません。たとえば、完全バックアップと一連の増分バックアップがある場合、単純に完全バックアップを削除できません。削除すると、増分バックアップは復元できなくなります。（保持ルールに従って）依存関係のあるバックアップ

も削除可能な状態になるまで、削除対象のバックアップは削除できません。この制限は、**Always Incremental** バックアップ モードを使用することで解決します。

3.2.2 単一ファイルのバックアップ スキーム (Always Incremental モード)

一般的に、バックアップを一定の期間（保持期間）だけ保持するか、またはバックアップ チェーンの最後から X 個までのバックアップのみを保持するようにポリシーが定められています。バックアップ アーカイブは日単位、週単位などで管理されます。レガシー モードのバックアップ アーカイブにおける主な制限事項は、以降のバックアップと依存関係を持つ可能性があるためバックアップ チェーンからランダムにバックアップを削除できない点です。この場合に **Always Incremental** バックアップ アーカイブが役立ちます。

Always Incremental モードでは、複数の仮想コンピュータから複数のバックアップを作成して含めることができる、新世代のアーカイブ フォーマットを使用します。最初の完全バックアップが終了すると、その他のバックアップはすべてこのアーカイブに増分モードで保存されます。レガシー アーカイブ フォーマットでは各バックアップが別の .tib ファイルへ保存されるのに対して、増分モードではすべてのデータが物理的に 1 つのファイルに配置されます。そのため、レガシー モード アーカイブと異なり、依存関係があっても、**Always Incremental** アーカイブからはランダムにバックアップを削除できます。

事前に定義された保持ルール（たとえば「2 日以上前のバックアップは削除する」など）の有効期限のあるバックアップが超過すると、バックアップ アルゴリズムはこれらの期限切れのバックアップ ブロックを単純に「空き」ブロックにします。

（より新しいバックアップの復元に必要な）依存関係がある、期限の切れたバックアップ ブロックは、アーカイブの整合性を確保するために「空き」マークは付けられません。アーカイブには毎日、バックアップを復元するために、2 日以上経過していないデータを保持する必要があります（保持期間）。これが、**Always Incremental** アーカイブの基本ルールです。アーカイブ内のすべての超過データには、削除用に「空き」領域のマークが付けられます。最初のアーカイブは以前と同じくストレージ上の同じ領域を占有しますが、それ以降の新しいすべてのバックアップは、まず「空き」ブロックへ書き込まれます。すべての「空き」ブロックが埋まった場合のみ、アーカイブの合計サイズが増加します。

この方法では、アーカイブのサイズをできるだけ小さく保ち、過剰な増大を防ぐことができます。さらに、このバックアップ スキームを導入することで「空き」ブロックのマーク付けがほぼ瞬間的に行われ、アーカイブ内のバックアップ管理にかかる時間とリソースが大幅に削減されます。これにより、レガシー アーカイブ モードにおける制限が **Always Incremental** アーカイブでは解決されます。

Always Incremental アーカイブの合計サイズには、「使用済み」ブロックのサイズと「空き」ブロックのサイズが含まれます。一般的に、**Always Incremental** アーカイブのサイズは無制限に増大せず、維持したいバックアップの合計サイズ内に抑えられています。

4 Acronis Backup for VMware のインストール

4.1 要件

4.1.1 サポートされるオペレーティング システム

Acronis Backup for VMware では、次のオペレーティング システムをサポートします。

- Windows XP Professional SP2 (x64) 、 SP3 (x86)
- Windows Server 2003、2003 R2: Standard、Enterprise、Small Business Server の各エディション (x86、x64)
- Windows Vista: すべてのエディション (x86、x64)
- Windows 7: すべてのエディション (x86、x64)
- Windows 8、8.1
- Windows Server 2008: Standard、Enterprise、Foundation の各エディション (x86、x64)
- Windows Small Business Server 2008
- Windows Server 2008 R2: Standard、Enterprise、Datacenter、Foundation の各エディション
- Windows Small Business Server 2011
- Windows Server 2012、2012 R2

4.1.2 システム要件

システム要件 (インストール)

Windows にインストールされるコンポーネントは、次のとおりです。

エディション名	メモリ (OS および実行中のアプリケーションに必要な容量)	インストールまたはアップデートに必要なディスク領域	コンポーネントが使用するディスク領域
Backup for VMware	80 MB	1 GB	500 MB

各タスク (バックアップ、復元、VM の実行、ベリファイなど) をエージェントが実行するには、約 100 MB のメモリが必要です。Acronis Backup for VMware では、同時に最大 5 つまでのタスクを並行処理できます (並行バックアップ タスクなど)。5 個を超えるタスクを同時に実行する場合、エージェントは最初の 5 個のタスクのみを処理し、その他のタスクは「待機中」状態でキューに残ります。

このほか、Acronis Backup for VMware は、111 (sunrpc) 、9000 (WCS) 、764 (nfs_server) 、9876 (Remote Agent Service) の各システム TCP ポート、および UDP ポート 2049 (nfs) を予約し、常に使用します。

サポート対象の vSphere 環境

次に、Acronis Backup for VMware を配置する際、サポートされる環境のリストを示します。

- VMware vSphere (仮想インフラストラクチャ)
- サーバーの種類: ESX および ESXi
- バージョン: 4.0*、4.1、5.0、5.1、5.5、6.0

- エディション/ライセンス
 - VMware vSphere Standard (ホットアド バックアップ モードは vSphere 5.0+ でのみサポートされる)
 - VMware vSphere Advanced
 - VMware vSphere Enterprise
 - VMware vSphere Enterprise Plus
 - VMware vSphere Essentials (ホットアド バックアップ モードは vSphere 5.0+ でのみサポートされる)
 - VMware vSphere Essentials Plus (ホットアド バックアップ モードは vSphere 5.0+ でのみサポートされる)

VMware vSphere Hypervisor (無償 ESXi) はサポート対象外

(*) ESXi バージョン 4.0 環境もサポートされていますが、サポートされていない機能もあります。たとえば、Exchange サーバー バックアップの展開 『73ページ』や ESXi 設定のバックアップ 『86ページ』機能はサポートされていません。

バックアップした仮想コンピュータのシステム要件

サポートされている Microsoft Exchange のバージョン: MS Exchange Server 2003 SP2 以降、MS Exchange Server 2007、MS Exchange Server 2010、MS Exchange Server 2013 (データベースのバックアップと復元のみ)。Windows ダイナミック ディスク (LDM) 上にある MS Exchange データベースの展開はサポートされていません。

サポートされている Microsoft SQL のバージョン: MS SQL Server 2005、MS SQL Server 2008、MS SQL Server 2012。

サポートされている Microsoft SharePoint のバージョン: MS Windows SharePoint Services 3.0 SP2、MS Office SharePoint Server 2007 SP2、MS SharePoint Foundation 2010 SP1、MS SharePoint Server 2010 SP1、MS SharePoint 2013 Technical Preview。

Acronis Backup for VMware では、バックアップされた仮想コンピュータ用に NTFS/FAT16/FAT32/ext2/ext3/ext4/ReFS ファイル システムがサポートされています。他の VM ファイル システムの場合、セクタ レベル バックアップ モードが使用されますので、アイテムやファイル単位の復元はできません。これは、このようなアーカイブからの段階的な復元ができないことを意味します (VM 全体は復元できます)。サポートされていないファイル システムの例として、Linux LVM ボリューム (または Windows ダイナミック ディスク) があります。これらは、セクタ単位モードでバックアップされます。

次の環境ではバックアップ/復元処理がサポートされていません。

- RDM ディスク (RAW デバイス マッピング)
- フォールト トレランス VM

また、仮想コンピュータがオンになっているときに、独立した仮想ドライブをバックアップすることはできません。独立した VM は、バックアップする前にオフにしてください。

ウェブ コンソールのシステム要件

Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールを円滑に操作するためには、次のバージョンのウェブ ブラウザのいずれかを使用する必要があります。

- Mozilla Firefox 3.6 以降

- Internet Explorer 7.0 以降
- Opera 10.0 以降
- Safari 5.0 以降
- Google Chrome 10.0 以降

IE 8 で適切にウェブ コンソールを操作するには、インターネットの設定をご確認ください。
[ツール]->[インターネット オプション]->[セキュリティ] タブ ->[インターネット]->[このゾーンのセキュリティのレベル] の順に選択し、ここで「高」に設定されている場合は変更します。[プライバシー] タブでプライバシーのレベルを「中高」またはそれ以下に設定します。

IE 9 で適切にウェブ コンソールを操作するには、インターネットの設定をご確認ください。
[ツール]->[インターネット オプション]->[詳細設定]->[暗号化されたページを、ディスクに保存しない] このオプションのチェックを必ず外してください。チェックが外れていないとファイルの復元機能が正常に機能しません。

4.1.3 VMware Tools をインストールする方法

Acronis Backup for VMware では、バックアップする予定の仮想コンピュータに VMware Tools をインストールする必要があります。これは、ファイル システムの適切な静止化をサポート (VSS サポートを活用) し、ファイル/フォルダの除外機能を有効にするうえで必要です。VMware Tools をインストールするには:

- VMware Infrastructure/vSphere Client を実行します。
- ESX(i) サーバーに接続します。
- 仮想コンピュータを選択し、ゲスト オペレーティング システムを実行します。
- 仮想コンピュータを右クリックし、[ゲスト]->[VMware Tools のインストール/アップグレード] を選択します。
- 画面の指示に従ってください。

[バックアップから VM を実行] 機能では、VMkernel ネットワーキングを ESX(i) サーバーに構成する必要があります。この操作は、[構成]->[ネットワーク] に移動して、vSwitch プロパティに VMkernel の接続の種類を追加することで実行できます。

4.1.4 VM バックアップおよび復元に関する権限

Acronis Backup for VMware エージェントが Windows コンピュータにインストールされているか、ESX(i) ホストに配置されている場合、最初に行うことは、このエージェントによって管理される ESX(i) ホスト/vCenter の設定です。実行可能な操作は、ユーザーが vCenter サーバーに対して持っている権限 (Backup for VMware エージェントのウェブ コンソールで [設定]->[ESX(i) ホスト] によって ESX(i) ホスト/vCenter を追加するときに指定した権限) によって異なります。ユーザーが実行権限を持っている操作のみ実行できます。次の表に、ESX(i) 仮想コンピュータのバックアップおよび復元に必要な権限と、仮想アプライアンスの配置に必要な権限を示します。

vCenter サーバーまたは ESX(i) ホストに関する権限

次の表には、vCenter サーバーのユーザーがすべての vCenter ホストおよびクラスタ上で操作を実行するために必要な権限が示されています。

ユーザーが特定の ESX ホストのみに対して操作を行うことができるようにするには、そのホストでそのユーザーに同じ権限を割り当てます。また、特定の ESX ホストの仮想コンピュータをバックアップできるようにするには、**グローバル -> ライセンス**権限が必要です。

オブジェクト	権限	VM のバックアップ	新しい VM への復元	既存の VM への復元	VA の配置	バックアップから VM を実行	レフ ョン
データストア	領域の割り当て	+	+	+	+	+	
	データストアの参照	+	+	+	+	+	
	データストアの設定	+	+	+	+	+	
	下位レベルのファイル操作	+	+	+		+	
	データストアの削除		+				
	ファイルの削除		+				
	データストアの名前変更		+				
	VM ファイルのアップデート		+				
拡張子	拡張子の登録						
	拡張子の登録解除						
	拡張子のアップデート						
グローバル	ライセンス	+	+	+		+	
ホスト -> 設定	ストレージ パーティションの設定					+	

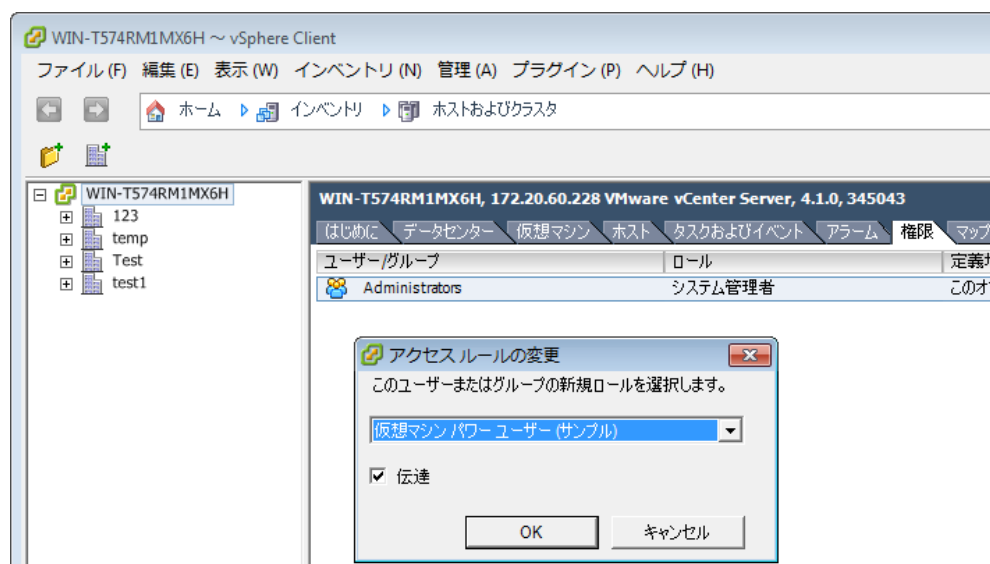
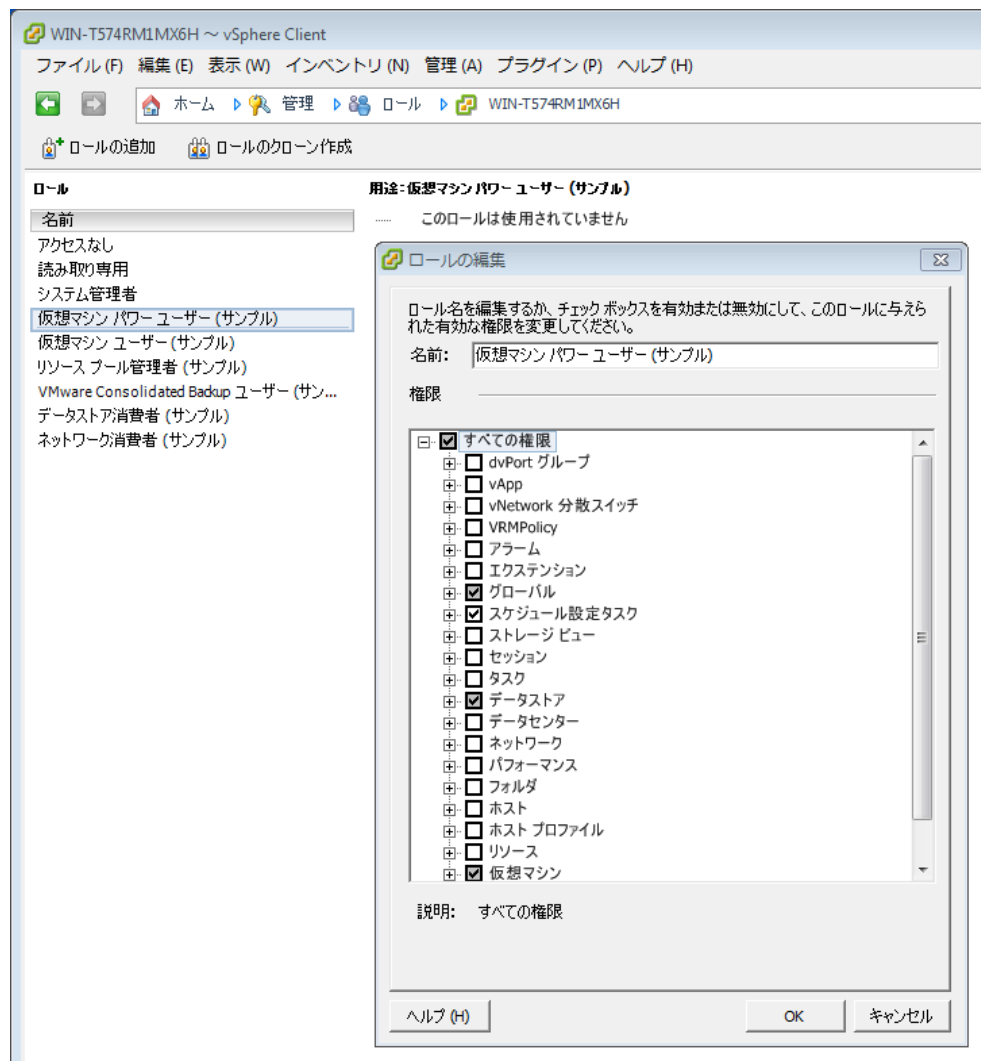
	VM の自動起動設定				+		
ホスト -> ローカルの処理	VM の作成				+	+	
	VM の削除				+	+	
	VM の再設定				+	+	
ネットワーク	ネットワークの割り当て		+	+	+	+	
	設定						
	ネットワークの移動						
リソース	推奨の適用						
	リソース プールへの vApp の割り当て						
	リソース プールへの VM の割り当て		+	+	+	+	
	リソース プールの作成						
	リソース プールの変更						
	リソース プールの移動						
	リソース プールの削除						
	リソース プールの名前変更						
タスク	タスクの作成						
	タスクのアップデート						
vApp	仮想コンピュータの追加		+				
	リソース プールの割り当て		+				
	vApp の割り当て		+				

	作成		+				
	インポート				+		
	電源オフ						
	電源オン						
	名前の変更						
	vApp のアプリケーション設定						
	vApp のインスタンス設定						
	vApp の managedBy 設定						
	vApp のリソース設定						
	OVF 環境の表示						
仮想コンピュータ -> 設定	既存のディスクの追加	+	+	+		+	
	新しいディスクの追加	+	+	+	+	+	
	デバイスの追加または削除	+	+	+	+	+	
	詳細		+		+		
	CPU 数の変更						
	リソースの変更	+					
	ディスクの変更追跡	+					
	ディスクのリース	+	+	+			
	接続設定の表示						
	仮想ディスクの拡張						
	メモリ						
	デバイス設定の変更						
	フォールト トレランスの互換性のクエリ						

	未所有ファイルの クエリ						
	ディスクの削除	+		+		+	
	名前の変更						
	ゲスト情報のリセ ット						
	注釈の設定						
	設定	+	+	+			
	VM のロック解除						
仮想コンピュータ -> ゲストの処理	ゲストの処理の変 更						
	ゲストの処理プロ グラムの実行						
	ゲストの処理のク エリ						
仮想コンピュータ -> 操作	ゲスト制御チケッ トの取得				+	+	
	VM でのバックア ップ処理						
	CD メディアの設 定						
	フロッピー メデ ィアの設定						
	コンソールの操作						
	デバイス接続						
	電源オフ		+	+	+	+	
	電源オン		+	+	+	+	
	リセット						
	一時停止						
仮想コンピュータ -> 一覧収集	既存のものからの 作成					+	
	新規作成		+		+	+	
	移動						
	登録		+			+	

	削除		+		+	+	
	登録解除		+			+	
仮想コンピュータ -> プロビジョニング	ディスクへのアクセスの許可		+	+		+	
	ディスクへの読み取り専用アクセスの許可		+	+			
	仮想コンピュータのダウンロードの許可	+	+	+		+	
	仮想コンピュータのファイルのアップロードの許可						
	仮想コンピュータからのテンプレートの作成						
	カスタマイズ						
	カスタマイズの仕様変更						
	ディスクの昇格						
	カスタマイズの仕様の読み取り						
仮想コンピュータ -> 状態	スナップショットの作成	+		+	+	+	
	スナップショットの削除	+		+	+	+	

役割の権限は、ESX(i) ホスト/vCenter に接続されている vSphere クライアントから、**[Administration] (管理) -> [Roles] (役割)** を選択して設定できます。その後、以下の図に示すように **[Permissions] (アクセス許可)** タブから、vCenter への接続用に、特定のユーザーに特定の役割を割り当てることができます。



4.2 インストール オプション

最初に Acronis Backup for VMware ソフトウェアをインストールし、ESX(i) ホストの接続設定を行ってから Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールでアクセス資格情報を設定します。

Acronis Backup for VMware インストール パッケージを実行すると、インストール メニューが表示されます。Acronis Backup for VMware には、3 つの主要なインストール オプションが用意されています。

- **ESX(i) ホストへの Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスのインストール**
- **Acronis Backup for VMware Windows エージェントのインストール**
- **インストール ファイルの展開**

1 つ目のオプションでは、リモート ESX(i) ホストにソフトウェアをインストールすることができます（「ESX(i) ホストへの Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスのインストール 『22ページ』」を参照）。

2 つ目のオプションでは、ローカル PC に Acronis Backup for VMware ソフトウェアをインストールできます（Acronis Backup for VMware Windows エージェントのインストール 『23ページ』」を参照）。

3 つ目のオプションでは、インストール ファイルを抽出し（「インストール ファイルの展開 『25ページ』」を参照）、標準インストール ツールを参考に Acronis Backup for VMware を手動でローカル インストールするか、リモートに配置することができます。デフォルトのインストーラを使用せずに Windows エージェント/仮想アプライアンスのインストールを管理したり、トラブルシューティングを実行したりする場合、または完全インストール処理を実施せずに特定のコンポーネントのみをインストールする場合は、いつでもこのオプションを選択できます。

ESX(i) ホストへの Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスの配置が Acronis Backup for VMware Windows エージェントのインストールよりも望ましい理由はいくつかあります。

1. バックアップは LAN フリーです。追加のセットアップ作業は必要ありません（エージェントが実行されている Windows コンピュータに FC/iSCSI ストレージを接続する必要はありません）。
2. 読み取りのために、VM データにアクセスするには、仮想アプライアンスの使用するホットアド（バックアップ中、仮想アプライアンスに仮想ドライブを追加する）方法が最速です。
3. 仮想アプライアンスにはソフトウェア（サードパーティの NFS サーバーやポートをブロックする可能性のあるその他のサービスなど）の互換性の問題がありません。
4. 仮想アプライアンスの保守の方が簡単です。また、専用の Windows コンピュータを用意する必要もありません。完全に仮想化されているインフラストラクチャでは、明らかによりよい選択肢です。
5. 仮想アプライアンスのインストールの方がより簡単に、早くできます。

仮想アプライアンスには、バックアップ時に ESX(i) ホストの CPU およびメモリ リソースを消費するという欠点があります。これは、非常に負荷の高い環境で問題になる可能性があります。この場合、Backup for VMware 機能すべてを管理するためのコンソールとして使用できる物理コンピュータがある場合は、Backup for VMware Windows エージェントをローカルにインストールすることができます。

4.2.1 ESX(i) ホストへの Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスのインストール

Acronis Backup for VMware ソフトウェアは ESX(i) ホスト上に直接インストールすることができます。Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスを ESX(i) ホストにリモート インストールする処理を「配置」と呼びます。必要な Acronis サービスすべてを実行するソフトウェアは、特別にカスタマイズされた OS (小型 Linux ディストリビューション) が動作する別の小型仮想コンピュータへインストールされます。

1. 最初に Acronis Backup for VMware の使用許諾契約を読み、同意のチェックボックスをオンにして **[次へ]** をクリックします。
2. 目的の ESX(i) サーバーまたは vCenter のアクセス資格情報 (IP アドレスまたはホスト名、ユーザー名およびアクセス パスワード) を指定します。 **[次へ]** をクリックすると、インストーラは自動的に接続を確認して認証処理に入ります。
3. その後、インストーラは指定した ESX(i) サーバー上にある Acronis Backup for VMware の旧バージョンやその他の Acronis ソフトウェアをチェックします。既に Acronis 仮想アプライアンスが設定されていて古くなっている場合は、最新版にアップデートするか、または新しい仮想アプライアンスを作成するように要求されます。
4. アプライアンス (VM) の名前を設定し、Acronis Backup for VMware ソフトウェアの配置先となる ESX(i) ホストおよびデータストアを選択します。アプライアンス名は変更するか、デフォルトのまま残すことができます。また、アプライアンス名は ESX(i) ホスト内で一意の名前を持つようにしてください。vCenter とその資格情報を前述したインストール手順で設定した場合は、vCenter 内に含まれる ESX(i) ホストの 1 つをそれぞれドロップダウン リストから選択します。選択肢がない場合は ESX(i) ホストが直接表示されます。

次に、その ESX(i) 上のデータストアを選択します。インストールに必要な十分な領域がデータストアにない場合は警告が表示され、選択したデータストアの領域の一部を解放するか、または別のデータストアを選択するよう提示されます。指定したデータストア上の指定した名前を持つ仮想アプライアンスは一意でなければなりません。既に対象のアプライアンス名が存在する場合は、アプライアンス名またはデータストアを変更する必要があります。

この手順で vCenter を指定した場合は、対応するチェック ボックスで **[vCenter 統合の有効化]** を選択できます。

オプションで、**[ESX(i) ホストの再起動後、自動的に仮想アプライアンスを起動する]** チェック ボックスを選択できます。

5. 仮想アプライアンスのネットワーク設定に関する情報を指定します。この手順には IP アドレス、サブネット マスク、デフォルト ゲートウェイ、DNS サーバー設定などの標準的なネットワーク設定が含まれます。このほか、アプライアンスから自動的にネットワーク設定を取得することも可能です。これは、デフォルトのオプションです。

6. 次の手順では、Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラムに参加するかどうか尋ねられます。
7. インストール ウィザードで必要な手順すべてを行うと、最後に配置操作を実行するための概要 (インストールするコンポーネント、必要な領域、アカウント情報、選択した配置先のホストおよびデータストア) が表示されます。

これで、Acronis Backup for VMware インストーラによって仮想アプライアンス ソフトウェアが配置されます。現在のインストール手順を示す進行状況バーが表示されます。配置が正常に終了すると、アプライアンスが自動的に起動します。すべての処理が完了して確認されるまで待機してください。これには数分かかることがあります。

インストール処理が正常に終了してすべての Acronis Backup for VMware コンポーネントが正しく配置されると、「配置が完了しました」ページが表示されます。新しく配置された Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスに接続するために Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールを実行する場合は、ここでチェックボックスをオンにします。次に **[閉じる]** をクリックします。Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールのデフォルトのログイン/パスワードは **admin:root** です。注意: 最初のログインの後に、**[設定] -> [エージェント パスワード]** ページで、パスワードを変更することを強くお勧めします (詳細については、「エージェント パスワードの管理 『119ページ』」セクションをご参照ください)。ログインは、デフォルトの資格情報が使用されて自動的に実行されます。エージェント パスワード設定を変更した場合、ウェブ コンソールに接続するとデフォルトのログイン画面が表示されます。

問題がある場合、仮想アプライアンス (インストール時に既に配置された部分) は ESX(i) から自動的に削除されます。この場合は、「**Backup for VMware コンポーネントをインストールできませんでした**」ページが表示されます。このページには、インストールされたコンポーネントとインストールに失敗したコンポーネントの概要が示されます。**[ログの表示]** リンクをクリックすると詳細情報が記載されたポップアップ ウィンドウが開き、**[トラブルシューティング]** リンクをクリックすると Acronis ナレッジベース ウェブ サイト

(<http://kb.acronis.com>) の特定エラーの詳細に関するオンライン ページが開きます。この問題を解決するための回答が見つからない場合は、アクロニスのサポート センター 『124ページ』までお問い合わせください。

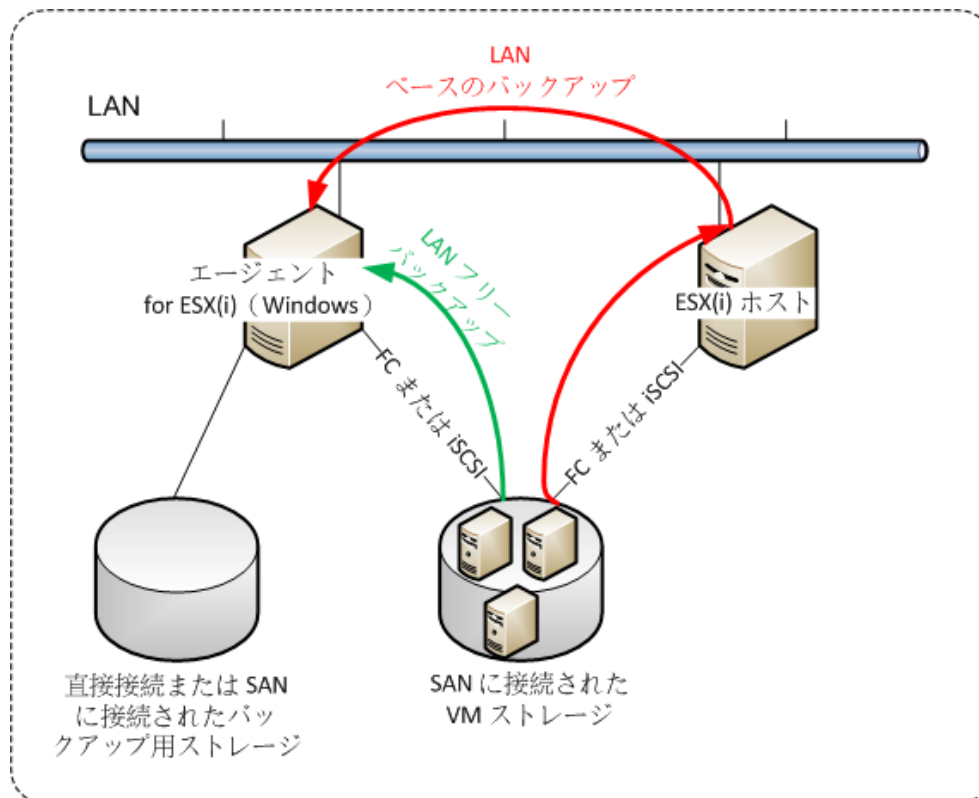
4.2.2 Acronis Backup for VMware Windows エージェントのインストール

運用 ESX(i) ホストの負荷が非常に高く、仮想アプライアンスの実行が望ましくない場合、ESX(i) インフラストラクチャ外部にある物理コンピュータへの Acronis Backup for VMware Windows エージェントのインストールを検討してください。

使用している ESX(i) で SAN に接続されたストレージが使用されている場合は、このエージェントを、同じ SAN に接続されたコンピュータにインストールします。エージェントは、ESX(i) ホストおよび LAN を経由せずにストレージから仮想コンピュータを直接バックアップします。この機能は、LAN フリー バックアップと呼ばれます。

下の図は、LAN ベースのバックアップと LAN フリー バックアップを示しています。ファイバ チャンネル (FC) または iSCSI ストレージ エリア ネットワークがある場合は、仮想コンピュータに LAN フリー アクセスすることができます。バックアップされたデータが LAN

経由で絶対に転送されないようにするには、バックアップをエージェントのコンピュータのローカル ディスク、または SAN に接続されたストレージに保存します。



Acronis Backup for VMware Windows エージェントは、Windows を実行し、システム要件を満たしている任意のコンピュータにインストールできます。ここでは、Windows エージェントのインストールの完了に必要な手順を簡単に説明します。

1. 最初に Acronis Backup for VMware の使用許諾契約を読み、同意のチェックボックスをオンにして [次へ] をクリックします。
2. Acronis サービスの資格情報を指定します。（Acronis Backup for VMware の中核機能を担う）Acronis Managed Machine Service コンポーネントは、サービスとして実行されます。インストールが完了したら、コンポーネントのサービスを実行するアカウントを指定します（このアカウントは、コンピュータで「サービスとしてログオン」権限を持つように自動承認されます）。ここでは、エージェントをインストールしたコンピュータで「ローカル ログオン」権限を持つ Windows ユーザーの資格情報を指定してください。通常は、「Administrators」、「Power Users」、「Users」グループのどのユーザー アカウントでも指定できます。まず HTTP ポート（デフォルトでは 9877 ポート）を設定します。Acronis Backup for VMware エージェントのインストール後に Acronis ウェブ コンソール ページへアクセスするには、ウェブ ブラウザを開いてブラウザのアドレス バーに「https://myserver:port」と入力してください。
ブラウザ（ウェブ コンソール）で、インストールされたエージェントに正常に接続するには、Acronis Backup for VMware がインストールされているローカル PC の名前には、アンダーバー（_）記号を含めないでください。コンピュータで管理者権限を持つユーザーの資格情報を入力する必要があります。
3. ソフトウェアのインストール先を指定するなど、コンポーネントのインストール方法を選択します。デフォルトの Acronis Backup for VMware のインストール先は「C:\Program Files\Acronis」または「C:\Program Files (x86)\Acronis」フォルダです。インストール先は、

新しいフォルダ名を入力するか、参照して選択すると変更できます。フォルダが存在しない場合は、インストール手順の中で自動的に作成されます。**[ディスク使用量]** ボタンは、PC 上のそれぞれのボリュームで使用可能なディスク領域を確認して、インストール先の対象ディスクを選択する場合に役立ちます。選択したボリュームに十分な空き領域がない場合は、必要な領域を解放するか、または別のボリュームを選択するように要求されます。インストール先を指定したら、**[次へ]** をクリックしてください。

4. **Acronis カスタマ エクスペリエンス** プログラムに関する情報に目を通して参加するかどうかを選択したら、**[次へ]** をクリックします。**ACEP** の主な目的は、ソフトウェア機能やカスタマ サービスおよびカスタマ エクスペリエンスを向上するために、ユーザーの統計情報を収集することです。
5. インストール ウィザードで必要な手順をすべて行くと、最後にインストール操作を実行するための概要（インストールするコンポーネント、必要な領域、アカウント情報、選択したインストール先）が表示されます。
6. **[インストール]** をクリックして処理を開始します。**Acronis Backup for VMware** のインストール進行状況バーが表示されます。インストール中に、**Windows** ファイアウォールから **TCP/IP** ポートのブロックを解除するように求められる場合があります。これはアプライアンスを正常に動作させるのに必要です。ブロックを解除するには、**[Windows ファイアウォール]** ダイアログ ボックスを開き、**[ブロックを解除する]** ボタンをクリックしてください。インストールが終了するまで待機してください。これには数分かかることがあります。

インストール処理が正常に終了してすべての **Acronis Backup for VMware** コンポーネントが正しくインストールされると、**[インストールが完了しました]** ページが表示されます。

Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールを実行する場合は、ここで **チェック** ボックスをオンにして、**[閉じる]** をクリックします。

インストール処理が失敗して、すべてまたはいくつかの **Acronis Backup for VMware** コンポーネントが何らかの理由で正常にインストールできなかった場合は、**[Backup for VMware コンポーネントをインストールできませんでした]** ページが表示されます。このページには、インストールされたコンポーネントとインストールに失敗したコンポーネントの概要が示されます。**[ログの表示]** リンクをクリックすると詳細情報が記載されたポップアップ ウィンドウが開き、**[トラブルシューティング]** リンクをクリックすると **Acronis ナレッジ ベース** ウェブ サイト (<http://kb.acronis.com>) の特定エラーの詳細に関するオンライン ページが開きます。この問題を解決するための回答が見つからない場合は、アクロニスのサポート センター 『**124ページ**』までお問い合わせください。

4.2.3 インストール ファイルの取り出し

Acronis Backup for VMware インストール パッケージは、PC からインストール ファイルを抽出して手動で実行し、標準ツールでインストールするオプションを提供します。

Acronis Backup for VMware のインストール メイン メニューで **[インストール ファイルの取り出し]** をクリックします。PC で個別のインストール ファイルとして保存するコンポーネントを次の中から選択します。

- **AcronisESXAppliance.ovf** と 2 つの **.vmdk** ファイル: **Acronis 仮想アプライアンスのインストール ファイル**

- **vmProtectAgent.msi**: Acronis Backup for VMware Windows エージェントのメイン インストール ファイル
- **vmProtectBackupAgent.msi**: Acronis Backup for VMware Backup Agent のインストール ファイル。このエージェントは、ユーザー アカウント制御 (UAC) が有効になっているゲスト OS 内にインストールすることができます。これにより、UAC の制限を受けずに、Backup for VMware Backup オプションを使用できるようになります。**Acronis Backup for VMware Backup Agent** サービスをインストールすると、Acronis Backup for VMware エージェントとの通信チャネルが提供されます。

ファイルの取り出し先を指定して、**[取り出し]** をクリックします。**[ディスク使用量]** ボタンは、PC 上のそれぞれのボリュームで使用可能なディスク領域を確認して、ファイルの取り出し先となる対象ディスクを選択する場合に役立ちます。

取り出し処理が完了したらダイアログを閉じます。

4.2.4 ESX(i) ホストの接続設定

ESX(i) ホストの接続資格情報の設定と構成の詳細については、「**ESX(i) ホストの管理**」『114 ページ』」セクションをご参照ください。

4.2.5 ローカルに接続されたストレージの使用

追加のディスクをエージェント for ESX (i) (Virtual Appliance) に接続して、エージェントによるバックアップ先を、ローカルに接続されたこのストレージに設定できます。通常、この方法でバックアップすると LAN 経由のバックアップより高速であり、ネットワークの帯域幅を消費することはありません。SAN に接続されたストレージの仮想環境全体を 1 つの仮想アプライアンスで管理する場合は、この方法を使用することをお勧めします。

実行中のエージェントに、または OVF テンプレートからエージェントをインポートする際に、ストレージを追加できます。

既に実行中のエージェントにストレージを接続するには

1. VMware vSphere のインベントリで、エージェント for ESX (i) (Virtual Appliance) を右クリックします。
2. 仮想コンピュータの設定を編集してディスクを追加します。ディスク サイズは 10 GB 以上が必要です。ローカルに接続されたストレージのサポート対象最大サイズは 2 TB です。
既存のディスクを追加するタイミングには注意してください。ストレージを作成すると、既存のディスクに存在していたデータはすべて失われます。
3. 仮想アプライアンス コンソールに移動します。**[ストレージの作成]** リンクが、画面の下部に表示されています。表示されていない場合は、**[更新]** をクリックします。
4. **[ストレージの作成]** リンクをクリックし、ディスクを選択して、そのディスクのラベルを指定します。

詳細: ファイル システムの制限により、ラベル長は 16 文字に制限されています。

ローカルに接続されたストレージをバックアップ先として選択するには

バックアップ タスクを作成する場合は、**[ローカル フォルダ]** アイテムを開き、D:\ など、ローカルに接続されたストレージ ドライブを選択します。

ファイルの復元のほか、バックアップに関するその他の操作についても同様の手順で行います。

4.3 Acronis Backup for VMware のアンインストール

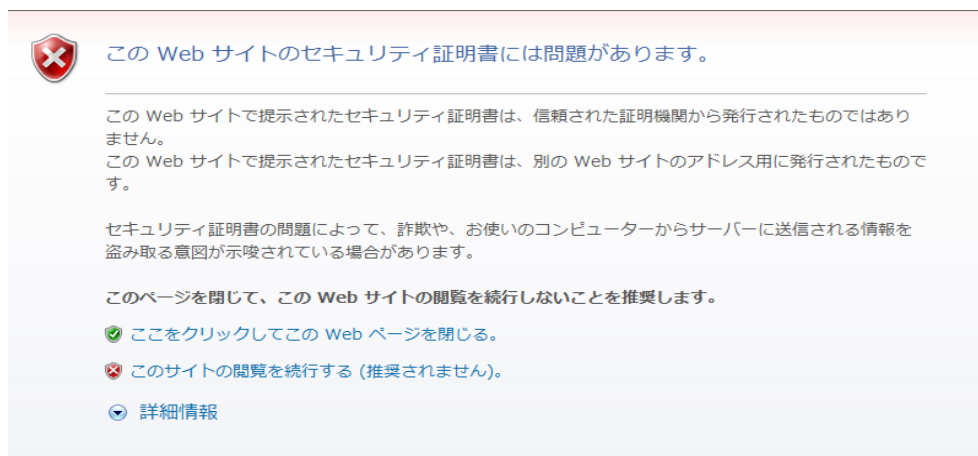
Acronis Backup for VMware Windows エージェントをアンインストールするには、Windows のデフォルトの **[プログラムの追加と削除]** ツールをご利用ください。

Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスをインストール解除するには、VMware vSphere クライアントで ESX(i) ホストから仮想アプライアンスの **VM** を手動で削除する必要があります。

5 はじめに

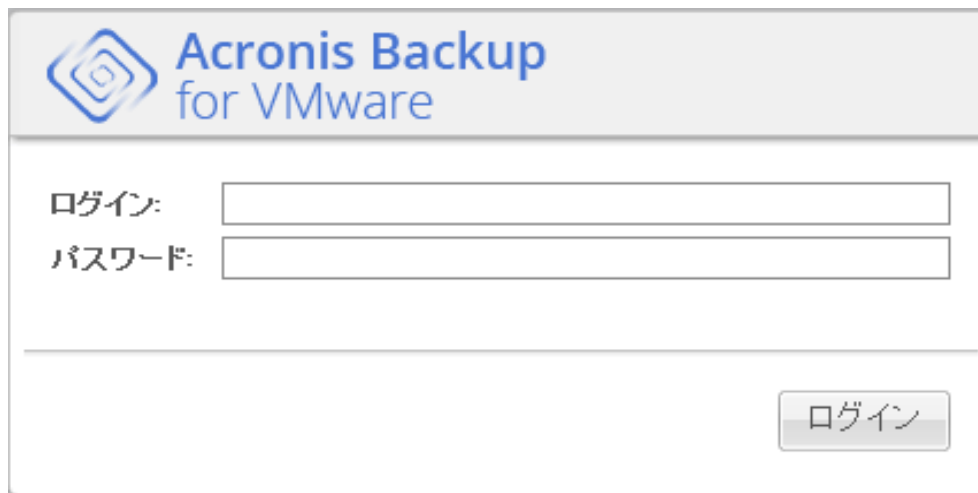
Acronis Backup for VMware をインストールするか、または Acronis Backup for VMware 仮想アプライアンスを配置すれば、Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールを起動できるようになります。ウェブ コンソールはデフォルトのインターネット ブラウザで開きます。

ユーザー インターフェイスを提供する（エージェント側にインストールされた）Acronis Backup for VMware ウェブ サーバーは、自己署名型の証明書を使用します。このため、インターネット ブラウザ経由で Acronis エージェントに接続すると、「このウェブ サイトのセキュリティ証明書には問題があります」というエラー メッセージが表示されることがあります。このメッセージを回避するには、対象の自己署名型証明書を信頼できる証明書のリストに追加してください。正確な手順は、使用するインターネット ブラウザの種類によって異なります。詳細については、ブラウザのヘルプをご参照ください。



証明書エラー メッセージ

インターネット ブラウザでウェブ コンソールを開くと、ログイン画面が表示されます。ここでは、Acronis Backup for VMware のユーザーの資格情報を指定する必要があります。仮想アプライアンス ベースのインストールの場合、デフォルトのログイン/パスワードは **admin:root** です。Windows エージェント ベースのインストールの場合は、エージェントをインストールしたコンピュータで「管理者」権限を持つ Windows ユーザーの資格情報を指定してください。また、ユーザーには「ローカル ログオン」、「ネットワーク経由でコンピュータへアクセス」、「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与してください。これらの権限は、[スタート]->[ファイル名を指定して実行]->**secpolmsc** -> [セキュリティの設定]-> [ローカル ポリシー]->[ユーザー権利の割り当て] から確認できます。



[ログイン] ページ

Acronis Backup for VMware にログインすると、[ダッシュボード] の [クイック スタート] にようこそ画面が表示されます。このセクションの 3 つのボタンをクリックすると、最初に行う操作に関するヒントが表示されます。

- まず、仮想コンピュータの最初のバックアップ タスクを実行するには、[ESX(i) ホスト] セクション 『114ページ』に移動し、これらのコンピュータを実行している vCenter または各 ESX(i) ホストの IP アドレス/ホスト名および資格情報を指定する必要があります。
- ESX(i) ホストを設定しても、ライセンスは自動的にバインドされません。したがって、[ライセンス] ページ 『110ページ』に移動してライセンスを設定する必要があります。
- ESX(i) ホストとライセンスを設定した後、バックアップ操作のすべての手順を説明する、新しいバックアップ タスク ウィザード 『39ページ』を実行できます。

5.1 ダッシュボード管理

Acronis Backup for VMware をインストールして起動すると（ウェブ ベースのコンソールから Acronis Backup for VMware コンポーネントに接続）、デフォルトのダッシュボード画面が表示されます。初期状態では、ダッシュボードには 2 つのセクションがあります。[クイック スタート] と [仮想コンピュータ] の 2 つです。これらのセクションには、vCenter、ESX(i) ホスト、ESX(i) ホストで管理されているコンピュータとマウントされた仮想コンピュータの数など、全般的な情報が表示されます。[ダッシュボード] ビューは、バックアップ タスクを作成すると初期画面（[クイック スタート] ビュー）から変更できます。この変更を行うと、[クイック スタート] セクションが消えて（以下に説明する）追加のセクションが加わります。

Acronis Backup for VMware ダッシュボードのメイン ワークスペース エリアには、現在実行中の全タスクの概要か、実行中のタスクがなければ最後に完了したタスクの詳細が表示されます。ダッシュボードは、バックアップ、復元やその他のタスクの現在の状態に関する概要を提供するための最も使いやすい環境になるように設計されています。成功したタスクや失敗したタスクを色分けすることで、使いやすい環境を実現しています。ダッシュボードには Acronis Backup for VMware で実行できるすべてのアクションが概説されているので、運用に関する意思決定を迅速に行う上で非常に便利なツールです。

ダッシュボードに切り替えるには、左上隅にある **Acronis Backup for VMware** のメイン ロゴをクリックするか、メイン メニューの **[ホーム]** ボタンをクリックします。**[アラート]** を除くダッシュボードのグループはすべて、対応するミニ アイコンでトレイ内に隠すことができます。

[タスク]

[タスク] セクションには、実行中の現行タスクの概要か、実行中のタスクがない場合は最後に完了したタスクの概要が表示されます。進行状況バーにはバックアップ/復元タスクの完了したパーセント値、タスク名、開始時間、残り時間、現在の速度が表示されます。ダッシュボードの **[タスク]** ブロックからは、タスク ログを直接開いたり、タスクを停止したり、**[タスク]** (**[表示]** → **[タスク]**) ページに切り替えたりすることができます。

タスクの統計情報

[タスクの統計情報] セクションには、バックアップ/復元タスクの実行概要が表示されます。図内の情報は視覚的に提供され、迅速かつ簡単に認識および分析することができます。正常に完了したタスクは緑色にマーク付けされます。失敗したタスクは赤色にマーク付けされます。警告と共に終了したタスクは黄色にマーク付けされます。タスクのパーセント値や特定の日付の詳細な統計情報は、それぞれの図をポイントして表示できます。**[時間単位]**、**[日単位]** または **[週単位]** をクリックして統計情報ビューを変更することもできます。

[仮想コンピュータ]

[仮想コンピュータ] セクションには、ホストおよびクラスター (vCenter) の名前が表示され、管理対象の ESX(i) ホストで実行中の VM の合計数のほか、マウントされた仮想コンピュータの数 (「マウントされた VM 『106ページ』」セクションを参照) が示されます。

[ロケーション]

[ロケーション] セクションには、バックアップの保存先の状態に関する全統計情報が表示されます。ここにはバックアップの総数と、使用中の領域、その他によって使用中の領域、空き領域に関する情報 (すべて MB/GB 単位およびパーセント値) が表示されます。使用中の領域とは、Acronis バックアップが使用する領域のことです。その他によって使用中の領域とは、バックアップ アーカイブ以外のデータによって使用されている領域です。空き領域の統計情報は、その値の取得がサポートされているロケーションでのみ利用可能です (たとえば、FTP ロケーション用のフィールドはありません)。このほか **[ロケーション]** セクションでは、下部のリンクをクリックして **[復元ポイント]** ビューに直接切り替えることができます。

5.2 ウェブ コンソールの使用

5.2.1 [リボン] タブ

画面上部のリボン メニューで、ソフトウェアの管理と全操作機能を実行できます。 トップメニューで利用できる基本的な **Acronis Backup for VMware** の機能については、以降のセクションで説明します。

Acronis Backup for VMware のリボン メニューには、**[アクション]**、**[表示]**、**[設定]** という 3 つのメイン タブがあります。4 つ目として付加される Acronis タブは、ユーザーが選択中の **[表示]** または **[設定]** 操作に応じて動的に表示されます。

[ダッシュボード] ビュー

リボン バーに必ず表示される **[ホーム]** ボタンからは **[ダッシュボード]** ビューに移動できます。ダッシュボードの設定については、「ダッシュボード管理 『29ページ』」セクションをご参照ください。

1) [アクション] タブ

最初の **[アクション]** タブには Acronis Backup for VMware の基本機能が含まれており、次の基本タスクを開始できます。

a. バックアップ タスク

[バックアップ] ボタンを使用して**新しいバックアップ タスク** ウィザードを実行します。ウィザードの設定については、「バックアップ 『39ページ』」セクションをご参照ください。

b. レプリケーション タスク

[レプリケーション] ボタンを使用して**新しいレプリケーション タスク** ウィザードを実行します。ウィザードの設定については、「新しいレプリケーション タスク 『55ページ』」セクションをご参照ください。

c. 復元タスク

これは復元タスクのドロップダウン メニューです。 **[VM 全体]** ボタンは、**新しい復元タスク** ウィザードを実行します。 **[ファイルとフォルダ]** ボタンは、**ファイルの復元** ウィザードを実行します。 **[Microsoft Exchange Server]**、**[Microsoft SQL Server]**、および **[Microsoft SharePoint Server データ]** ボタンは、それぞれの展開ウィザードを実行します。ウィザードとウィザードの設定については、「復元 『63ページ』」セクションをご参照ください。

d. バックアップから VM を実行タスク

[バックアップから VM を実行] ボタンを使用してバックアップ タスク ウィザードから VM を実行します。ウィザードの設定については、「バックアップから VM を実行 『80ページ』」セクションをご参照ください。

e. ベリファイ タスク

[ベリファイ] ボタンを使用して**新しいベリファイ タスク**を開始します。このタスクについては、「バックアップのベリファイ 『104ページ』」セクションをご参照ください。

f. ESXi 設定のバックアップ タスク

[ESXi 構成バックアップ] ボタンを使用して**新しい ESXi バックアップ タスク** ウィザードを実行します。ウィザードの設定については、「ESX(i) ホストのベア メタル リカバリ 『86ページ』」セクションをご参照ください。

2) [表示] タブ

2 つ目の **[表示]** タブには Acronis Backup for VMware の基本機能が含まれており、次の基本ビュー間をすばやく移動して切り替えることができます。

a. [タスク] ビュー

[タスク] ビューへのリンクです。タスクの管理については、「タスクの管理『93ページ』」セクションをご参照ください。

b. [復元ポイント] ビュー

[復元ポイント] ビューへのリンクです。復元ポイントの管理については、「復元ポイントの管理『98ページ』」セクションをご参照ください。

c. [レプリカ] ビュー

[レプリカ] ビューへのリンクです。レプリケーションされた VM の管理については、「レプリケーションされた VM の管理『58ページ』」セクションをご参照ください。

d. [マウントされた VM] ビュー

[マウントされた VM] ビューへのリンクです。マウントされた仮想コンピュータの管理については、「マウントされた VM の管理『106ページ』」セクションをご参照ください。

e. [ログの表示] ビュー

[ログの表示] ビューへのリンクです。ログの管理については、「ログの管理『107ページ』」セクションをご参照ください。

3) [設定] タブ

3 つ目の **[設定]** タブには Acronis Backup for VMware 構成の基本ツールが含まれており、基本的なバックアップ/復元処理のデフォルト設定やその他の設定を指定できます。

a. ESX(i) ホスト

[ESX(i) ホストの管理] ページへのリンクです。ESX(i) ホストの管理については、「ESX(i) ホストの管理『114ページ』」セクションをご参照ください。

b. ライセンス

[ライセンスの管理] ページへのリンクです。ライセンスの管理については、「ライセンスの管理『110ページ』」セクションをご参照ください。

c. [設定]

[エージェント設定] ページには、**[Acronis Cloud Backup サブスクリプション]** 設定、**[Acronis Cloud Backup プロキシ]** 設定、**[エージェント パスワード]** 設定、および **[エクスポート/インポート]** 構成の設定が含まれています。

このほか、**[設定]** タブにはデフォルトの **[バックアップ設定]** および **[復元設定]** の 2 つのボタンがあります。**[バックアップ設定]** または **[復元設定]** ボタンをクリックすると、バックアップ/復元の設定ページが開きます。ここでは、すべてのバックアップ/復元タスクの

デフォルト値を設定できます。これらのバックアップ/復元設定とその他の設定の詳細については、「設定の管理 『117ページ』」セクションをご参照ください。

4) Backup for VMware の動的なタブ

これはリボン上に表示される動的なタブであり、**[表示]** タブで現在選択されているアクションに応じて変化します。この動的なタブには、現在の **[表示]** タブのアクションに特化したボタンが表示されます。

a. **[表示]** -> **[復元ポイント]**

[復元ポイント] ビューを選択すると、リボン メニューに **[復元ポイント]** タブが表示されます。**[復元ポイント]** 管理ページについては、「復元ポイントの管理 『98ページ』」セクションをご参照ください。

b. **[表示]** -> **[レプリカ]**

[レプリカ] ビューを選択すると、リボン メニューに **[レプリカ]** タブが表示されます。**[レプリカ]** 管理ページについては、「レプリカの管理 『55ページ』」セクションをご参照ください。

c. **[表示]** -> **[マウントされた VM]**

[マウントされた VM] ビューを選択すると、リボン メニューに **[マウントされた VM]** タブが表示されます。**[マウントされた VM]** ページについては、「マウントされた VM の管理 『106ページ』」セクションをご参照ください。

d. **[表示]** -> **[ログの表示]**

[ログの表示] ビューを選択すると、リボン メニューに **[ログ]** タブが表示されます。**[ログ]** 管理ページについては、「ログの管理 『107ページ』」セクションをご参照ください。

5.2.2 **[ログアウト]** リンク

Acronis Backup for VMware の右上隅には現在のユーザー名と **[ログアウト]** ボタンが表示されており、プログラムを終了するか、または別のユーザー名で再ログインすることができます。

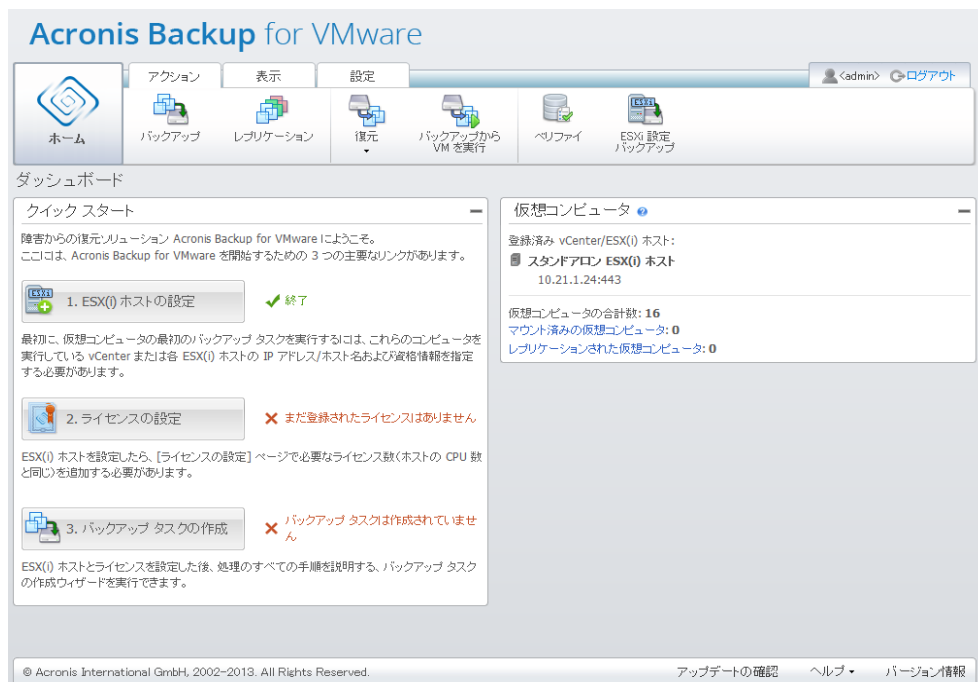
6 vCenter 統合

vSphere の仮想インフラストラクチャを管理するための主要なツールは、VMware vSphere クライアントです。VMware vSphere クライアントには、ネイティブのバックアップ/復元機能は用意されていませんが、この重要な操作の管理に別のツールを実行すると不便な場合があります。Acronis Backup for VMware には、vCenter 統合が導入されています。vCenter 統合を使用すれば、VMware vSphere クライアントから直接、基本的なバックアップおよび復元機能を利用でき、Acronis Backup for VMware ウェブ インターフェイスを実行する必要はありません。vCenter 統合は、シック VMware vSphere Client でのみ有効で、VMware vSphere Web Client では Acronis Backup for VMware 機能を使用できません。

vCenter 統合は、vCenter が Acronis Backup for VMware エージェントに登録されている場合にのみ利用可能です。vCenter が登録されていない場合は、そのような統合はできません。また、vCenter が Backup for VMware エージェント構成から削除されると、統合は自動的に無効になります。

Acronis Backup for VMware vCenter 統合は、Backup for VMware ウェブ インターフェイスと vCenter プラグイン マネージャのいずれからでも、手動で有効および無効にすることができます。vCenter 統合を有効にするには、[設定] -> [ESX (i) ホスト] に移動して、新しい vCenter を追加する際に **[vCenter 統合の有効化]** チェック ボックスを選択するか、**[vCenter 統合の有効化]** ボタンをクリックします。機能を無効にするには、**[vCenter 統合の無効化]** をクリックします。Acronis Backup for VMware のログイン画面には、統合が有効にされているエージェントの IP アドレスが表示されます。

vCenter に接続された vSphere クライアントでは、**[インベントリ] -> [ソリューションおよびアプリケーション] -> [Acronis Backup for VMware.0]** で統合を確認できます。



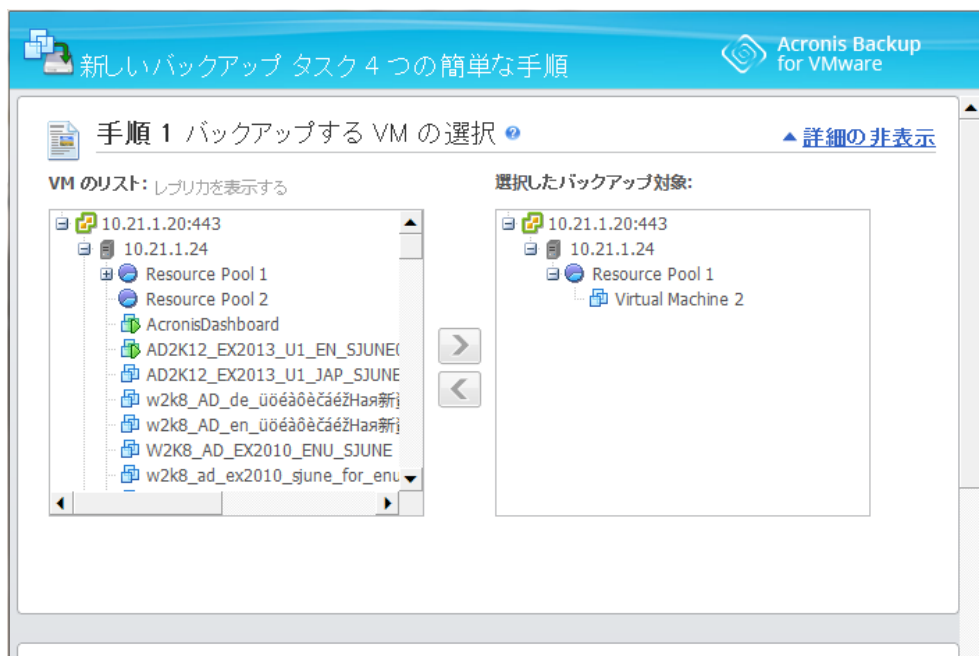
vCenter 統合の仕組み

vCenter 統合を利用すると、バックアップ タスク、復元タスク、レプリケーション タスクなどを作成し、VMware vSphere インターフェイス内で直接それらのタスクの進行状況を表示できます。

VMware vSphere ツリー リスト内で、いずれかの仮想コンピュータ、vApp/リソース プール、または ESX(i) ホスト/クラスタを選択します。選択したアイテムを右クリックしてコンテキスト メニューを開きます。コンテキスト メニューには、**[Acronis Backup for VMware のバックアップ]** オプションと **[Acronis Backup for VMware の復元]** オプションがあります。いずれかのオプションを選択すると、Acronis のポップアップが開き、バックアップ/復元ウィザードが開始され、バックアップ/復元タスクを作成してすぐに実装することができます。

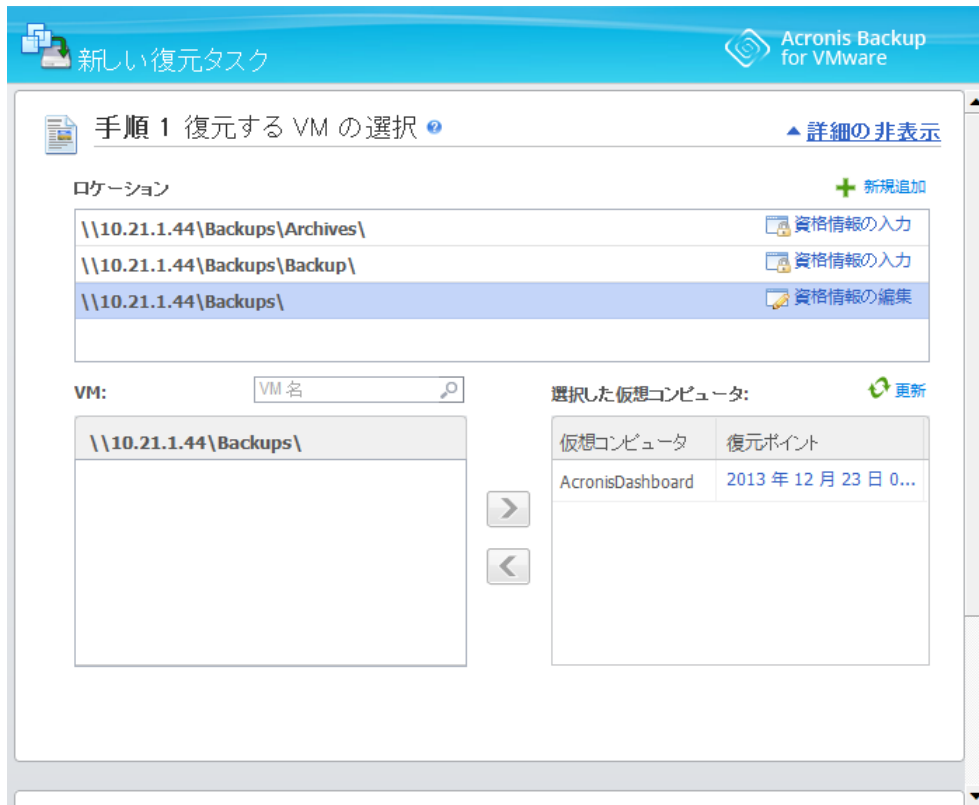
VMware vSphere インターフェイスにおけるバックアップ/復元ウィザードの画面（バックアップ/復元設定を含む）は、Acronis Backup for VMware の画面とまったく同じです。

標準の**新しいバックアップ タスク** ウィザードは、4 つの手順で構成されています。これらの手順の詳細については、「仮想コンピュータのバックアップの作成」『39ページ』セクションをご参照ください。VMware vSphere におけるウィザードの最初の手順では、**[Acronis のバックアップ]** ポップアップに、右クリックして選択した VM が事前に入力されていますが、そのデフォルトの選択は変更することが可能です。



vCenter 統合、新しいバックアップ タスク、手順 1

標準の**新しい復元タスク** ウィザードは、3 つの手順で構成されています。これらの手順の詳細については、「仮想コンピュータのバックアップの復元」『63ページ』セクションをご参照ください。VMware vSphere におけるウィザードの最初の手順では、**[Acronis の復元]** ポップアップに、右クリックして選択した VM が事前に入力されています。最初に検出された**最近使用したロケーション**にある最新の使用可能な復元ポイントが選択されます。



vCenter 統合、新しい復元タスク、手順 1

vSphere クライアントの **[VM とテンプレート]** ビューでフォルダを操作することはできないので注意してください。フォルダには、仮想コンピュータに関する Acronis コンテキストメニュー アイテムのみが表示されます。

vCenter 統合は特定の Backup for VMware エージェントによって管理されることに注意してください。そのため、エージェントに vCenter 側からアクセスできない場合、コンテキストメニューから使用できる機能が正常に動作しなくなります。

VMware vSphere と Acronis Backup for VMware の同期

vCenter 統合が有効になっている場合、VMware vSphere クライアントで実行されるすべての操作は、メインの Acronis Backup for VMware インターフェイスにミラーリングされます。同期される操作は、新しいタスクとそのタスクの進行状況です。**[最近使用したタスク]** セクションには、VMware vSphere クライアントでコンテキストメニューから実行されたバックアップ/復元などのタスクの進行状況が表示されます。また、VMware vSphere クライアントのコンテキストメニュー オプションを介して新しいロケーションからのバックアップまたは新しいロケーションへの復元を実行すると、Backup for VMware の最近使用したロケーションもアップデートされます。

同様に、Acronis Backup for VMware によって実行されたすべてのバックアップ/復元などのタスクは、VMware vSphere クライアントに**タスク**として登録されます。

7 集中管理ダッシュボード

Acronis Backup for VMware 集中管理ダッシュボードは、効果的な仮想インフラストラクチャ監視ツールです。このツールを使用すると、インストールされた 1 つ、または複数の **Acronis Backup for VMware** エージェントの現在のステータスを取得し、各エージェントに接続して、すぐに管理できます。

この集中管理ダッシュボードは、複数のエージェントから 1 つのウェブ コンソールへ情報を収集するのに役立つ設計になっています。3 つから 7 つの **Backup for VMware** エージェントがインストールされているような大規模な環境で **Acronis** ソフトウェアを使用する場合、このツールはすべてのエージェントを一度に追跡できるため非常に便利です。シンプルなダッシュボードにより時間が節約でき、またバックアップ ソリューションをより集中して管理できるので、起こり得る問題が発生したときに、その場所で修正作業を始められます。

ツールの使用を開始するには、まず **Acronis Backup for VMware** インストール パッケージと共に提供されるインストール ファイルを実行して、仮想アプライアンスとしてツールをインストールします。ダッシュボードをインストールして開くと、コンソールに 1 つまたは複数の **Acronis Backup for VMware** エージェントを追加できます。リボンの **[新規追加]** ボタンをクリックして、**Backup for VMware** エージェントにアクセスするリンク (IP アドレス、ポート) とログイン資格情報を指定します。ダッシュボードとエージェントの間の接続は、**HTTPS** セキュア プロトコルを介して実行されます。「**Acronis Appliance 1**」のように、リストに表示されるとおりに、エージェント名を指定します。次に **[新規追加]** をクリックします。

Equation 1: DO NOT
TRANSLATE



集中管理ダッシュボード

ダッシュボードには、追加されたすべての **Backup for VMware** エージェントがアラートと警告の数でソートされ、個別のプレートとして表示されます。各エージェントについて、**[編集]** ボタンをクリックして、アドレス、ポート、アクセス資格情報、およびエージェント名を変更するか、**[削除]** ボタンをクリックし、削除を確認してダッシュボードから削除できます。

ダッシュボードには、各エージェントの現在のステータスが表示されます。収集された情報は、5 分ごとに自動的に更新されます。または、**[更新]** ボタンをクリックして、手動で更新できます。

各エージェントについて、タスクとアラートに関する情報を表示できます。

アラート セクションに色分けされた現在のアラート数を表示できます。重大なアラートが 1 つ以上ある場合は赤の「x」記号、情報アラート（警告メッセージ）がある場合は黄色の「!」記号、アラートがない場合は緑色のチェック マークが表示されます。エージェント名またはエージェントのアラートをクリックすると、各 **Backup for VMware** エージェントのダッシュボード ビューが開きます（コンソールが新しいタブ/ウィンドウで開く）。ここでアラートを確認し、問題を修正して、アラートを却下できます。却下されたアラートは集中管理ダッシュボードに表示されなくなります。

タスク セクションには、正常に完了したタスク、警告が発生したタスク、および失敗したタスクが表示されます。タスクをクリックすると、各 **Backup for VMware** エージェントのタスク ビューに直接移動できます。

8 バックアップ

新しいバックアップ タスクを作成するには、ダッシュボードの **[クイック スタート]** の **[バックアップ タスクの作成]** をクリックするか、メイン メニューの **[アクション]** タブで **[バックアップ]** をクリックします。メイン ワークスペース エリアに**新しいバックアップ タスク** ウィザードが開いたら、必要な情報を指定して新規作成するバックアップ タスクに必要な設定をすべて行うように求められます。このウィザードは、同じ領域に順番に表示される次の 4 つの手順で構成されています。

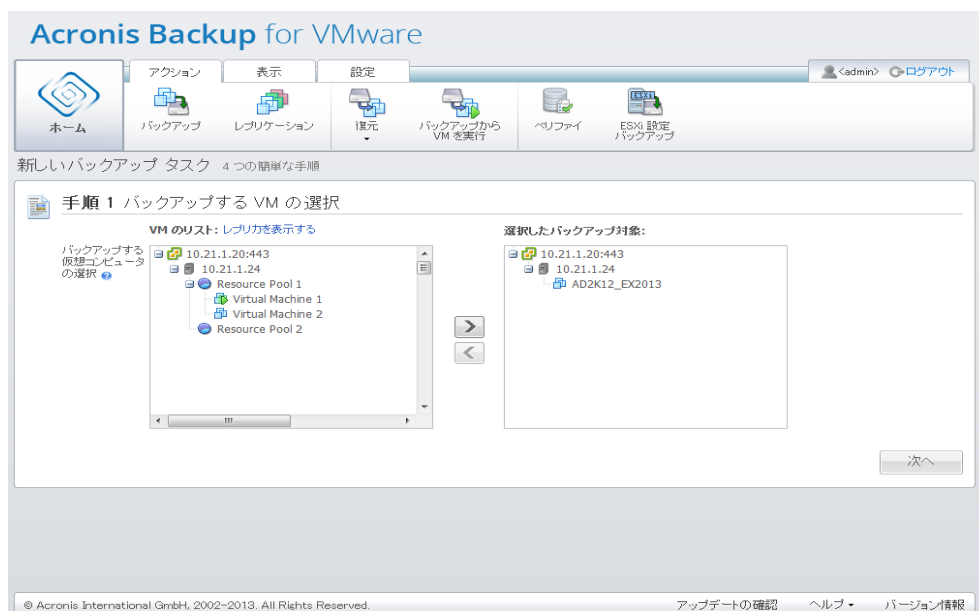
- バックアップする VM の選択
- バックアップの実行時期
- バックアップの保存先
- バックアップ方法

以降のセクションで、ウィザードのこれら 4 つの手順とオプションについて説明します。

8.1 バックアップする VM の選択

最初の手順では、バックアップする仮想コンピュータ（または vApp）を選択します。左側には、仮想コンピュータのリストと共に、Acronis Backup for VMware エージェントで管理されるすべての ESX(i) ホストと vCenter が表示されます。バックアップする必要がある仮想コンピュータがこのリストにない場合は、**[設定] -> [ESX(i) ホスト]** ページで、対応する ESX(i) ホストが追加されているかどうかを確認してください。

仮想コンピュータ（または vApps）を選択するには、**[>]** および **[<]** ボタンを使用して、パタフライ コントロールの左側から右側へコンピュータを移動してください。右側のリストに、バックアップ対象として選択された仮想コンピュータがすべて表示されます。このバックアップ リストに VM を追加するには **[>]** ボタンを使用し、リストから VM を削除するには **[<]** ボタンを使用します。VM はダブルクリックして選択することもできます。



新しいバックアップ タスク ウィザード、手順 1: バックアップする VM の選択

コンピュータのダイナミック グループをバックアップするには、ツリー内の上部ユニット (ESX(i) ホストまたは VM フォルダなど) を選択し、同じ **[>]** ボタンで右側のリストに移動します。その結果、対象グループ内で稼動するすべてのコンピュータは自動的にバックアップ リストに含まれます。さらに、このグループで作成された新しいコンピュータは、現在のバックアップ タスクにより自動的にバックアップされます。

または、レプリカ VM もバックアップできます (レプリケーション セクション 『55 ページ』を参照してください)。そのためには、VM のリストの上の **[レプリカを表示する]** ボタンをクリックして、バックアップするレプリカ VM を選択します。レプリカ VM に対するレプリケーションとレプリカ VM からのバックアップを同時に実行することは、お勧めしません。スケジュールの設定は慎重に行ってください。

バックアップする VM (複数可) を選択したら、**[次へ]** をクリックし、最初の手順を終了して次に進みます。

8.2 バックアップの実行時期

バックアップ タスクの作成ウィザードの手順 2 では、仮想コンピュータのデータをバックアップするスケジュールを定義します。バックアップをスケジュールするオプションと、1 回限りのバックアップ タスクを作成する ([スケジュールせず、要求に応じて実行する]) オプションの 2 種類が用意されています。デフォルトでは、バックアップが毎日 12:00 に作成されるスケジュールになっています。デフォルト値を変更するか、[スケジュールせず、要求に応じて実行する] (つまり、バックアップ タスクはスケジュールに従って実行されない) を選択します。タスクはバックアップ タスク作成直後に開始するか、または **[タスク] ビュー** から手動で実行できます。

データをバックアップする実行間隔のスケジュールを設定します。Acronis Backup for VMware では、Windows および Linux オペレーティング システムで週次スケジュールと機能を設定できます。

[スケジュール] 領域で **[<...> 週ごとの<...>曜日]** などの該当するパラメータを選択します。この場合は、タスクを実行したい周期の週数と曜日を指定します。たとえば、**[2 週ごとの月曜日]** に設定すると、2 週間に 1 回、月曜日にタスクが実行されます。

[スケジュールしたタスクを次の時間に実行:] 領域で、**[次の時間に 1 回のみ実行:<...>]** または **[毎:<...> 開始:<...> 終了:<...>]** のいずれかを選択します。

[次の時間に 1 回:<...>] の場合は、タスクを 1 回だけ実行する時刻を設定します。

[毎:<...> 開始:<...> 終了:<...>] の場合は、指定した周期でタスクを実行する回数を設定します。たとえば、**[繰り返す:1 時間ごと、開始: 午前 10:00:00、終了: 午後 10:00:00]** というタスクのスケジュールを設定すると、午前 10 時から午後 10 時まで 1 日の間にタスクが 12 回実行されます。

ここで、スケジュールの例をいくつか紹介します。

「1 週間に 1 日」のスケジュール

これは、一般的に利用されるバックアップ スケジュールです。 バックアップ タスクを毎週金曜日の午後 10 時に実行する必要がある場合は、パラメータを次のように設定します。

1. [1 週ごとの金曜日]
2. [次の時間に 1 回のみ実行: 午後 10:00:00]

「平日」のスケジュール

毎週、月曜日から金曜日まで平日にタスクを実行します。 平日の午後 9 時に、1 日 1 回だけタスクを開始します。 スケジュールのパラメータは次のように設定されます。

1. [1 週ごとの平日][平日] チェック ボックスを選択すると、対応するチェック ボックス ([月]、[火]、[水]、[木]、[金]) が自動的に選択され、残りの 2 つの曜日は選択されません。
2. [次の時間に 1 回のみ実行: 午後 09:00:00]

[バックアップの実行時期] でバックアップ スケジュールを設定したら [次へ] をクリックし、ウィザードの最後の手順に進みます。

8.3 バックアップ先

手順 3 では、バックアップのアーカイブ先を設定します。 [参照] ボタンをクリックして、保存先を選択します。 参照オプションが含まれたポップアップ ウィンドウが表示されたら、パスと一連のアーカイブ名を定義または変更してください。 最近使用したロケーションの一覧から、以前に使用したロケーションを選択するか、または新しいロケーションを設定できます。

Acronis Backup for VMware

ホーム バックアップ レプリケーション 復元 バックアップから VM を実行 ペリフアイ ESXi 設定 バックアップ

新しいバックアップ タスク 4つの簡単な手順

手順 1 バックアップする VM の選択 [▼ 詳細の表示](#)
VM(1): Virtual Machine 2

手順 2 バックアップの実行時期 [▼ 詳細の表示](#)
バックアップをスケジュールする: 1 週ごとの 日、月、火、水、木、金、土の 12:00:00 にバックアップを作成します。

手順 3 バックアップ先

最近使用したロケーション: [参照](#)
ロケーションを選択、または新しいロケーションを定義してください。
アーカイブ名:
📌 ロケーションを選択してください

[次へ](#)

© Acronis International GmbH, 2002-2013. All Rights Reserved. [アップデートの確認](#) [ヘルプ](#) [バージョン情報](#)

新しいバックアップ タスク ウィザード、手順 3: バックアップの保存先

[アーカイブ名] フィールドには、**[参照]** ポップアップで選択したアーカイブの名前が表示されます。

[参照] ポップアップの左側には、次のリストが表示されます。

- Cloud Backup Storage
- 最近使用したロケーション
- ローカル フォルダ
- ネットワーク フォルダ
- FTP サーバー
- SFTP サーバー

お使いの Backup for VMware エージェントにライセンスが追加されていない場合、バックアップの保存先は Acronis Cloud Backup Storage のみです。

左側の参照ツリーからバックアップの保存先の種類を選択します。 選択したロケーション (Cloud Backup Storage、ネットワーク フォルダ、または FTP/SFTP サーバー) で認証が要求される場合、右側のペインに資格情報を指定するダイアログが最初に表示されます。 ログインが成功すると、このペインに選択した保存先の内容、つまり、そのロケーション内のアーカイブが表示されます。

ただし、地域によっては、Acronis Backup for VMware Cloud Backup Storage を使用できない可能性があります。 詳細については、<http://www.acronis.com/my/cloud-backup/corporate> をご覧ください。

Acronis Cloud Backup Storage のアプリケーション アウェア バックアップ内では、バックアップのベリファイ操作とバックアップから VM を実行操作はできないことに注意してください。

FTP/SFTP サーバーへのバックアップを正常に実行するには、そのサーバー上の該当するファイルとフォルダに対する削除権限が必要です。

ツリーでロケーションを参照する代わりに、下部の対応する **[ロケーション]** フィールドにパスを手入力し、**[参照]** ボタンをクリックしてそのロケーションを探す方法もあります。 この場合は、右側のペインに同じ認証ダイアログが表示され、ログインおよびパスワードを入力するように求められます。

画面下部で該当する **[アーカイブ名]** フィールドにアーカイブ名を入力します。 複数のバックアップ タスクで 1 つの同じアーカイブにデータを書き込むことは推奨されません。 他のバックアップ タスクでアーカイブに適用される保持ルールによって、予測できない結果が発生する場合があります。

新しいバックアップのアーカイブの種類を選択します。 Acronis Backup for VMware では、標準的なアーカイブ (レガシー モード) と Always Incremental されるアーカイブの 2 種類の基本的なアーカイブ方法のいずれかを使用して、バックアップ データを保存できます。 FTP/sFTP/Acronis Cloud Storage ロケーションでは、アーカイブの種類として「Always Incremental」はサポートされていません。

レガシー アーカイブの場合、**[バックアップをそれぞれ個別のファイルに保存]** オプションを選択します (「複数ファイルのバックアップ スキーム (レガシー モード) 『10ページ』」セクションを参照)。 または、**[1 つのファイルにすべてのバックアップを保存 (推奨)]** オプションを選択します。 つまり、アーカイブは新しく強化された「Always Incremental」形式

になります（「単一ファイルのバックアップ スキーム (Always Incremental)」『11ページ』」セクションを参照）。

既存のバックアップ タスクを編集したり、バックアップ ロケーションに既存のアーカイブを選択したりする場合、この設定は表示されません。

アーカイブ内部におけるバックアップ管理の保持ルールを定義する場合は、**[古いバックアップを自動的に削除]** チェック ボックスをオンにします。各オプションを使用できるかどうかは、前の手順（「バックアップの実行時期」セクション）で設定したスケジュールと、選択したアーカイブ フォーマットによって異なります。たとえば、スケジュールされていないバックアップ タスクの場合は、Grandfather-Father-Son (GFS) クリーンアップ スキームが使用できません。**[繰り返す:<...>]** の設定を使用して完全なバックアップを作成するオプションは、**[1 つのファイルにすべてのバックアップを保存]** オプションでは使用できません（常に増分アーカイブ フォーマットでは、完全バックアップを行う意味がないため）。次に、各保持ルールについて説明します。

1. [未指定]

保持ルールが指定されていない場合、プログラムされたバックアップ管理は実行されません。つまり、すべてのバックアップがアーカイブ内に無制限に保存されます。

2. [シンプル クリーンアップ] スキーム

[シンプル クリーンアップ] スキームを選択すると、アーカイブ内に一定数のバックアップを保存したり、一定期間だけバックアップを保存したりすることができます。

The screenshot displays the 'Acronis Backup for VMware' configuration window, specifically '手順 3 バックアップ先' (Step 3: Backup Destination). The 'ロケーション' (Location) is set to '10.21.1.4\Backups\Archives' and the 'アーカイブ名' (Archive Name) is 'Archive'. Under 'バックアップの種類' (Backup Type), '1 つのファイルにすべてのバックアップを保存' (Save all backups in one file) is selected. In the '古いバックアップを自動的に削除' (Automatically delete old backups) section, the 'シンプル クリーンアップ スキーム' (Simple Cleanup Scheme) is chosen. The retention rule is configured to 'バックアップが次より古くなった場合' (When backup becomes older than next) for '30' days. The checkbox '残っている最後のバックアップを削除しない' (Do not delete the last remaining backup) is checked. At the bottom, there is an option 'バックアップをセカンダリ ロケーションにコピー' (Copy backup to secondary location) which is currently unchecked. The '次へ' (Next) button is visible at the bottom right.

バックアップ作成ウィザード、手順 3: バックアップ先、[シンプル クリーンアップ] スキーム、保持期間を過ぎたバックアップの削除

2 番目のオプションでは、バックアップ数が <...> 個を超えた場合にアーカイブをクリーンアップできます。この数値を「1」に設定すると、Always Incremental アーカイブ モードの場合は統合的な完全バックアップが作成されます。つまり、増分バックアップでは、バックアップの完了後に古くなった復元ポイントの内容が削除されます。アーカイブの保持数が 1 よりも大きい場合、クリーンアップは Always Incremental アーカイブ モードに従って実行されます（詳細については、この『ユーザー マニュアル』の「単一ファイルのバックアップ スキーム (Always Incremental モード) 『11 ページ』」セクションをご参照ください）。

3. [GFS クリーンアップ] スキーム

これは、一定の数だけ日単位、週単位、および月単位のバックアップを保存できる、一般的な「Grandfather-Father-Son」スキームです。保持する必要があるバックアップの数を日単位、週単位、月単位で指定します。1 日の間に作成されたすべてのバックアップは「日単位」のバックアップとみなされ、データが保存期限切れになるとすべて削除されます。同じルールが「週単位」のバックアップにも適用されます。

The screenshot shows the 'Acronis Backup for VMware' configuration wizard. The 'Backup Destination' step is active, showing the backup path as 'V:\10.21.1.44\Backups\Archives\Archive'. The backup type is set to 'GFS Clean Up Scheme'. The retention policy is configured to keep the last 5 daily backups, 1 weekly backup, and 1 monthly backup. The schedule is set to 'Weekly on Sunday at 12:00:00'.

バックアップ作成ウィザード、手順 3: バックアップ先、[GFS クリーンアップ] スキーム

保持ルールは、バックアップ タスクの**実行前**に限って適用されることに注意してください。これは、Always Incremental アーカイブではディスク領域が解放されないため、バックアップ後に復元ポイントを削除する必要がないためです。バックアップの実行後、設定された保持ルールに従って削除する必要がある復元ポイントが新たに多く発生した場合も、これらは次のバックアップの実行前になって初めて削除されます。たとえば、**[次の場合にバックアップとアーカイブを削除します]**を選択し、**[バックアップが次より古い]**が 3 または**[アーカイブ内のバックアップの数が次の数を超える]**が 3 などの保持ルールを設定した場合、実際には 3 個ではなく最大 4 個のバックアップがアーカイブに保存されることになります。

指定した保持ルールに従ってバックアップが削除の対象になっても、必ずアーカイブ内に少なくとも **1 つのバックアップ** がそのまま残されます。これにより、復元に使用可能なバックアップが少なくとも 1 つ、アーカイブ内に常に存在することになります。これは、**[残っている最後のバックアップを削除しない]** チェック ボックスをオフにするまで有効です（デフォルトではオン）。このチェック ボックスでは、残っている有効な復元ポイントが 1 つだけになり、その復元ポイントが削除対象になった場合のプログラムの動作を定義できます。これは、バックアップ タスクを仮想コンピュータのグループに適用しており、適用したコンピュータの 1 つが ESX(i) ホストから削除されると、そのコンピュータがバックアップできなくなる場合などに当てはまります。任意の時点で（指定した保持ルールに従い）、削除された VM のすべてのバックアップが削除対象になります。したがって、**[残っている最後のバックアップを削除しない]** チェック ボックスの設定により、残っている最後のバックアップが削除されるのを防止したり、強制的に削除したりできます。

バックアップを複数の異なるロケーションに保存することにより、VM 環境を保護できます。デフォルトでは、バックアップ タスクはすべてのバックアップ アーカイブを単一のストレージに保存します。ただし、作成したバックアップを 2 番目のロケーションにある別のアーカイブ ストレージにコピーするようにタスクを構成できます。

[バックアップを 2 番目のロケーションにコピー] チェック ボックスをオンにします。

以下の設定により、バックアップ コピー オプションを構成できます。バックアップを保存する 2 番目のロケーションと**アーカイブ名**を選択します。**[参照]** をクリックし、使用可能なロケーションのリストから選択します。

[コピーの実行時期] ドロップダウン リストから、各バックアップが作成された直後に 2 番目のロケーションにバックアップをコピーするかどうかを選択します。または、バックアップ スケジュール日以外の、バックアップのコピーを実行する具体的な日を指定できます。この場合は、**[失われた復元ポイントをすべてコピーする]** または **[最後に作成された復元ポイントのみをコピーする]** も選択できます。

[最後に作成された復元ポイントのみをコピーする] オプションは、選択した最初のロケーションにアクセスできない場合があるときに役立ちます。**[失われた復元ポイントをすべてコピーする]** オプションを選択し、メイン ロケーションで最初のストレージの保持ルールが実行された場合、これらの復元ポイントが 2 番目のロケーションにコピーされていない場合でも、これらのルールにより、削除する必要がある復元ポイントは削除されます。このため、保持ルールが実行されるとき、復元ポイントが既に 2 番目のストレージにコピーされているかどうかは確認されません。

デフォルトでは、コピーされたバックアップのバックアップの種類とクリーンアップ ルールは、対応するプライマリ バックアップ設定と同じです。一方、たとえば、別のバックアップの種類を使用したり、保持ルール オプションを変更したりするなど、別の設定を指定できます。

[バックアップ先] を選択したら **[次へ]** をクリックしてこの手順を終了し、次の手順に進みます。

8.4 バックアップ方法

手順 4 では、新しいバックアップ タスクの基本設定を定義します。

8.4.1 アプリケーション アウェア バックアップの設定

Microsoft Exchange Server アイテム、Microsoft SQL Server データベース、Microsoft SharePoint Server データまたは Microsoft Active Directory の復元を実行する前に、バックアップが「アプリケーション アウェア」になるように設定する必要があります。左側の VM リストから、MS Exchange Server、MS SQL Server、MS SharePoint Server、MS Active Directory を実行する特定の VM を選択し、その VM のドメイン管理者の資格情報を指定します。アプリケーションが実行されている複数の VM を追加できます。

オプションで、[バックアップ後に、トランザクション ログを自動的に切り捨てます] を選択することができます。

アプリケーション アウェア バックアップの詳細オプションによって、バックアップ時に特定のアプリケーションをスキップできます。1 つの仮想コンピュータにいくつかのアプリケーションがインストールされていて、そのうちの 1 つが不整合な状態だとします。その結果、もう 1 つのアプリケーションがバックアップされず、アプリケーション アウェア バックアップ全体が失敗します。このオプションを使用すると、不整合な状態のアプリケーションをスキップし、「正しい」状態の他のアプリケーションのアプリケーション アウェア バックアップを続行できます。[アプリケーションのスキップ] オプションを選択して、スキップするアプリケーションを選択します (MS Exchange、MS SQL Server/SharePoint、MS Active Directory)。

アプリケーション アウェア バックアップを有効にするには、MS Exchange Server、MS SQL Server、MS SharePoint Server、MS Active Directory を実行している選択した VM に対するゲスト OS のログイン資格情報を指定する必要があります。つまり、ドメイン管理者の権限を持つユーザーを指定する必要があります。Acronis Backup for VMware では、エージェントなしのモードで VM データが評価されるので、Windows Server 2008 で導入されたユーザーアカウント制御 (UAC) テクノロジはネイティブではサポートされません。そのため、ユーザーに対して UAC を有効にする場合は、次の可能な解決策をお勧めします (どちらか 1 つを適用できます)。

1. 指定したユーザーに対して UAC を無効にする。たとえば次のように、ドメイン グループ ポリシーを使用して UAC を有効または無効にすることができます。
2. UAC を無効にする異なるユーザーを指定する。たとえば、デフォルトで UAC が無効になっているビルトイン ドメイン管理者アカウントを使用できます。
3. 小さな (最大 30 Mb) Acronis Backup Agent を VM 内にインストールします。 そのためには、Acronis Backup for VMware インストール パッケージを実行し、メニューから [コンポーネントの展開] オプションを選択して、Acronis Backup Agent の .msi コンポーネントを展開し、UAC が有効になっているサーバーに Agent をインストールします。以後は、UAC の状態と関係なく、ドメイン管理者権限を持つ任意のドメイン ユーザーを使用することができます。

Backup for VMware はクラスタ対応のソフトウェアではありませんが、Exchange クラスタノードのアプリケーション アウェア バックアップを実行できます (Exchange 2003 SP2 以降のバージョンに対応)。バックアップの際、Acronis Backup for VMware は、特定の VM で使

用できる Exchange データベース (Exchange クラスタのノード) を特定の時間にバックアップできます。SCC、CCR、DAG など、Exchange クラスタには多数の種類があり、詳細はそれぞれ異なりますが、「アプリケーション アウェア」オプションでバックアップする VM から Exchange データベースのデータに実際にアクセスできることを確認することが肝心です。トランザクション ログの切り捨てオプションも同様に対処してください。アクセスできるデータベースに対してのみ切り捨てが行われます。

たとえば、Exchange 2010 DAG クラスタの場合、各ノードでアクティブ データベースとパッシブ データベース (他のノードのデータベースのコピーなど) をホストできるため、どのノードでもバックアップできます。すべてのノードからアクセスできるため、これらのデータベースはすべて適切にバックアップされます。この場合、アクティブとパッシブの両方のデータベースのログが切り捨てられることに注意してください。

このルールの例外は SCC クラスタです。SCC クラスタでは、データベースは共有ストレージ上にあるため、VM データへのアクセスに使われている vStorage API でアクセスできません。SCC クラスタはサポート対象外です。

バックアップから Exchange データベースを展開して障害発生時点で復元すると、データベースはバックアップ コピーに置き換えられ、トランザクション ログもロールアップされます。その後、最新のデータベースを展開して、既存のトランザクション ログをこのコピーに適用します。欠けているトランザクション ログがある場合、ロールアップを行うことはできません。

注意: Active Directory を使用している VM のバックアップでは、「廃棄 (Tombstone) の有効期間」の設定 (デフォルトで 60 日) より古いものは使用しないようにしてください。古くなると、そのような古いアーカイブから復元された VM 内のドメイン コントローラに不整合が生じます。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/216993/jp-ja> をご参照ください。

8.4.2 バックアップのベリファイ

新規作成したバックアップの整合性を確認する (バックアップのベリファイを実行する) 場合は、**[バックアップ後にベリファイ]** チェック ボックスをオンにします (バックアップのベリファイに関する詳細については、「バックアップのベリファイ 『104ページ』」セクションをご参照ください)。

バックアップを 2 番目のロケーションにコピーするようにバックアップ タスクを構成した場合は、ここで、2 番目のロケーションでバックアップをベリファイするかどうかを選択できます。

8.4.3 その他の設定

その他の設定が表示されるポップアップ ウィンドウを開くには、**[その他のオプション]** をクリックします。表示されるオプションについては、「オプション 『48ページ』」セクションをご参照ください。

8.4.4 バックアップ タスクの作成ウィザードの完了

新しいバックアップ タスク ウィザードを完了するには、タスク名を定義する必要があります。記号 []、{ }、:、. はタスク名には使用できません。

[保存] ボタンをクリックすると、設定したバックアップ タスクのすべてのパラメータが保存され、**[タスク]** ビューに作成済みのタスクが表示されます。**[保存して実行]** ボタンをクリックすると、タスクは保存されると同時に実行されます。

8.5 オプション

新しいバックアップ タスク ウィザードの最後の手順で **[その他のオプション]** をクリックすると、設定のポップアップ ウィンドウが開きます。設定を何も変更しない場合は、現在のバックアップ タスクのデフォルト値が維持されます。後から特定の設定を変更してデフォルトとして保存しても、デフォルトの設定で作成されたタスクには影響しません（これらのタスクでは、タスク作成時のデフォルト設定が維持されます）。

[保存] ボタンをクリックすると、設定の変更は新しく作成されたバックアップ タスクのみに適用されます。**[すべてのタスクに適用する]** をクリックすると、新規のバックアップ設定がすべての既存のバックアップ タスクに適用されます。たとえば、**[電子メールによる通知]** の電子メール アドレスをすべてのタスクで変更する必要がある場合が考えられます。**[すべてのタスクに適用する]** を使用すると、一度に適用できます。次の警告がポップアップ表示されたら **[はい]** をクリックして処理を確定します: **[既存のバックアップ タスクはすべて、指定されたデフォルトの設定に従って変更されます。処理を続行してもよろしいですか?]**

[すべてのタスクに適用する] によって保存されるのは、左側にある選択された 1 つのタブの設定のみです (**[アーカイブの保護]** を除く)。以降のセクションで、それらの設定について個別に説明します。

8.5.1 アーカイブの保護

[アーカイブの保護] パラメータのデフォルト値は **[無効]** です。このオプションは、既存タスクの編集時、新規タスクの作成時、または既存アーカイブの指定時には使用できません。

不正なアクセスからアーカイブを保護するには、**[アーカイブにパスワードを設定する]** チェック ボックスをオンにして **[パスワードの入力]** フィールドにパスワードを入力し、最後に **[パスワードの確認]** フィールドにパスワードを再入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されることに注意してください。

作成済みのアーカイブは 1 つのパスワードだけで保護することも、AES (Advanced Encryption Standard) 128/192/256 ビット キーの暗号化アルゴリズムで強力に保護することも可能です。**[暗号化しない]** を選択すると、アーカイブはパスワードのみで保護されます。暗号化を行う場合は、**[AES 128]**、**[AES 192]**、**[AES 256]** のいずれかを選択してください。

AES 暗号化アルゴリズムは、暗号ブロック連鎖 (CBC) モードで動作し、ランダムに生成されるキーを使用します。キーの長さは 128、192、または 256 ビットからユーザーが指定できます。キーのサイズが大きいほどアーカイブを暗号化する時間は長くなりますが、データの安全性は高まります。

8.5.2 [バックアップから除外するファイル]

バックアップから除外するファイルのルールでは、バックアップ処理中にソース データから除外し、結果的にバックアップ アイテムのリストからも除外されるデータを定義できます。これらのルールは、除外用に設定されたパスによって定義されたファイルまたはフォルダにすることができます。

このオプションは、NTFS/FAT16/FAT32/ext2/ext3/ext4/ReFS ファイル システムのボリュームを含む仮想コンピュータのバックアップに効果があります。特に、スイッチ オフされたすべての VM (FAT および NTFS ファイル システム) と、OS のバージョンが Windows Server 2003 以降のスイッチ オンされた VM で有効です。また、このオプションには、対象 VM で実行される VMware Tools が必要です。

除外するファイルとフォルダを指定するには、以下のパラメータを使用します。

[次の条件と一致するファイルを除外する]

このチェックボックスをオンにすると、名前がいずれかの条件と一致するファイルおよびフォルダをリスト内でスキップします (ファイル マスクと呼ばれる)。ファイル マスクのリストを作成および管理するには、**[追加]**、**[編集]**、**[削除]**、**[すべて削除]** のボタンを使用します。

1 つ以上のワイルドカード文字 (「*」および「?」) をファイル マスクで使用できます。

ドライブ文字を含むパスで指定したフォルダを除外するには、条件のフォルダ名にバックスラッシュ (「\」) を追加します。たとえば、「C:\Finance\」のようになります。

たとえば、**[バックアップから除外するファイル]** では **[次の条件と一致するファイルを除外する:]** に *.tmp、*、~、*.bak を設定できます。

「C:*」または「D:*」という形式で除外を指定すると、バックアップ VM のボリューム全体を除外できます。除外設定で指定するドライブ文字では、ドライブ文字が割り当てられていないパーティションがリストの末尾に列挙されることに注意してください。たとえば、システムにより予約済みのパーティションのある Windows 2008 ゲスト OS があるとし (ドライブ文字の割り当てなし)。C: ドライブからファイルを除外するには、Acronis Backup for VMware の除外設定で「C:*」を指定する必要がありますが、システムにより予約済みのパーティションを除外するには、下記の例の場合、「L:*」を除外に指定する必要があります。

ソース システムに、次のパーティションがあるとし。

- システムにより予約済み
- C: (ローカル ディスク)
- D: (CD-ROM)
- E: (ローカル ディスク)
- K: (ローカル ディスク)

Acronis Backup for VMware では、これらのボリュームは「C:」のパーティションから同じ順番で列挙され、CD-ROM はスキップされます。

- C: (C: (ローカル ディスク))
- E: (E: (ローカル ディスク))

- K: (K: (ローカル ディスク))
- L: (システムにより予約済み)

ヒント: ボリューム文字の列挙は、**ファイルの復元機能**を使用して確認できます (既存の復元ポイント内のファイル/フォルダ ツリーを参照)。

8.5.3 圧縮レベル

[圧縮レベル] オプションでは、バックアップ データに適用する圧縮レベルを定義します。このオプションのデフォルト設定は **[normal]** です。

最適なデータ圧縮レベルは、バックアップするデータの種類によって異なります。たとえば、アーカイブに含まれるファイルが **.jpg**、**.pdf**、または **.mp3** などの既にかなり圧縮されたファイルの場合、圧縮レベルを最大にしてもアーカイブ サイズは大幅に縮小されません。ただし、**.doc** または **.xls** などのフォーマットであればさらに十分に圧縮されます。

次のいずれかの圧縮レベルを選択します。

- **[なし]**: データは圧縮されずに、そのままコピーされます。作成されるバックアップ サイズは最大値になります。
- **[標準]**: ほとんどの場合、この圧縮レベルをお勧めします。
- **[高]**: 作成されるバックアップ サイズは通常、**[標準]** レベルよりも小さくなります。
- **[最大]**: データの圧縮率が最大になります。ただし、バックアップ タスクの実行にかかる時間も最長になります。リムーバブル メディアにバックアップする場合は、必要なボリュームの数を減らすために最大圧縮を選択します。

8.5.4 エラー処理

これらのオプションによって、バックアップ中に発生する可能性があるエラーを処理する方法を指定できます。

復元可能なエラーが発生した場合、失敗した処理が再試行されます。試行間隔および試行回数を設定できます。タスクは、処理に成功するか、または指定された試行回数に達すると停止します。

ネットワーク エラー (**[ネットワーク エラーが発生した場合はデータ伝送を再試行する]**) と VM バックアップ エラー (**[失敗した VM 処理の再試行]**) について、個別の設定があります。両方のオプションがデフォルトで有効になっていて、以下に設定されています。**試行回数**は 5 回、**試行間隔**は 30 秒です。

たとえば、デフォルトのネットワーク エラー設定の状態で、ネットワーク上のバックアップ保存先が使用できないか、接続できない場合、30 秒ごとに 5 回までバックアップ保存先への接続が試行されます。試行は、接続が再開されるか、または指定された試行回数に達すると停止します。

デフォルトのバックアップ エラー設定では、失敗した VM バックアップ処理は失敗の 30 秒後に自動的に再開され、5 回試行した後で、プログラムは次の VM バックアップに進みます。

8.5.5 災害復旧計画

災害復旧のシナリオでは、バックアップ手順および復元手順を管理する技術者が複数いる場合があります。そのため、復元を実行するユーザーが、イメージの存在するロケーション（イメージが保存されているコンピュータなど）の詳細を知らない可能性があります。Acronis Backup for VMware を使用すれば、システム障害が発生した場合にバックアップ アーカイブからデータを復元する方法に関する簡単なステップバイステップの手順が含まれている**災害復旧計画（DRP）**を作成できます。**災害復旧計画**は、指定したユーザーに電子メールで送信したり、特定のロケーション/フォルダに保存したりすることができます。

災害復旧計画は Acronis エージェントによって生成され、最初のバックアップ後に送信されます。バックアップ タスクが変更されるか、バックアップ コンテンツが大幅に変更されると、新しい**災害復旧計画**が送信されます。

[災害復旧計画] パラメータのデフォルト値は [無効] です。

すべてのバックアップ タスクの **[デフォルトのバックアップ設定]** で **[災害復旧計画]** を有効にします。**[設定]** -> **[バックアップ設定]** に移動し、**[災害復旧計画]** をクリックします。新しいバックアップ タスク ウィザードの手順 4 で個々のバックアップ タスクに対する DRP を設定することも可能です。**[その他のオプション]** をクリックして、**[災害復旧計画]** セクションに移動します。

[災害復旧計画を送信する] チェック ボックスをオンにして、DRP を有効にします。次の手順に従って DRP オプションを設定します。

- **[電子メール アドレス]** フィールドに送信先電子メール アドレスを入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
- 電子メールの件名を入力します。デフォルトの件名は「**Acronis アプライアンスからの Acronis Backup for VMware に関するお知らせ**」です。
- **[SMTP サーバー]** フィールドに送信メール サーバー（SMTP）を入力します。
- 送信メール サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは 25 に設定されます。
- SMTP サーバーから認証を要求される場合、適切なフィールドにユーザー名とパスワードを入力します。
- **[差出人]** フィールドに電子メールの送信者名を入力します。
- 必要に応じて、**[暗号化を使用する]** を選択し、暗号化タイプに [SSL] か [TLS] を選択します。
- **[テスト電子メール メッセージを送信する]** をクリックすれば、災害復旧計画が指定した設定で正常に送信されるかどうかを確認することができます。

災害復旧計画のコピーを保存し、そのロケーションを参照する場合、**[次のロケーションに災害復旧計画をアップロードする]** チェックボックスをオンにします。

8.5.6 通知

1) [電子メールによる通知]

このオプションでは、正常な完了、バックアップの失敗、ユーザーによる操作の必要性など、バックアップ タスクの実行時に発生する基本的なイベントに対して、電子メールによる通知を設定します。このオプションのデフォルト設定は [無効] です。

[電子メールによる通知を送信する] チェック ボックスをオンにして、通知を有効にします。

[電子メールによる通知を送信する] チェック ボックスの下で、希望する設定を次のように選択します。

- **[バックアップが正常に終了したとき]:** バックアップ タスクが正常終了した場合に通知を送信します。
- **[バックアップが失敗したとき]:** バックアップ処理が失敗した場合に通知を送信します。
- **[通知に完全ログを追加する]:** ログすべてを受信します。

通知の送信先となる電子メール アドレスを 1 件以上入力します。複数のアドレスを入力する場合は、セミコロンで区切って **[電子メール アドレス]** フィールドに入力してください。

通知メッセージに対して、適切な **[件名]** を指定します。

[SMTP サーバー]: 送信メール用 SMTP サーバーの名前を入力します。

[ポート]: SMTP サーバーのポートを設定します (デフォルトのポート値は 25 に設定されます)。

[ユーザー名]: ユーザー名を入力します。

[パスワード]: パスワードを入力します。

[送信元]: メッセージの送信元となるユーザーの電子メール アドレスを入力します。このフィールドが空白の場合、差出人アドレスに宛先アドレスが使用されてメッセージが送信されます。

[暗号化を使用する]: メール サーバーへの暗号化された接続を選択し、暗号化の種類として SSL または TLS を選択できます。

[テスト電子メール メッセージを送信する] をクリックし、すべての設定が正しいことを確認します。

2) [SNMP 通知]

このオプションでは、管理対象のコンピュータ上で動作するエージェントが、指定された簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) マネージャにバックアップ処理イベントのログを送信するかどうか定義します。送信するイベントの種類は選択可能です。このオプションのデフォルト設定は [無効] です。

バックアップ処理のイベント ログ メッセージを SNMP 管理アプリケーションを実行しているコンピュータに送信するかどうかを選択する場合は、次のいずれかを選択します。

- **[SNMP 通知を送信しない]:** SNMP マネージャにバックアップ処理のイベント ログを送信しません。

- **[処理イベントに対して個別に SNMP 通知を送信する]:** バックアップ処理のイベントを指定された SNMP マネージャに送信します。
[送信するイベントの種類]: 送信するイベントの種類を、[情報]、[警告]、または [エラー] から選択します。
[サーバー名またはサーバーの IP]: メッセージ送信先の SNMP 管理アプリケーションが稼動しているホストの名前または IP アドレスを入力します。
[コミュニティ]: SNMP 管理アプリケーションが稼動しているホストと送信元コンピュータの両方が属する SNMP コミュニティの名前を入力します。一般的なコミュニティは **[public]** です。
[テスト メッセージを送信する] をクリックし、すべての設定が正しいことを確認します。

SNMP オブジェクト

Acronis Backup for VMware は、次の簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) オブジェクトを SNMP 管理アプリケーションに送信します。

- イベントの種類
 オブジェクト識別子 (OID) : 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.1.0
 構文: OctetString
 値は、「Information」、「Warning」、「Error」、「Unknown」のいずれかになります。「Unknown」が送信されるのはテスト メッセージだけです。
- イベントの説明テキスト
 オブジェクト識別子 (OID) : 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.2.0
 構文: OctetString
 値には、イベントの説明テキストが含まれます (Acronis Backup for VMware でログに記録されるメッセージと同様のものです)。

varbind 値の例:

1.3.6.1.4.1.24769.100.200.1.0:Information

1.3.6.1.4.1.24769.100.200.2.0:I0064000B

サポートされる操作

Acronis Backup for VMware でサポートされるのはトラップ操作のみです。GET- および SET- リクエストを使用して Acronis Backup for VMware を管理することはできません。つまり、トラップ メッセージを受信するには、SNMP トラップ レシーバを使用する必要があります。

詳細

<http://kb.acronis.com/content/11851>

テスト メッセージについて

SNMP 通知を設定する場合は、テスト メッセージを送信して、設定が正しいかどうかを確認できます。

テスト メッセージのパラメータは、次のようになります。

- イベントの種類

OID: 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.1.0

値: 「Unknown」

- イベントの説明テキスト

OID: 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.2.0

値: "?00000000"

8.5.7 その他の設定

1) [重複除外]

このオプションでは、バックアップ タスクで作成されたアーカイブの重複除外を有効化するか、無効化するかを定義します。[重複除外] のデフォルト設定は [有効] です。

重複除外はアーカイブ レベルで実行されます。したがって、アーカイブに保存されるデータのみが重複除外されます。つまり、重複除外を有効にして同じロケーションに 2 つのアーカイブを保存しても、両方のアーカイブに存在する重複データは重複除外されません。

2) [CBT バックアップ]

このオプションでは、VMware の Changed Block Tracking 機能をサポートする仮想コンピュータで、この機能を使用するかどうかを定義します。[CBT バックアップ] のデフォルト設定は [有効] です。

[CBT バックアップ] では、仮想コンピュータ内のすべての変更ブロックが追跡されます。これにより、バックアップ作成の時間が大幅に短縮されます。時間が短縮される理由は、Acronis Backup for VMware で前回のバックアップから変更されたブロックがどれかをチェックする必要がないからです。変更の情報は VMware API から取得します。

3) [FTP をアクティブ モードで使用する]

FTP 認証とデータ転送のために、FTP アクティブ モードを使用することができます。[FTP をアクティブ モードで使用する] のデフォルト設定は [無効] です。

FTP サーバーがアクティブ モードをサポートしていて、ファイル転送にアクティブ モードを使用する場合は、このオプションを有効にします。

すべての設定を完了したら、[OK] をクリックしてポップアップ ウィンドウを閉じ、変更を保存または破棄します。これらの設定は、新しく作成されたタスクに使用されます。

8.6 作成済みバックアップ タスクの管理

既存のバックアップ タスクを編集する場合は、バックアップ タスクの作成時に完了したバックアップ ウィザードの全セクション (手順) をすべて確認できます。画面には、ウィザードの 4 つの手順がすべて一度に表示されます。既存のバックアップ タスクを編集する場合、アーカイブの種類 ([Always Incremental] または [レガシー モード]) は変更できないので注意してください (詳細については、「タスクの管理 『93 ページ』」セクションをご参照ください)。

9 レプリケーション

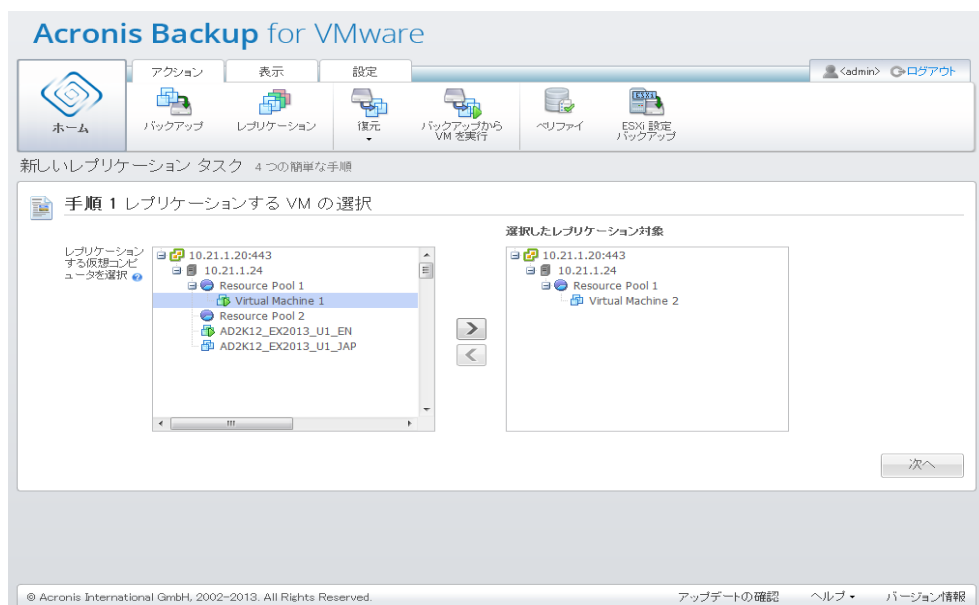
9.1 新しいレプリケーション タスク

レプリケーション機能を使用すれば、重要な VM のクローンを作成して、障害発生時に重要なサービスを短時間で起動することができます。新しいレプリケーション タスクを実行するには、[アクション]->[レプリケーション] をクリックします。

9.1.1 レプリケーション VM の選択

新しいレプリケーション タスク ウィザードの最初の手順では、レプリケーションする仮想コンピュータ（複数可）を選択する必要があります。左側には、Acronis Backup for VMware エージェントによって管理されるすべての ESX(i) ホスト/vCenter および仮想コンピュータのリストが表示されます。レプリケーションするコンピュータがこのリストにない場合は、[設定]->[ESX(i) ホスト] ページで、対応する ESX(i) ホストが追加されているかどうかを確認してください。

仮想コンピュータを選択するには、[>] および [<] ボタンを使用して、パタフライ コントロールの左側から右側へコンピュータを移動してください。右側のリストに、レプリケーション対象として選択された仮想コンピュータが表示されます。選択したリストに VM を追加するには [>] ボタンを使用し、リストから VM を削除するには [<] ボタンを使用します。VM はダブルクリックして選択することもできます。



新しいレプリケーション タスク、手順 1: レプリケーションする VM の選択

コンピュータのダイナミック グループをバックアップするには、ツリー内の上部ユニット（ESX(i) ホストまたは VM フォルダなど）を選択し、同じ [>] ボタンで右側のリストに移動します。その結果、対象グループ内で稼動するすべてのコンピュータは自動的にバックアップ リストに含まれます。さらに、このグループで作成された新しいコンピュータは、現在のレプリケーション タスクにより自動的にレプリケーションされます。

レプリケーションする VM は 1 つ以上選択する必要があります。 選択したら [次へ] をクリックし、最初の手順を終了して次に進みます。

9.1.2 レプリケーションの実行時期

新しいレプリケーション タスク ウィザードの 2 番目の手順では、仮想コンピュータのレプリケートのスケジュールを定義します。 1 回限りのレプリケーション タスクを作成する ([スケジュールせず、要求に応じて実行する]) オプションと、週単位のスケジュールを作成するオプションの 2 種類が用意されています。 デフォルトでは、レプリカが毎日 12:00 に作成されるスケジュールになっています。 この手順では、デフォルト値を変更するか、[スケジュールせず、要求に応じて実行する] (つまり、レプリケーション タスクはスケジュールに従って実行されない) を選択します。 タスクはレプリケーション タスク作成直後に開始するか、または [タスク] ビューから手動で実行できます。

The screenshot displays the 'Acronis Backup for VMware' wizard interface. The top navigation bar includes 'ホーム', 'バックアップ', 'レプリケーション', '復元', 'バックアップから VM を実行', 'ペリファイ', and 'ESXi 設定 バックアップ'. The main content area is titled '新しいレプリケーション タスク 4 つの簡単な手順'. Step 1, 'レプリケーションする VM の選択', is completed. Step 2, 'レプリケーションの実行時期', is the current step. It offers two options: 'スケジュールせず、要求に応じて実行する' (selected) and 'スケジュール'. The 'スケジュール' section is expanded, showing a frequency of '毎日' (Daily) and a time of '12:00:00'. The 'スケジュールしたタスクを次の時間に実行...' section shows a frequency of '1 回のみのみ' (Run once) and a time of '12:00:00'. The '開始' (Start) time is '00:00:00' and the '終了' (End) time is '23:59:59'. A '次へ' (Next) button is located at the bottom right of the step area.

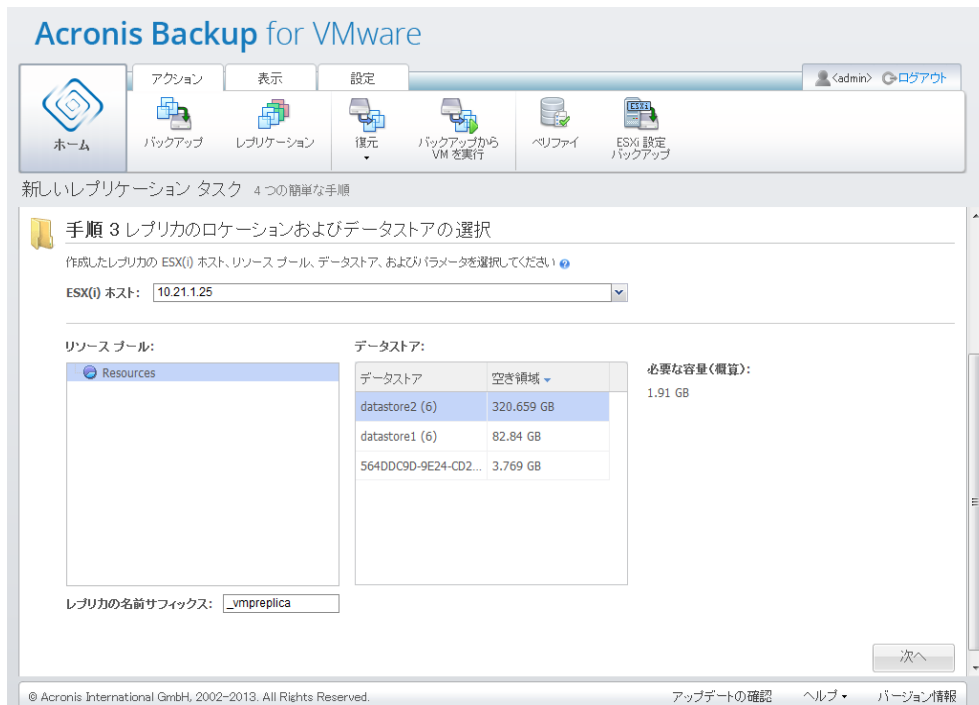
新しいレプリケーション タスク、手順 2: レプリケーションの実行時期

レプリケーション タスクのスケジューリングは、バックアップ タスクのスケジューリングと同じです。 スケジュール オプションの詳細とスケジュールの例については、「バックアップの実行時期 『40ページ 』」セクションをご参照ください。

レプリケーション タスクのスケジュールを設定したら、[次へ] をクリックして、ウィザードの次の手順に進みます。

9.1.3 レプリカのロケーションおよびデータストアの選択

新しいレプリケーション タスク ウィザードの 3 番目の手順では、VM レプリカのロケーションおよびデータストアを定義します。 この手順では、ESX(i) ホストをドロップダウンリストから選択して定義します。 次に、レプリケーション先 ESX(i) ホストおよびレプリケーション先データ ストアのリソース プールを選択します。



新しいレプリケーション タスク、手順 3: レプリカのロケーションおよびデータストアの選択

VM レプリカの作成時に使用する**レプリカの名前サフィックス**を定義します。デフォルトのレプリカ名は、「%Machine_Name%_vmpreplica」です。「%Machine_name%」は、元の VM の名前で、「_vmpreplica」は、**レプリカ名**のサフィックスです。定義した名前の VM がすでに存在している場合、名前サフィックスを変更するかどうかを確認する警告が表示されます。

選択を行ったら、**[次へ]** をクリックして、次の手順に進みます。

9.1.4 レプリケーション タスク オプション

新しいレプリケーション タスク ウィザードの 4 番目の手順では、レプリケーション タスクの名前を定義する必要があります。記号 [], { }, ; , . はタスク名には使用できません。

レプリケーション タスクの基本設定については、**[その他のオプション...]** をクリックします。次のオプションを使用できます。

1) [電子メールによる通知]

2) [SNMP 通知]

詳細については、「通知」セクション『52ページ』を参照してください。

3) CBT のレプリケーション

[その他の設定] セクションのこのオプションでは、VMware の Changed Block Tracking (CBT) 機能をサポートする仮想コンピュータで、この機能を使用するかどうかを定義します。

[CBT のレプリケーション] のデフォルト設定は **[有効]** です。

[CBT のレプリケーション] では、仮想コンピュータ内のすべての変更ブロックが追跡されます。これにより、レプリケーションの時間が大幅に短縮されます。時間が短縮される理由

は、Acronis Backup for VMware で前回のバックアップから変更されたブロックがどれかをチェックする必要がないからです。 変更の情報は VMware API から取得します。

4) [準備モード]

対象 VM レプリカ上で使用されるプロビジョニング モードを指定します。 モードには、シン プロビジョニング、シック プロビジョニング、フラット プロビジョニング、オリジナルと同じがあります。 デフォルトのモードは、シン プロビジョニングです。 フラット プロビジョニング モードは、ESXi バージョン 5.0 以降で使します。

[保存] ボタンをクリックすると、すべてのタスク パラメータが保存され、**[タスク]** ビューに作成したタスクが表示されます。 **[保存して実行]** ボタンをクリックすると、タスクは保存されると同時に実行されます。

9.2 レプリケーションされた VM の管理

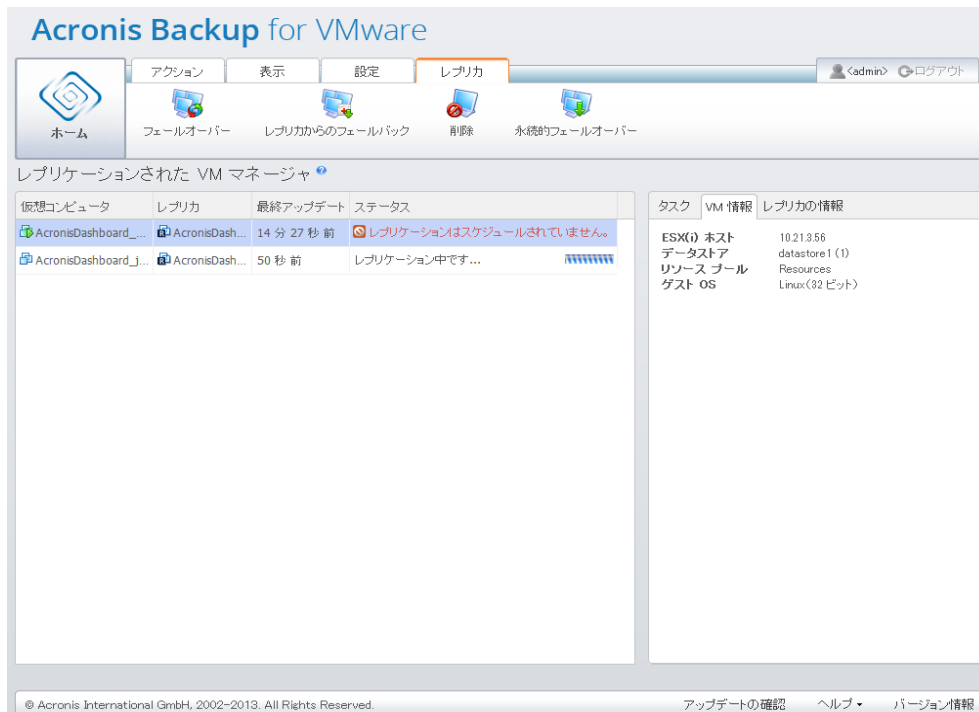
9.2.1 レプリケーションされた VM マネージャ

[レプリカ] ([表示] -> [レプリカ]) ページには、Acronis Backup for VMware エージェントに追加されたすべての ESX(i) ホスト上で検出された、作成済みレプリカがすべて表示されます。このページでレプリカを管理することも可能です。

レプリカのリストには、レプリケーション元仮想コンピュータ、そのレプリカ、最終アップデート時刻、およびステータス (レプリケーションがスケジューリングされているか否か) に関する情報が表示されます。詳細を表示する VM レプリカを選択します。

右側の **[VM 情報]** タブに、選択したレプリカの元の VM に関する概要が表示されます。

- **ESX(i) ホスト情報**
- **データストア情報**
- **元の VM が保存されているリソース プール**
- **ゲスト VM 情報**



レプリケーションされた VM マネージャ

[レプリカ情報] タブには、選択したレプリカの概要が表示されます。

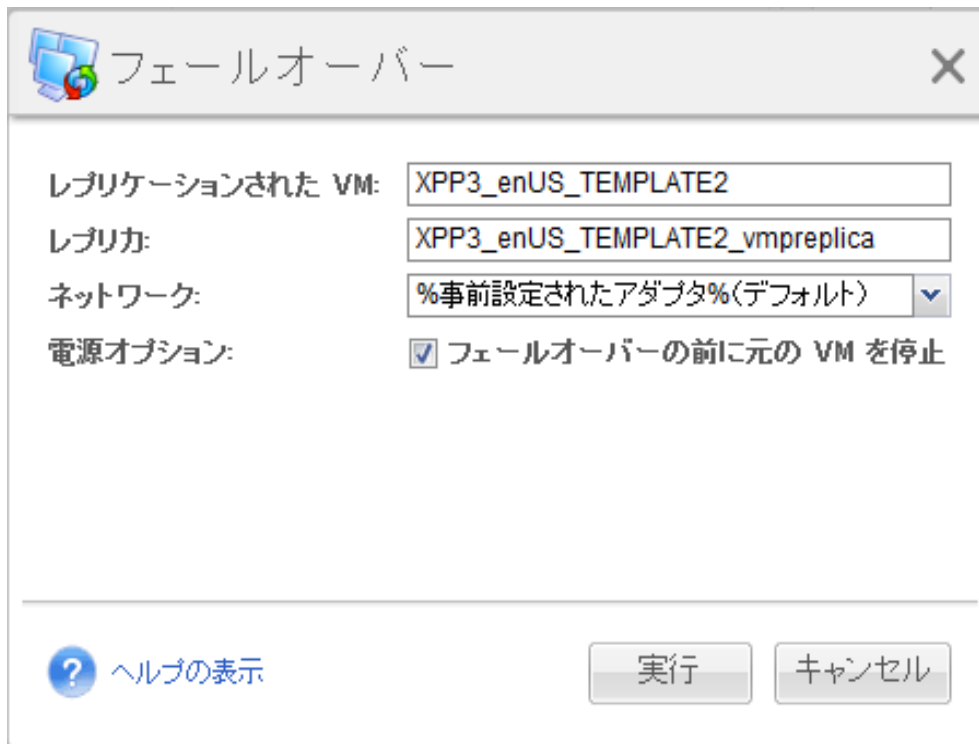
- ESX(i) ホスト情報
- データストア情報
- 元の VM が保存されているリソース プール

このタブでは、基本的な操作（フェールオーバーとレプリカからのフェールバック）を実行することも可能です。以降のセクションで、これらの基本的な操作を詳しく説明します。

9.2.2 フェールオーバー

レプリケーションした仮想コンピュータが異常終了しても、レプリカ VM を実行（フェールオーバー）して、その仮想コンピュータを素早く起動することができます。フェールオーバー機能を使用すれば、障害が発生した VM が復元されていなくても、重要なサービスを再起動することが可能です。

起動するレプリカ VM を選択し、リボン メニューで [フェールオーバー] ボタンをクリックします。レプリカ VM 上でネットワークを使用するかどうかをドロップダウン メニューから選択します。元の VM が実行中の場合、フェールオーバーの前に元の VM を停止することができます。その後、[実行] をクリックしてください。

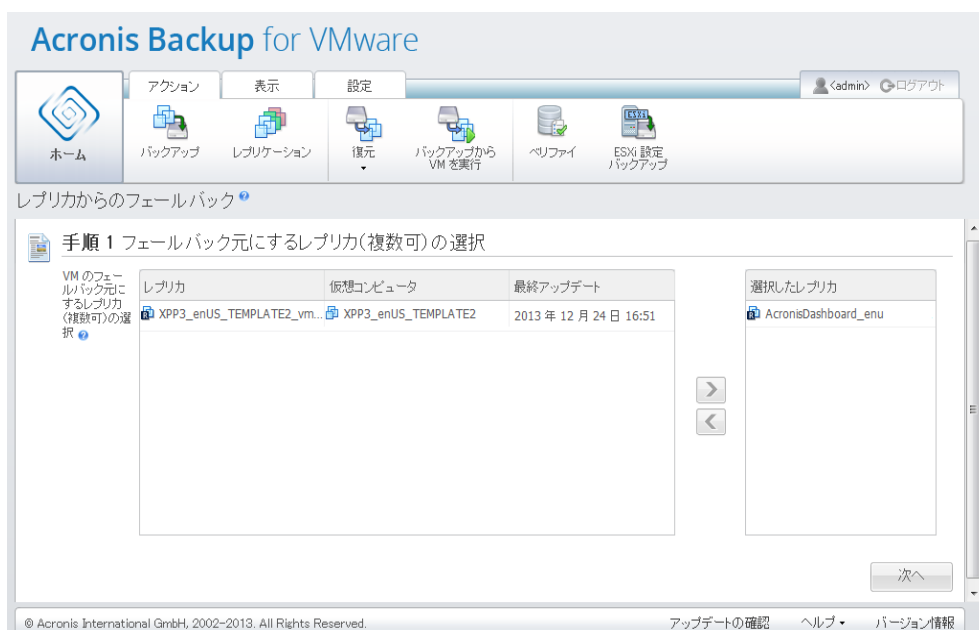


フェールオーバー

9.2.3 レプリカからの VM のフェールバック

フェールバック処理（レプリカからの VM の復元）では、レプリカ VM を使用して元の VM を復元することができます。この操作は、フェールオーバー処理が開始された後にレプリカ VM を停止し、元のまたは新しいロケーションに対する変更内容を保存する場合に使用することも可能です。【レプリカからのフェールバック】をクリックして、ウィザードを開始します。

ウィザードの最初の手順である【レプリカからのフェールバック】では、バタフライ コントロールを使用して VM の復元元レプリカを選択してから、【次へ】をクリックします。



レプリカからのフェールバック、手順 1: フェールバック元にするレプリカ（複数可）の選択

2 番目の手順である【レプリカから VM をフェールバックするロケーション】では、VM ロケーションを選択します。元のロケーションを選択して、元の VM を上書きしたり、復元された VM の新しい名前を生成したりすることが可能です。新しいロケーションを選択することもできます。フェールバック先の VM を指定したら、**[次へ]** をクリックしてください。

The screenshot shows the Acronis Backup for VMware web interface. The top navigation bar includes 'ホーム' (Home), 'アクション' (Actions), '表示' (View), and '設定' (Settings). The 'アクション' tab is active, showing icons for 'バックアップ' (Backup), 'レプリケーション' (Replication), '復元' (Restore), 'バックアップから VM を実行' (Run VM from backup), 'ペリフアイ' (Peripherals), and 'ESXi 設定 バックアップ' (ESXi configuration backup). The main content area is titled 'レプリカからのフェールバック' (Failback from replica). It shows '手順 1: フェールバック元にするレプリカ(複数可)の選択' (Step 1: Select replica(s) to failback from) and '手順 2: レプリカから VM をフェールバックする場所' (Step 2: Select location for VM failback from replica). In Step 2, the 'ロケーションの選択' (Select location) dropdown is set to '10.21.1.25'. The '復元される仮想ディスクの種類' (Type of virtual disk to be restored) is set to '元の VM と同じ(推奨)' (Same as original VM (recommended)). The 'リソース プール' (Resource pool) is set to 'Resources'. The 'データストア' (Datastore) table shows three options: 'datastore2 (6)' with 268,736 GB, 'datastore1 (6)' with 35,824 GB, and '564DDC9D-9E24-CD2A-1...' with 3,768 GB. The '必要な容量(概算):' (Estimated required capacity) is 1,291 GB. A green information bar at the bottom states: '情報: VM は、自動的に生成された名前で作成されます。' (Information: VM will be created with an automatically generated name). The '次へ' (Next) button is visible.

データストア	空き領域
datastore2 (6)	268,736 GB
datastore1 (6)	35,824 GB
564DDC9D-9E24-CD2A-1...	3,768 GB

レプリカからのフェールバック、手順 2: レプリカから VM をフェールバックする場所

3 番目の手順である【フェールバック方法】では、復元タスク操作を選択します。【VM 電源管理】ブロックで、【フェールバックの開始時にターゲット VM の電源をオフにする】や【フェールバックの完了時にターゲット VM の電源をオンにする】などのチェックボックスをオンにします。タスク名を定義します。



レプリカからのフェールバック、手順 3: フェールバック方法

[保存] ボタンをクリックすると、すべてのタスク パラメータが保存されます。**[タスク]** ビューでは、作成した**レプリカからのフェールバック**タスクを表示することができます。**[保存して実行]** ボタンをクリックすると、タスクは保存されると同時に実行されます。

レプリカ VM が実行されている場合、**レプリカから VM をフェールバック**タスクが、レプリカ VM を停止することなく元の VM を復元します。フェールバックが完了した場合にのみレプリカ VM が停止されます。最後に、**レプリカから VM をフェールバック** タスクが、フェールバック処理中に行われた変更の内容を、レプリカ VM から元の（新しい）VM に復元します。これにより、ダウンタイムが最低限に抑えられ、VM の状態が、その VM のレプリカの状態と可能な限り近くなります。

9.2.4 レプリカ VM の削除

レプリケーションされた仮想コンピュータを削除するには、リストからその仮想コンピュータを選択して、リボン メニューで **[削除]** ボタンをクリックします。

9.2.5 永続的フェールオーバー

永続的フェールオーバーでは、レプリカ VM がベース仮想コンピュータに変換されます。**.vmx** ファイルから **Acronis** タグが削除され、仮想コンピュータは **Acronis Backup for VMware** によってレプリカとは見なされなくなります。名前の競合により、既存のレプリケーション タスクは失敗する可能性があります。

[永続的フェールオーバー後に VM の電源をオンにする] チェック ボックスを選択すると、コンピュータが起動します。**[永続的フェールオーバー後に VM の名前を変更する]** チェック ボックスを選択すると、新しい VM 名を設定できます。

10 復元

10.1 仮想コンピュータのバックアップの復元

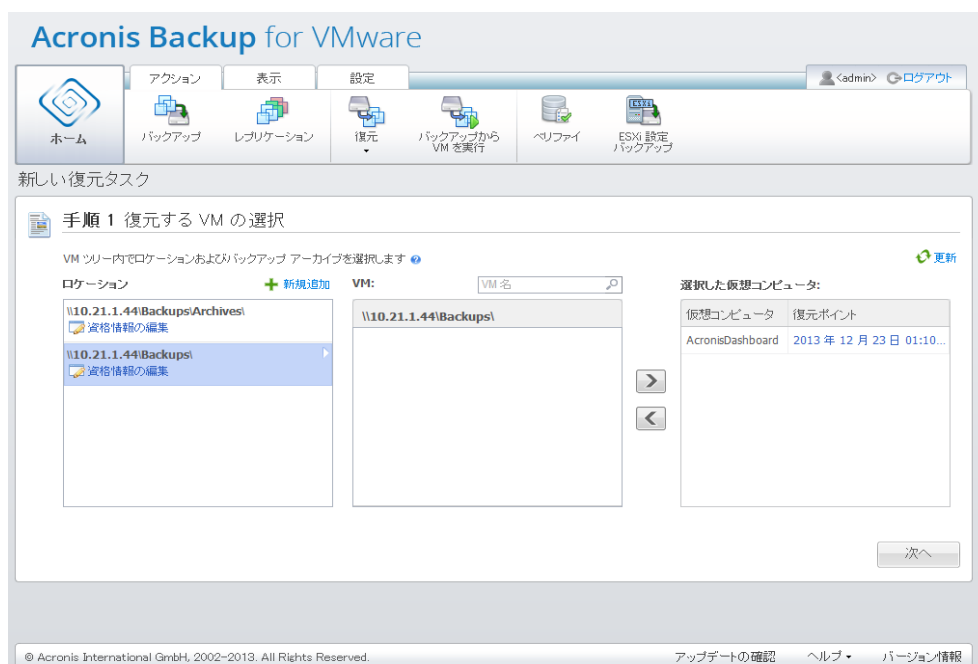
1 つ以上のバックアップされた仮想コンピュータを復元するには、メイン メニューの **[アクション]** タブで **[復元]->[VM 全体]** を選択します。メインのワークスペース領域に**新しい復元タスク** ウィザードが開いたら、必要な情報を指定して新しい復元タスクに必要な設定を行うように求められます。このウィザードは、同じ領域に順番に表示される次の 3 つの手順で構成されています。

- 復元する VM の選択
- 復元先
- 復元方法

以降のセクションで、復元ウィザードのこれら 3 つの手順とオプションについて説明します。

10.1.1 復元する VM の選択

バックアップ復元タスク ウィザードの最初の手順では、バックアップの保存先を定義し、復元する仮想コンピュータを選択します。選択したロケーションでアーカイブとその内容がスキャンされます。これは、バックアップの復元に使用する復元ポイントを定義するために必要な作業です。



新しい復元タスク ウィザード、手順 1: 復元する VM の選択

物理コンピュータのイメージを含むアーカイブを選択した場合 (物理から仮想または P2V 移行を実行する必要がある場合)、こうしたアーカイブには復元ポイントが 1 つしか含まれていないため、この手順でその他のオプションが提供されないことに注意してください。

選択したロケーションに、パスワードで保護されたアーカイブ、または物理コンピュータのアーカイブが含まれている場合、**[暗号化および物理コンピュータのデータ]** のリストに表示されます。このアーカイブからデータを復元するには、**[パスワード]** ポップアップにパスワードを指定する必要があります。

左側のリストから仮想コンピュータのいずれかを選択すると、それらのコンピュータを右側の **[選択した仮想コンピュータ]** セクションに移動できるようになります。仮想コンピュータを選択するには、仮想コンピュータをダブルクリックするか、**[>]** および **[<]** ボタンを使用して、**パタフライ コントロール**の左側から右側へコンピュータを移動してください。右側のリストに、復元対象として選択された仮想コンピュータがすべて表示されます。この復元リストに **VM** を追加するには **[>]** ボタンを使用し、リストから **VM** を削除するには **[<]** ボタンを使用します。このリストには、選択された仮想コンピュータのほか、これらで利用できる最新の復元ポイント（元に戻すことが可能な時点）が表示されます。

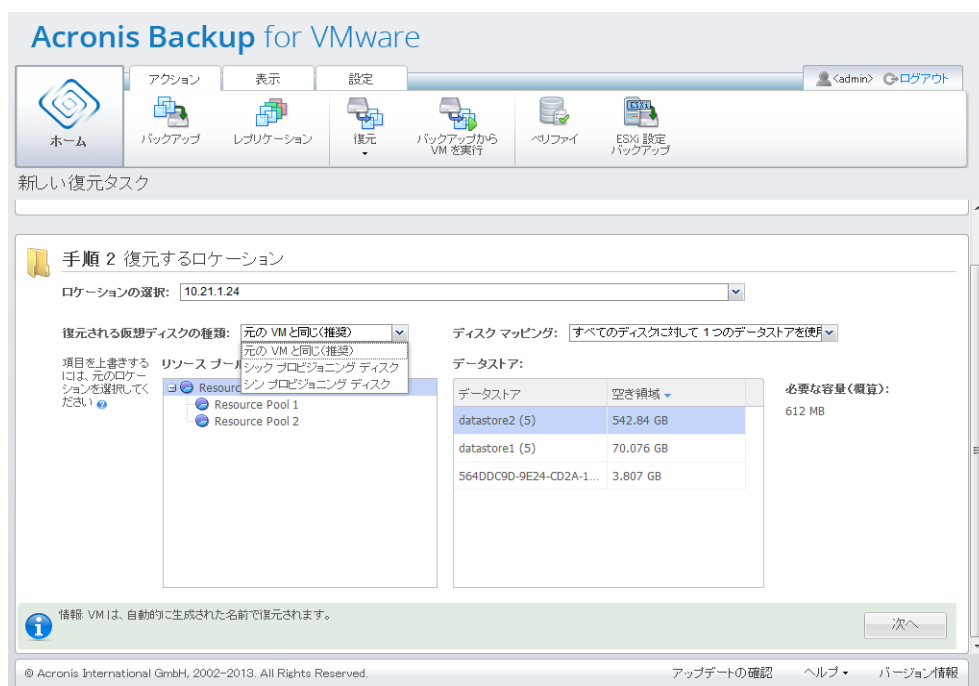
仮想コンピュータごとに、最新の復元ポイントがデフォルトで選択されています。この復元ポイントはクリックして変更できます。表示されるポップアップ ウィンドウでは、別の復元ポイントを選択できます。

[復元ポイントの選択] ポップアップでは、対象の仮想コンピュータで使用可能なすべての復元ポイントのリストが表示され、復元する復元ポイントを選択できます。リストには、この復元ポイントと作成時間を含むアーカイブ名が含まれます。

[復元する VM の選択] を選択したら、**[次へ]** をクリックし、ウィザードの最初の手順を終了して次に進みます。

10.1.2 復元先

バックアップ復元タスク ウィザードの手順 2 では、選択した仮想コンピュータの復元先を定義します。



新しい復元タスク ウィザード、手順 2: 復元先

最初に、**[ロケーションの選択]** ドロップダウン リストを使用して、復元タスクの適切な復元先を定義します。選択した仮想コンピュータを元のロケーションまたは異なる **ESX(i)** ホストやデータストアに復元する場合は、そのロケーションを選択してください。リストには **Acronis Backup for VMware** エージェントによって管理される **ESX(i)** ホストのみが表示されます。目的の **ESX(i)** ホストがリストにない場合は、そのホストが **[設定] -> [ESX(i) ホスト]** ビューに追加されているかどうか確認してください。

VM の復元に **[元のロケーション]** を選択した場合は、**[増分復元を使用]** チェック ボックスをオンにすることで、増分復元モードを実行できます。増分復元では、仮想コンピュータのすべてのデータを復元するのではなく、元の VM で変更されたブロックのみを確認し、復元します。このモードは、**Acronis Cloud Storage** など、速度が遅いバックアップ ロケーションやその他の遅い接続からの復元速度の向上に役立ち、復元中のトラフィックを最小限に抑えます。

増分復元モードは、バックアップを作成するために使用された元の VM に対して復元を実行する場合にのみ使用できます。新しいロケーションに復元を実行する場合や元の VM がいない場合、完全復元が実行されます。

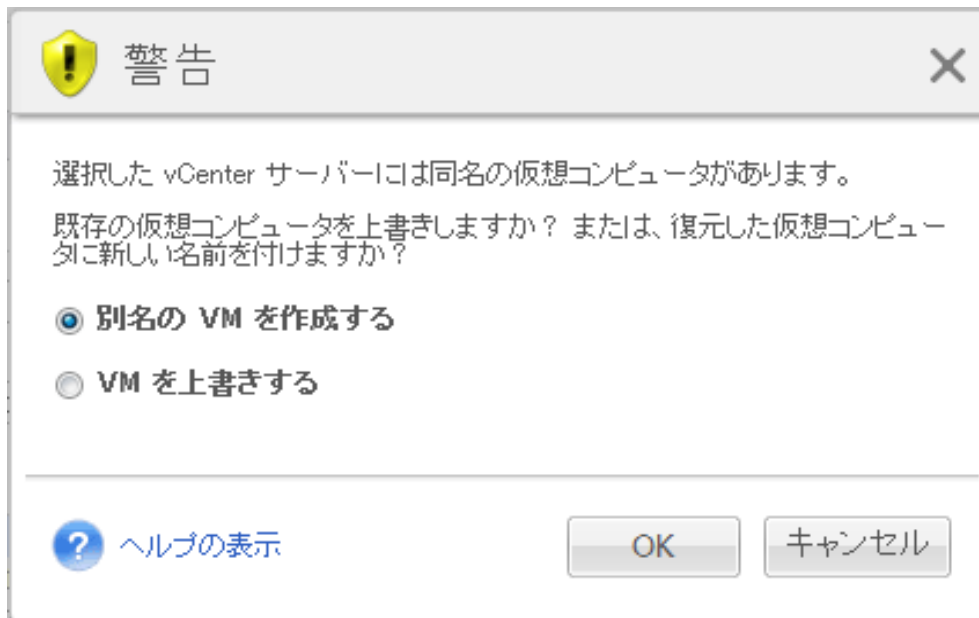
[元のロケーション] に復元するとき、復元された VM が復元ポイントの作成時と同じロケーションに表示されない（既存の VM を自動的に上書きする）ことがあります。これは、選択した VM（復元ポイントで定義した VM）がホストまたはデータストア（あるいはその両方）、**ESX(i)** ホスト、リソース プール、または **vApp** へ移行されている場合に起こります。VM は移行時に自身の **UUID** を保持するため、仮想コンピュータは現在のロケーションに復元されます。たとえば、復元ポイントの作成時に **vApp1** 内にあった VM を後から **vApp2** へ移行したとします。この場合、この VM は **vApp2** に復元され、既存の VM が上書きされます。

ESX(i) ホストを定義すれば、復元される仮想コンピュータの正しいロケーションの定義に利用できるリソース プールとデータストアのリストが自動で作成されます。

このほか、復元される仮想ドライブのフォーマットを対応するドロップダウン リストで、**[元の VM のとおり（推奨）]**、**[シック プロビジョニング ディスク]**、または **[シン プロビジョニング ディスク]** として定義する必要があります。シン プロビジョニングでは、動的な割り当てと物理的なストレージ容量のインテリジェントなプロビジョニングを可能にして、VM ストレージの利用率が改善されます。

選択した内容に応じて、正常な復元処理のため必要なデータストア内の空き領域が表示されます。バックアップ復元タスク ウィザードの次の手順に進むには、十分な空き領域がある有効なデータストアを選択する必要があります。

複数の仮想コンピュータを復元する場合は、復元ウィザードのこの手順で定義した復元先にすべて配置されます（選択されたデータストア上の新しい VM にそれぞれ配置）。



新しい復元タスク ウィザード、手順 2: 復元先、既存 VM の上書きを確認するダイアログ

選択した ESX(i) ホストまたはデータストアに同じ名前の仮想コンピュータが存在している場合は、既存の VM の上書きを承認するように求められます。ここでは、復元された仮想コンピュータの命名方法を選択して定義します。[VM を上書きする] を選択すると、既存の仮想コンピュータが復元された仮想コンピュータに置き換えられます。

この場合、データストアを選択することはできません（対象 VM によって定義され、上書きされているため）。ただし、この VM のリソース プールのロケーションは [リソース プール] の選択から対応するアイテムを選択して変更できます。

既存のコンピュータが稼働中の場合、正常な復元処理を行うには手動で停止させるか、または復元オプションのダイアログで [復元開始時にターゲットの VM の電源をオフにする] オプションをオンにします（「VM 電源管理 『69ページ』」セクションを参照）。

[別名の VM を作成する] オプションをオンにすると、復元された VM は次の規則に基づいて命名されます。

[Original_VM_name]_DATE

ここで、「Original_VM_name」は復元された仮想コンピュータの当初の名前で、「DATE」は現在の日付です。たとえば、復元された VM の名前が「VM_original」の場合、復元後の名前は「VM_original_05/25/2011」となります。

デフォルトでは、仮想コンピュータのすべてのディスクは単一のデータストアに復元されます。ただし、ストレージを複数のデータストアに分散するために、復元された仮想ディスクを別のデータストアに手動でマッピングできます。

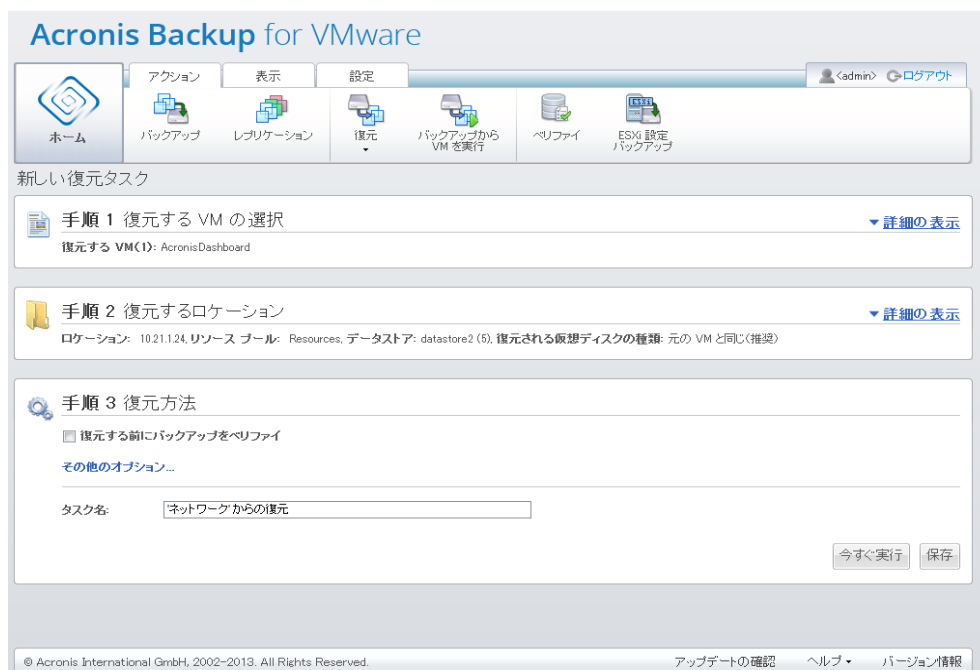
[ディスク マッピング] ドロップダウン リストで **[各ディスクのターゲット データストアを選択]** オプションを選択します。次に、復元されたそれぞれのディスクが配置されるターゲット ESXi ホストの個別のデータストアを選択します。マッピングするデータストアそれぞれについてデータストア列で **[変更...]** をクリックし、**[データストアの選択]** リストからいずれかのデータストアを選択します。

[復元先] の選択が完了したら **[次へ]** をクリックし、2 番目の手順を終了して最後の手順に進みます。

10.1.3 復元方法

バックアップ復元タスク ウィザードの手順 3 では、復元タスクの基本設定を定義します。

ここでは、復元前にアーカイブをベリファイするかどうか指定できます（バックアップのベリファイの詳細については、「バックアップのベリファイ 『104ページ』」セクションをご参照ください）。また **[その他のオプション...]** リンクをクリックして、復元タスクの設定を調整できます。



新しい復元タスク ウィザード、手順 3: 復元方法

ウィザードを完了してバックアップ復元タスクを作成するには、タスク名を設定して、タスクの実行方法を定義する必要があります。記号 `[]`、`{}`、`;`、`、`、`.` はタスク名には使用できません。

[今すぐ実行] ボタンをクリックすると、タスクは指定したパラメータに従ってすぐに実行されます。タスクの進行状況バーは、**[タスク] ビュー**および**[ダッシュボード] ビュー**に表示されます。タスクを 1 回だけ実行する場合は、この設定を選択してください。タスクの結果は **[ダッシュボード]** に表示され、**[ログ] ビュー**で確認することもできます。

[保存] ボタンをクリックすると、タスク リスト (**[ビュー]** -> **[タスク]**) にタスクが保存されます。後で **[タスク] ビュー** ページから手動でタスクを実行する場合、またはタスクを何度も実行する場合は、そのタスクを保存しておく便利です。

10.1.4 オプション

バックアップ復元タスク ウィザードの最後の手順で **[その他のオプション...]** をクリックすると、その他の設定のポップアップ ウィンドウが開きます。

設定を何も変更しない場合は、現在の復元タスクのデフォルト値が維持されます。後から特定の設定を変更してデフォルトとして保存しても、デフォルトの設定で作成されたタスクには影響しません（これらの設定では、タスク作成時のデフォルト値が維持されます）。

10.1.4.1 通知

1) [電子メールによる通知]

このオプションでは、正常な完了、復元の失敗、ユーザーによる操作の必要性など、復元タスクの実行時に発生する基本的なイベントに対して、電子メールによる通知を設定できます。このオプションのデフォルト設定は無効です。

[電子メールによる通知を送信する] チェック ボックスをオンにして、通知を有効にします。

[電子メールによる通知を送信する] チェック ボックスの下で、希望する設定を次のように選択します。

- **[復元が正常に終了したとき]:** 復元タスクが正常終了した場合に通知を送信します。
- **[復元が失敗したとき]:** 復元タスクが失敗した場合に通知を送信します。
- **[通知に完全ログを追加する]:** ログすべてを受信します。

通知の送信先となる電子メール アドレスを 1 件以上入力します。複数のアドレスを入力する場合は、セミコロンで区切って **[電子メール アドレス]** フィールドに入力してください。

通知メッセージに対して、適切な **[件名]** を指定します。

- **[SMTP サーバー]:** 送信メール用 SMTP サーバーの名前を入力します。
- **[ポート]:** SMTP サーバーのポートを設定します (デフォルトのポート値は 25 に設定されます)。
- **[ユーザー名]:** ユーザー名を入力します。
- **[パスワード]:** パスワードを入力します。

[差出人]: メッセージの送信元となるユーザーの電子メール アドレスを入力します。このフィールドが空白の場合、差出人アドレスに宛先アドレスが使用されてメッセージが送信されます。

[暗号化を使用する]: メール サーバーへの暗号化された接続を選択し、暗号化の種類として SSL または TLS を選択できます。

[テスト用電子メール メッセージの送信] をクリックし、すべての設定が正しいことを確認します。

2) [SNMP 通知]

このオプションでは、管理対象のコンピュータ上で動作するエージェントが、指定された簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) マネージャに復元処理イベントのログを送信するか

どうか定義します。送信するイベントの種類は選択可能です。このオプションのデフォルト設定は無効です。

SNMP 管理アプリケーションを実行しているコンピュータに復元処理のイベント ログ メッセージを送信するかどうかを選択します。次のいずれかを選択してください。

- **[復元処理のイベントの SNMP 通知を個別に送信する]:** 復元処理のイベント ログを指定された SNMP マネージャに送信します。
[送信するイベントの種類]: 送信するイベントの種類を、[情報]、[警告]、または [エラー] から選択します。
[サーバー名またはサーバーの IP]: 通知送信先の SNMP 管理アプリケーションが稼動しているホストの名前または IP アドレスを入力します。
[コミュニティ]: SNMP 管理アプリケーションが稼動しているホストと送信元コンピュータの両方が属する SNMP コミュニティの名前を入力します。一般的なコミュニティは [public] です。
[テスト メッセージを送信する] をクリックし、すべての設定が正しいことを確認します。
- **[SNMP 通知を送信しない]:** SNMP マネージャに復元処理のイベント ログを送信しません。

10.1.4.2 エラー処理

次のオプションによって、復元操作中に発生する可能性があるエラーを処理する方法を指定できます。サイレント モードを有効にするには、**[エラーが発生した場合は再試行する]** チェック ボックスをオンにします。

復元可能なエラーが発生した場合、失敗した処理が再試行されます。**[試行の間隔]** および **[試行の回数]** を設定できます。タスクは、復元処理に成功するか、または指定された試行回数に達すると停止します。

[エラーが発生した場合は再試行する] チェック ボックスをオンにした場合は、**[試行回数]** と **[試行間隔]** を設定します。このオプションは、デフォルトで **[試行回数]** が 5、**[試行間隔]** が 30 秒に設定されて有効になっています。たとえば、ネットワークの復元先が使用できないか、接続できない場合、30 秒ごとに 5 回まで復元先への接続が試行されます。試行は、接続が再開されるか、または指定された試行回数に達すると停止します。

相互接続された大量の VM を復元する場合などは、**[失敗した場合はすべてのタスク処理をキャンセルする]** チェックボックスをオンにします。こうすることで、1 つの VM の復元に失敗すると、他のすべての復元操作もキャンセルされます。

10.1.4.3 VM 電源管理

復元完了時にターゲット VM の電源をオンにする

次のオプションでは、バックアップ復元タスクの実行後に仮想コンピュータの電源管理を設定できます。

コンピュータが別のコンピュータに復元された後で、既存コンピュータのレプリカがネットワーク上に現れることがあります。安全に運用するため、復元した仮想コンピュータの電源は、必要な安全対策を行ってから手動でオンにしてください。

このオプションはデフォルトで無効になります。仮想コンピュータを自動的に起動する場合は、**[復元完了時にターゲット VM の電源をオンにする]** チェック ボックスをオンにします。

10.1.4.4 その他の設定

[FTP をアクティブ モードで使用する]

FTP 認証とデータ転送のために、FTP アクティブ モードを使用することができます。**[FTP をアクティブ モードで使用する]** のデフォルト設定は無効です。

FTP サーバーがアクティブ モードをサポートしていて、ファイル転送にアクティブ モードを使用する場合は、このオプションを有効にします。

すべての設定を完了したら、**[OK]** をクリックしてポップアップ ウィンドウを閉じ、現在の復元タスクにのみ設定を適用します。

10.1.4.5 Exchange 復元設定

Microsoft Exchange Server バックアップの展開を実行する前に、デフォルトのアプリケーション展開設定を設定する必要があります。メールボックスまたはメールボックスのコンテンツを展開するには、バックアップから特定の VM を一時的にマウントする必要があります。**[アプリケーションの設定]** タブに移動して、VM マウント パラメータを指定します。

- ESX(i) ホスト
- リソース プール
- データストア

10.1.5 作成済み復元タスクの管理

既存の復元タスクを編集する場合は、復元タスクの作成時に完了したウィザードの全セクション（手順）をすべて確認できます。画面には、ウィザードの 3 つの手順がすべて一度に表示されます（詳細については、「タスクの管理 『93ページ 』」セクションをご参照ください）。

10.2 ファイルの復元

仮想コンピュータ全体を復元せずに、バックアップ アーカイブから 1 つ、または少数のファイルだけを復元しなければならない場合があります。 **ファイルの復元機能**を使用すれば、アーカイブを参照して、そのアーカイブの事前に定義されたバージョン（復元ポイント）の

選択したファイルを復元することができます。復元先は、Backup for VMware 管理コンソールを実行しているインターネット ブラウザで用意されたオプションを使用して定義します（ダイアログは、[ファイル]->[名前を付けて保存...] オプションを使用してインターネット ページを保存する場合に表示されるものと同じです）。

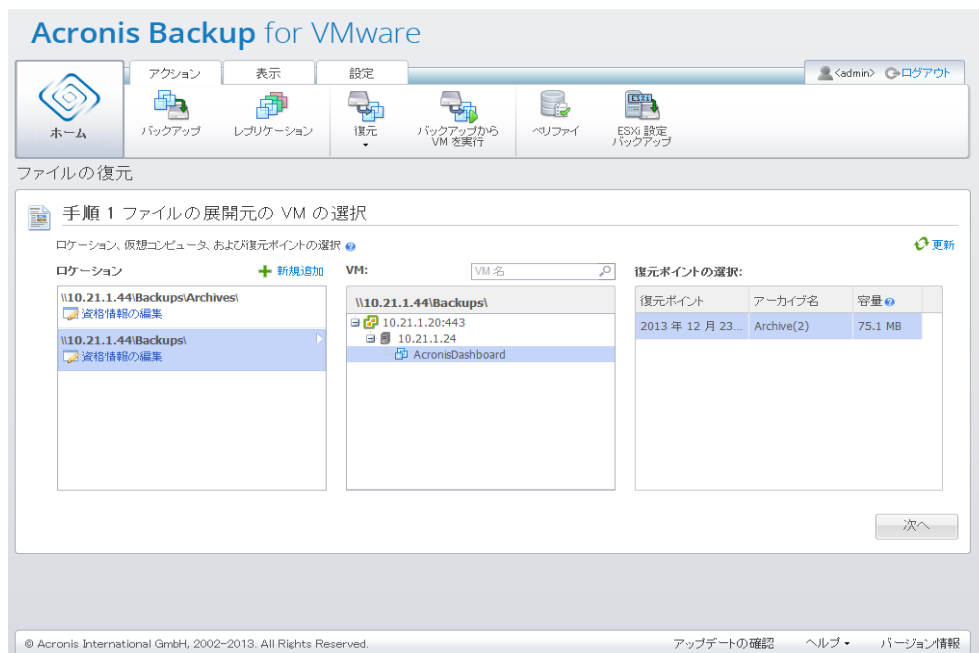
1 つ以上のバックアップ ファイルを復元するには、メイン メニューの [アクション] タブで [復元]->[ファイルとフォルダ] をクリックします。メインのワークスペース領域にファイル復元ウィザードが開いたら、必要な情報を指定してファイルの復元タスクに必要な設定を行うように求められます。このウィザードは、次の 2 つの手順で構成されています。

- ファイルの抽出元の VM の選択
- 復元ポイントの参照

注意: ファイルの復元機能は、Acronis Cloud Backup Storage に保存されたバックアップに対しては使用できません。この種類のバックアップ ストレージからの復元で実行できるのは、VM 全体の復元のみです。

10.2.1 ファイルの抽出元の VM の選択

最初に、バックアップの保存先を定義します。このバックアップの保存先からアーカイブとその内容がスキャンされます。



ファイル復元ウィザード、手順 1: ファイルの抽出元の VM の選択

選択したロケーションにパスワードで保護されたアーカイブ、または物理コンピュータのアーカイブ（暗号化および物理コンピュータのデータ）がある場合は、これらのアーカイブからデータを復元するためにパスワードを指定する必要があります。

選択したロケーションからアーカイブとその内容がスキャンされます。スキャンすると、選択した保存先または選択したアーカイブ内に格納された全アーカイブに含まれる仮想コンピュータが、左側のツリー リストに表示されます。いずれかの仮想コンピュータをクリックすると、そのコンピュータのすべての復元ポイントのリストを右側に表示して確認できます。

コンピュータごとに、最新の復元ポイントがデフォルトで選択されています。復元ポイントはクリックして変更できます。ファイルの復元で一度に選択できるのは、単一の仮想コンピュータと単一の復元ポイントだけです。バックアップの復元タスクでは複数の VM を復元できます。

仮想コンピュータの復元ポイントを選択したら、次の手順に進むことができます。この復元ポイントは、ファイル/フォルダを展開する仮想コンピュータの状態を定義します。

10.2.2 復元ポイントの参照

ファイル復元ウィザードの 2 番目の手順では、復元するファイルまたはフォルダを選択する必要があります。ここでは、Windows エクスプローラに似たディレクトリ ブラウザを使用して、選択した VM の復元ポイントの内容を表示できます。左側の参照ツリーでボリュームおよびフォルダを展開すると、復元する各ボリューム/フォルダの内容を右側で参照/選択できます。

Acronis Backup for VMware の**ファイル復元**ウィザードには、組み込みの検索機能が用意されています。検索ボックスはファイルおよびフォルダ リストの右上隅にあります。復元するファイルの正確な名前が不明な場合は、この検索機能を使用できます。リスト内のファイルおよびフォルダをフィルタリングすると、「ファイル マスク」と呼ばれる検索条件のいずれかに一致するファイルおよびフォルダだけを表示することができます。

1 つ以上のワイルドカード文字（例: 「C:\Finance*.*」）をファイル マスクとして使用できます。

検索結果は、列、名前、修正日時、サイズ、フォルダのいずれかによってソートすることも可能です。最初に特定のフィールド（時刻など）でソートして、次に別のフィールド（名前など）でソートできます。その場合、データは最初に名前、次に時刻というように 2 つのレベルでソートされます。これにより、復元に必要なファイルを簡単に見つけることができます。

復元するファイルをすべて選択したら、**[展開先...]** ボタンまたは **[.zip としてダウンロード]** ボタン（選択したすべてのファイルとフォルダが単一の .zip アーカイブとしてダウンロードされます）をクリックします。デフォルトのブラウザのポップアップ ウィンドウが表示され（マウスを右クリック -> **[対象をファイルに保存...]** ポップアップの場合と同じ）、選択したバックアップ ファイルの保存先を選択できます。

ファイルを .zip にまとめる処理によって復元の速度が大幅に低下する可能性があるので（最低 2 MB/秒）、**[.zip としてダウンロード]** オプションは復元するサイズが小さい場合に使用し、**[展開先...]** オプションは 500 MB を超えるデータに使用することをお勧めします。また、ファイルを .zip アーカイブとして復元する場合、NTFS セキュリティ設定は保持されないのに注意してください。

ファイルの復元は、「*:*<>|/\」のような無効な文字を含むファイル名に対して正常に実行することはできません。<>|/\。このようなファイルの復元には、バックアップから VM を実行処理を使用してください。

10.3 Microsoft Exchange Server バックアップの展開

Microsoft Exchange Server がインストールされている仮想コンピュータのディスクレベルのバックアップから、Exchange データのみを展開する必要がある場合があります。 **Microsoft Exchange Server アイテムの展開機能**では次のことが可能です。

- VM バックアップからのすべての Exchange データベースの展開。
- VM バックアップからの Exchange データ（メールボックス、メールボックス アイテム）の展開。

注意: **Microsoft Exchange Server アイテムの展開ウィザード**を実行する前に、バックアップが「アプリケーション アウェア」になるように設定する必要があります。 オプションで、バックアップ後にトランザクション ログを切り捨てることもできます（詳細については、「アプリケーション アウェア バックアップの設定 『46ページ 』」セクションをご参照ください）。

バックアップ アーカイブから必要な Exchange アイテムを展開するには、メイン メニューの [アクション] タブで [復元] -> [Microsoft Exchange Server アイテム] ボタンをクリックします。 **Microsoft Exchange Server アイテムの展開**ウィザードは、操作の完了に必要な複数の手順で構成されています。 Exchange データベースの展開、および Exchange メールボックスならびにメールボックスのコンテンツを展開するウィザードの各手順は、以降のセクションで説明します。

10.3.1 データベースの展開

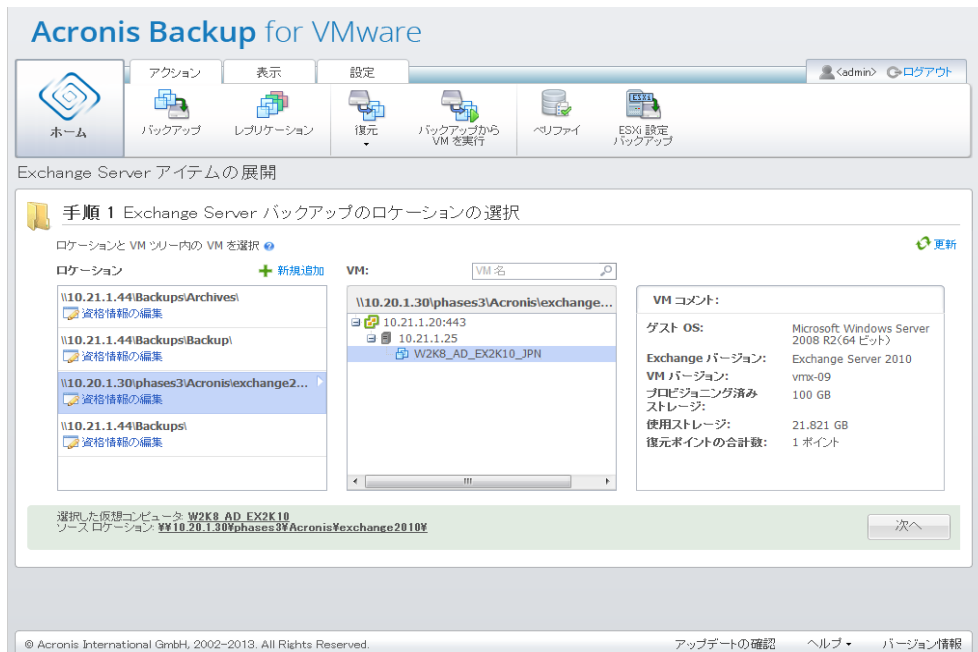
データベースの展開を選択すると、.edb フォーマットで MS Exchange Server データベースを展開して、ネットワーク共有に保存できます。

指定されたフォルダにデータベースを復元するということは、データベース ファイルとトランザクション ログ ファイルがバックアップから展開され、指定したフォルダに格納されることを意味します。これは、監査やサード パーティのツールを使用してさらに処理するためにデータを展開しなければならない場合や、データベースを手動でマウントする手段が必要な場合に便利です。

Exchange データベースを展開するには、次の 4 つの手順を実行する必要があります。

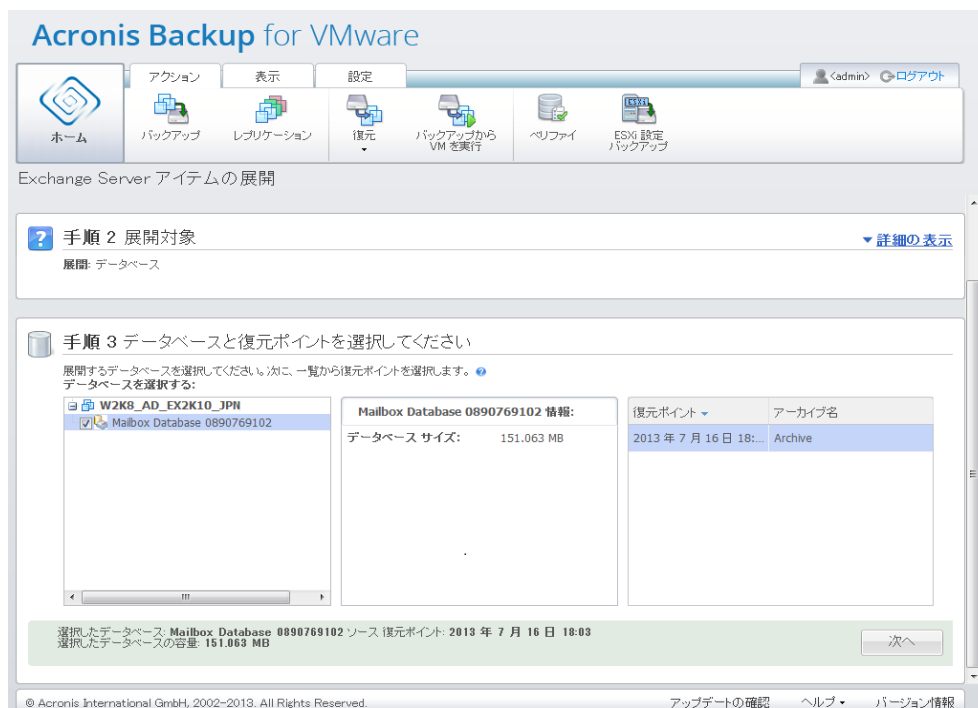
1. **Exchange Server バックアップが存在するロケーション**を選択します。
2. **展開する対象（データベース）**を選択します。
3. **データベースと復元ポイント**を選択します。
4. **データベースの展開先**を選択します。

最初の手順では、Exchange Server バックアップが存在するロケーションと VM を選択する必要があります。左側に、バックアップ ロケーションのリストが表示されます。ロケーションを選択すると、Exchange VM バックアップがスキャンされ、中央のセクションに表示されます。Exchange データベースの展開元 VM を選択します。右側に、概要情報が表示されます。その後、[次へ] をクリックします。



Exchange Server アイテムを展開し、Exchange Server バックアップが存在するロケーションを選択

2 番目の手順では、**データベース**を選択します。3 番目の手順では、左側のリストから **Exchange Server** を選択して、右側で復元ポイントを選択します。デフォルトでは、最新の復元ポイントが選択されます。選択した復元ポイント、データベース、およびその容量に関する情報が表示されます。**[次へ]** をクリックします。



Exchange Server アイテムを展開し、データベースおよび復元ポイントを選択

最後に、**[参照]** をクリックして、データベース アーカイブの保存先フォルダを選択します。**[完了]** をクリックして、展開を続行します。

展開したデータベースは、**異常終了**の状態となり、マウントできません。データベースをマウントできるようにするには、**Eseutil /r <Enn>** コマンドを使用して、データベースを**正常終**

了の状態にする必要があります。<Enn> には、トランザクション ログ ファイルを適用する必要があるデータベース（または、このデータベースを含むストレージ グループ）で使用されるログ ファイルの接頭辞を指定します。この手順については、以下を参照してください。

- <http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd876926.aspx>
- [http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/aa998340\(EXCHG.80\).aspx](http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/aa998340(EXCHG.80).aspx)

10.3.2 メールボックスの展開

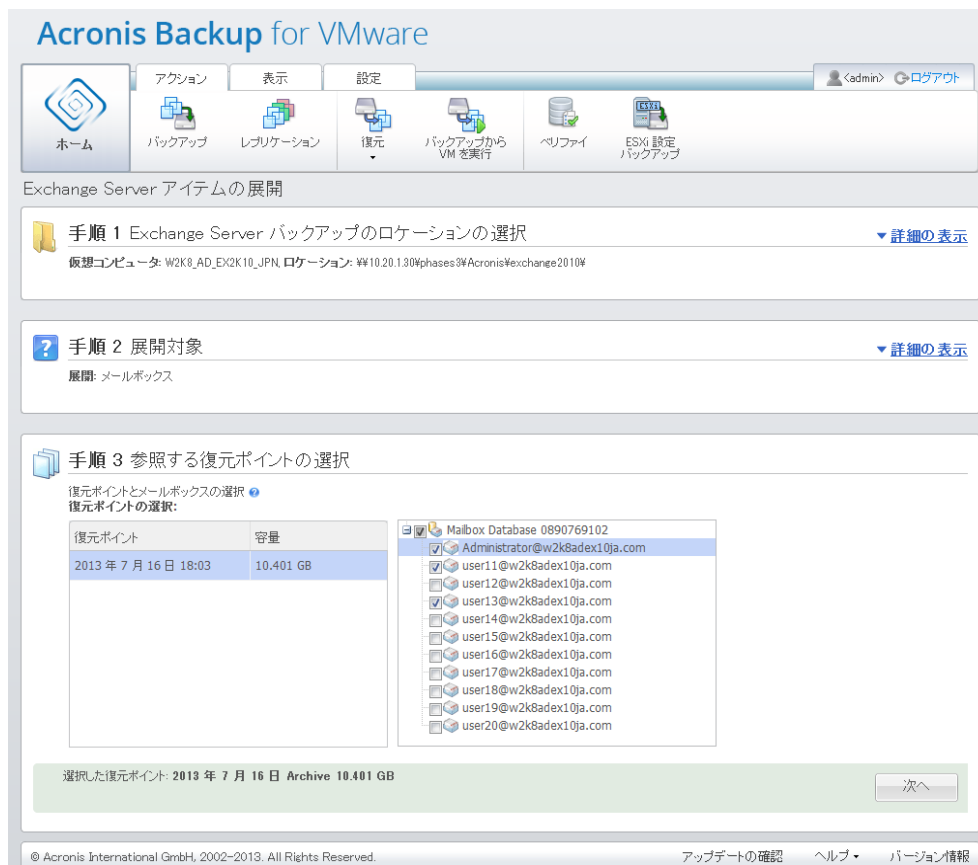
メールボックスを展開するとき、次の手順に従うことで、特定の Microsoft Exchange Server メールボックスを展開できます。

1. **Exchange Server** バックアップが存在するロケーションを選択します。
2. 展開対象（メールボックス）を選択します。
3. 参照およびメールボックスのリカバリ ポイントを選択します。
4. 選択したアイテムの保存先を選択します。

最初の手順では、Exchange Server バックアップが存在するロケーションと VM を選択する必要があります。左側に、バックアップ ロケーションのリストが表示されます。ロケーションを選択すると、Exchange VM バックアップがスキャンされ、中央のセクションに表示されます。メールボックスの展開元 VM を選択します。右側に、概要情報が表示されます。**[次へ]** をクリックします。

2 番目の手順では、メールボックスを選択します。別の **Exchange アイテムの展開** タスクがアクティブになっている場合、続行を確認するポップアップが表示されます。現在の Exchange アイテムを続行するには、タスクをすでに開始している参照操作を停止する必要があります。続行する他のタスクが停止していることを確認します。

3 番目の手順では、左側の復元ポイントを選択します。デフォルトでは、最新の復元ポイントが選択されます。右側で、Exchange Server を参照し、展開するメールボックス（複数可）を選択します。その後、**[次へ]** をクリックします。



Exchange Server アイテムを展開し、参照する復元ポイントを選択

最後の手順では、**[参照]** をクリックし、選択したアイテムの保存先フォルダを選択し、**[完了]** をクリックして展開を続行します。ウィザードが完了すると、展開タスクが作成され、**[タスク] ビュー ([表示] -> [タスク])** に表示されます。タスクの進行状況と、その他の統計情報を追跡することができます。このタイプのタスクを編集することはできないことに注意してください。

メールボックスを展開するには、バックアップの選択したリカバリ ポイントから一時仮想コンピュータを直接起動する必要があります。これには数分かかる場合があります。マウント処理の進行状況が表示されます。マウントに失敗した場合、ログが表示され、タスクがキャンセルされる場合があります。

ただし、この一時 VM は 15 分間、マウントされたままになります。**Exchange Server アイテムの展開**ウィザードを終了し、もう一度起動した場合、**[過去に選択した復元ポイントの参照を続行する]** を選択できます。

選択したメールボックスが、指定した保存先に、Acronis Backup for VMware 自己展開型 (.exe) アーカイブとして保存されます。Microsoft Outlook (2003 以降) がインストールされているすべてのコンピュータで、このファイルを実行し、電子メールおよびその他のアイテムを .pst フォーマットで展開することができます。

アーカイブからデータを解凍すると、展開するコンテンツを選択してデータの展開先フォルダを指定できます。**[展開]** をクリックすると、進行状況が表示されます。データが、Microsoft Outlook で開くことができる (**[ファイル] -> [開く]**) .pst ファイルで展開されます。展開処理を実行するコンピュータには、Microsoft Outlook がインストールされている必要があります (MAPI が必要なため)。

10.3.3 メールボックスのコンテンツの展開

メールボックスのコンテンツを展開するとき、次の手順に従うことで、メールボックスを参照して、特定のコンテンツ（フォルダおよびアイテム）を展開できます。

1. **Exchange Server** バックアップが存在するロケーションを選択します。
2. 展開対象（メールボックスのコンテンツ）を選択します。
3. 展開するメールボックス（複数可）または参照する復元ポイントを選択します。
4. 展開するフォルダまたはアイテムを選択します。
5. 選択したアイテムの保存先を選択します。

最初の手順では、**Exchange Server** バックアップが存在するロケーションと **VM** を選択する必要があります。左側に、バックアップ ロケーションのリストが表示されます。ロケーションを選択すると、**Exchange VM** バックアップがスキャンされ、中央のセクションに表示されます。メールボックスとメールボックスのコンテンツの展開元 **VM** を選択します。右側に、概要情報が表示されます。**[次へ]** をクリックします。

2 番目の手順では、**メールボックスのコンテンツ**を選択します。

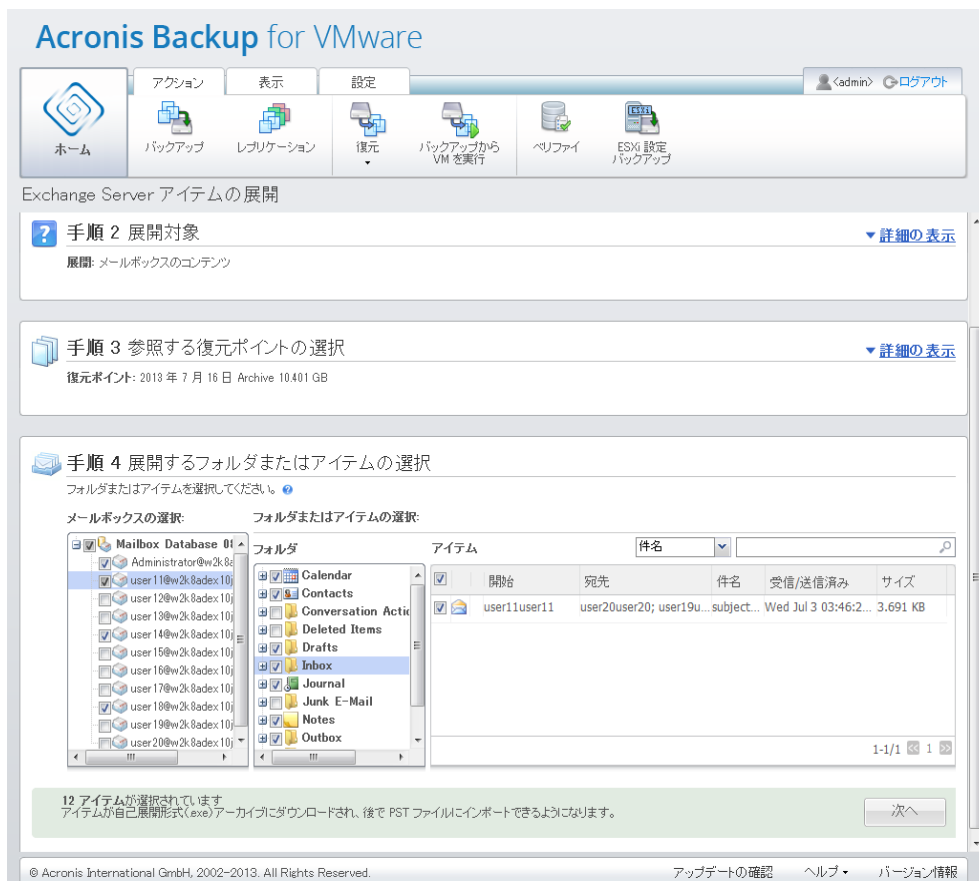
3 番目の手順では、左側の復元ポイントを選択します。デフォルトでは、最新の復元ポイントが選択されます。

4 番目の手順では、**[電子メールの参照]** をクリックして、展開する特定のメールボックスのコンテンツを選択します。メールボックスのコンテンツを参照するには、バックアップの選択した復元ポイントから一時仮想コンピュータを直接起動する必要があります。これには数分かかる場合があります。マウント処理の進行状況が表示されます。処理が正常に終了すると、メールボックス（複数可）のコンテンツを選択できます。マウントに失敗した場合、ログが表示され、タスクがキャンセルされる場合があります。

ただし、この一時 **VM** は 10 分間、マウントされたままになります。**Exchange Server アイテムの展開ウィザード**を終了し、もう一度起動した場合、**[過去に選択した復元ポイントの参照を続行する]** を選択できます。

メールボックスのコンテンツを選択する 4 つの手順は次のとおりです。使用可能なメールボックスのリストは左側にあります。メールボックスを選択すると、メールのすべてのコンテンツがフォルダおよびアイテムとして表示されます。展開するすべてのアイテムを選択します。他のメールボックスについてもアイテムの選択を繰り返すことができます。終了したら、**[次へ]** をクリックします。

最後の手順では、**[参照]** をクリックし、選択したアイテムの保存先フォルダを選択し、**[完了]** をクリックして展開を続行します。**Exchange** アイテム展開情報のポップアップが表示されます。



Exchange Server アイテムを展開し、アイテムの保存先を選択

選択したメールボックスとメールボックスのコンテンツが、指定した保存先に、Acronis Backup for VMware 自己展開型 (.exe) アーカイブとして保存されます。Microsoft Outlook (2003 以降) がインストールされているすべてのコンピュータで、このファイルを実行し、電子メールおよびその他のアイテムを .pst フォーマットで展開することができます。

アーカイブからデータを解凍すると、展開するコンテンツを選択してデータの展開先フォルダを指定できます。**[展開]** をクリックすると、進行状況が表示されます。データが、Microsoft Outlook で開くことができる (**[ファイル]** -> **[開く]**) .pst ファイルで展開されます。展開処理を実行するコンピュータには、Microsoft Outlook がインストールされている必要があります (MAPI が必要なため)。

10.4 Microsoft SQL Server データベースの展開

Microsoft SQL Server データベースの展開機能は、Microsoft SQL Server がインストールされた仮想コンピュータのディスクレベルのバックアップから SQL データベースを復元するのに役立ちます。

注意: Microsoft SQL Server データベースの展開ウィザードを実行する前に、バックアップが「アプリケーション アウエア」になるように構成する必要があります。オプションで、バックアップ後にトランザクション ログを切り捨てることもできます (詳細については、「アプリケーション アウエア バックアップの設定 『46 ページ』」セクションをご参照ください)。

バックアップ アーカイブから必要な SQL データベースを展開するには、メイン メニューの **[アクション]** タブで **[復元]** -> **[Microsoft SQL Server]** ボタンをクリックします。**Microsoft SQL Server データベースの展開**ウィザードは、操作の完了に必要な複数の手順で構成されています。

ウィザードの最初の手順では、VM ツリーで MS SQL Server バックアップが存在するロケーションと VM を選択する必要があります。左側に、バックアップ ロケーションのリストが表示されます。ロケーションを選択すると、MS SQL Server バックアップが存在する VM がスキャンされ、中央のセクションに表示されます。MS SQL Server データベースの展開元 VM を選択します。右側に、概要情報が表示されます。選択したら、**[次へ]** をクリックします。

2 番目の手順では、左側のリストからデータベースを選択して、右側で復元ポイントを選択する必要があります。デフォルトでは、最新の復元ポイントが選択されます。選択した復元ポイント、データベース、およびその容量に関する情報が表示されます。手順が完了したら、**[次へ]** をクリックしてください。

最後の手順では、**[参照]** をクリックし、データベース アーカイブの保存先フォルダを選択します。**[完了]** をクリックして、展開を続行します。

10.5 Microsoft SharePoint Server データの展開

SharePoint Server データは、次のように展開します。まず、**[アクション]** -> **[復元]** -> **[Microsoft SQL Server データベース]** に移動し、SharePoint データを含む Microsoft SQL Server データベースの展開を始めます。

次に、**[アクション]** -> **[復元]** -> **[Microsoft SharePoint データ]** ページのリンクから、Acronis SharePoint Explorer ツールをダウンロードしてインストールします。これは、Microsoft SQL Server を実行しているコンピュータにインストールできる別個の .msi インストール パッケージです。そのコンピュータには、Microsoft SharePoint データ展開のために、確認済みのデータベースを接続する必要があります。詳細なインストールとデータ展開手順については、.msi インストール パッケージ実行後に利用できる別個の Acronis SharePoint Explorer ヘルプを参照してください。

11 バックアップから VM を実行

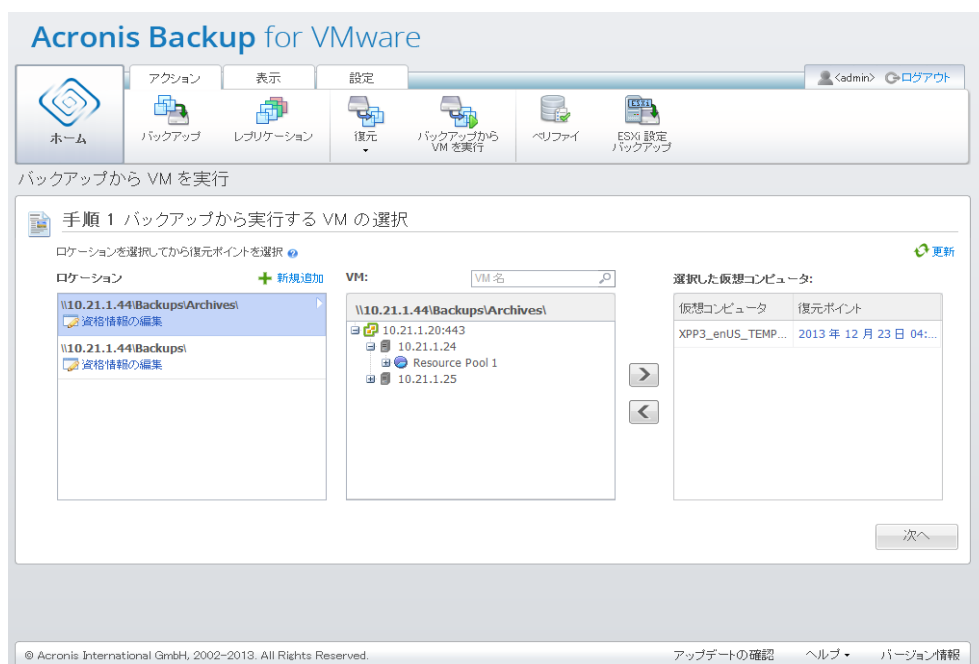
バックアップされた特定の仮想コンピュータを復元せずにマウントする場合は、メインメニューの【アクション】タブで【バックアップから VM を実行】をクリックします。メインのワークスペース領域にバックアップから VM を実行ウィザードが開いたら、必要な情報を指定してバックアップから VM を実行タスクに必要な設定を行うように求められます。このウィザードは、次の 3 つの手順で構成されています。

- バックアップから実行する VM の選択
- VM を実行するロケーション
- その他の設定

次に、バックアップから VM を実行ウィザードの上記 2 つの手順とそのオプションについて説明します。

11.1 バックアップから実行する VM の選択

バックアップから VM を実行ウィザードの最初の手順では、まずバックアップの保存先を定義し、実行する仮想コンピュータを選択します。選択したロケーションからアーカイブとその内容がスキャンされます。これは、バックアップから実行する仮想コンピュータの状態を定義する復元ポイントを選択するために必要な作業です。バックアップ処理から VM を実行することは、「仮想コンピュータのマウント」とも呼ばれます。



バックアップから VM を実行ウィザード、手順 1: バックアップから実行する VM の選択

【バックアップから VM を実行】で保存先に選択できるのは、【ネットワーク フォルダ】または【ローカル フォルダ】のみです。保存先に【Cloud Backup Storage】または【FTP/sFTP サーバー】は利用できません。

選択したロケーションにパスワードで保護されたアーカイブ、または物理コンピュータのアーカイブがある場合は、それらのアーカイブに含まれる VM は表示されず、それを知らせる警告が表示されます。左側のリストから仮想コンピュータのいずれかを選択すると、それらのコンピュータを右側の **【選択した仮想コンピュータ】** セクションに移動できるようになります。仮想コンピュータを選択するには、仮想コンピュータをダブルクリックするか、**[>]** および **[<]** ボタンを使用して、バタフライ コントロールの左側から右側へコンピュータを移動してください。右側のリストに、マウント対象として選択された仮想コンピュータがすべて表示されます。このリストに VM を追加するには **[>]** ボタンを使用し、リストから VM を削除するには **[<]** ボタンを使用します。このリストには、選択された仮想コンピュータのほか、これらで利用できる最新の復元ポイント（元に戻すことが可能な時点）が表示されます。

仮想コンピュータごとに、最新の復元ポイントがデフォルトで選択されています。この復元ポイントはクリックして変更できます。表示されるポップアップ ウィンドウでは、別の復元ポイントを選択できます。

【復元ポイントの選択】 ポップアップでは、対象の仮想コンピュータで使用可能なすべての復元ポイントのリストが表示され、マウントする復元ポイントを選択できます。リストには、復元ポイントのタイムスタンプと、その復元ポイントが含まれているアーカイブのファイル名およびサイズが表示されます。

バックアップから実行する VM を選択したら **【次へ】** をクリックし、ウィザードの最初の手順を終了して次に進みます。

11.2 VM を実行するロケーション

2 番目の手順では、選択した仮想コンピュータの実行先を定義します。

Acronis Backup for VMware

ホーム アクション 表示 設定 <admin> ログアウト

バックアップ レプリケーション 復元 バックアップから VM を実行 ペリファイ ESXi 設定 バックアップ

バックアップから VM を実行

手順 1 バックアップから実行する VM の選択 [詳細の表示](#)

実行する VM (1): XPP3_enUS_TEMPLATE2

手順 2 VM を実行するロケーション

ロケーションの選択: 10.21.124

リソース プールとデータストアの選択

リソース プール:

- ルート リソース プール
 - Resource Pool 1
 - Resource Pool 2

データストア:

データストア	空き領域
datastore2 (5)	542.84 GB
datastore1 (5)	70.076 GB
564DDC9D-9E24-CD2A-...	3.807 GB

マウントした VM 名の接尾辞: _mount

次へ

© Acronis International GmbH, 2002–2013. All Rights Reserved. アップデートの確認 ヘルプ バージョン情報

最初に、**[ロケーションの選択]** ドロップダウン リストを使用して、選択した VM をマウントする ESX(i) ホストを定義します。リストには Acronis Backup for VMware エージェントによって管理される ESX(i) ホストのみが表示されます。目的の ESX(i) ホストがリストにない場合は、そのホストが **[設定] -> [ESX(i) ホスト]** ビューに追加されているかどうか確認してください。

ESX(i) ホストを定義すれば、マウントされる仮想コンピュータの正しいロケーションの定義に利用できるリソース プールのリストが自動で作成されます。マウントされる仮想コンピュータに対する変更内容の保存先を定義するには、データストアを選択する必要があります。

複数の仮想コンピュータをマウントする場合は、**バックアップから VM を実行ウィザード**のこの手順で定義したマウント先にすべて配置されます。つまり、特定の 1 つのリソース プールにそれぞれが配置されます。これらの VM に対する変更内容は、選択したデータストア上の固有のフォルダに保存されます。

また、Acronis Backup for VMware エージェントは、vMotion (特に Storage vMotion) と互換性があります。マウントされた VM を Storage vMotion を使用して別のデータストアに移動した場合、マウント解除時に VM はその新しいロケーションに残されます。この場合、vMotion の実行中にすべてのデータが物理的に新しいデータストアに移動されるため、マウント処理はバックアップの復元を実行した場合と同じことになります。

[マウントされる VM 名の接尾辞] フィールドで、マウントされる仮想コンピュータ名の接尾辞を指定してください。これは、1 台の ESX(i) ホスト上で同じ名前の仮想コンピュータを 2 台実行できないために必要な作業です (特に、そのホスト上で元の VM が既に稼働している場合)。マウントされた VM は、次の規則に基づいて命名されます。

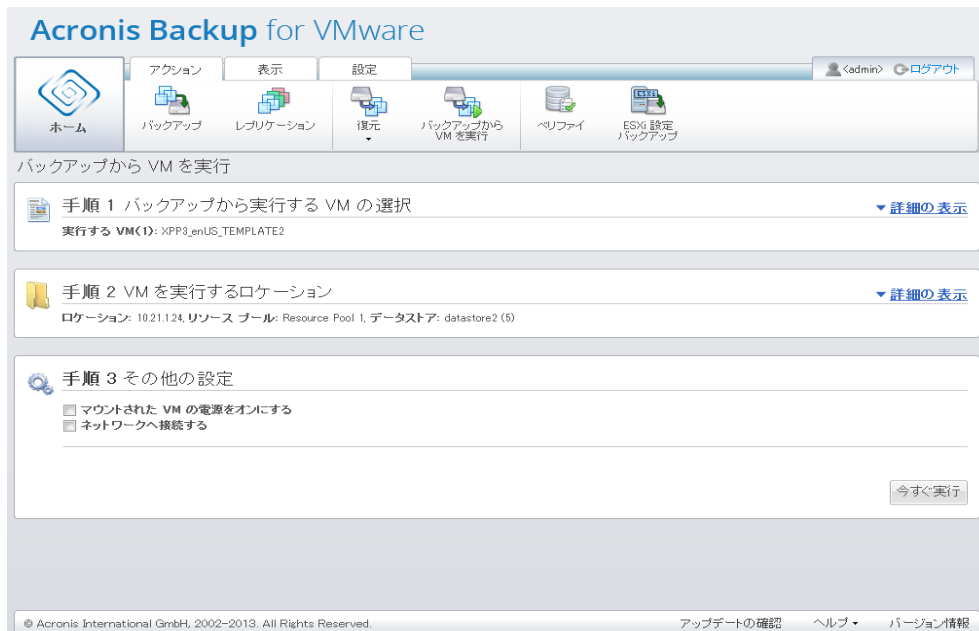
[Original_VM_name]_mount

ここで、「Original_VM_name」はマウントされた仮想コンピュータの当初の名前で、「_mount」は、変更可能な接尾辞です。たとえば、マウントされた VM の名前が「VM_original」の場合、マウント後の名前は「VM_original_mount」となります。

VM を実行するロケーションを選択したら、**[次へ]** をクリックし、2 番目の手順を終了して最後の手順に進みます。

11.3 その他の設定

ウィザードの 3 番目の手順では、**[マウントされた VM の電源をオンにする]** および **[ネットワークへ接続する]** オプションのチェックボックスをオンにすることができます。



バックアップから VM を実行ウィザード、手順 3: その他の設定

ウィザードの終了と同時にコンピュータを自動的に起動するには、**【マウントされた VM の電源をオンにする】** オプションをオンにします。マウントされているコンピュータのレプリカ（元のコンピュータなど）がネットワーク上に存在する可能性があることに注意してください。安全に運用するため、マウントした仮想コンピュータの電源は、必要な安全対策を行ってから手動でオンにすることをお勧めします。

障害が発生し、ネットワークに存在しなくなった VM をマウントする場合は、**【ネットワークへ接続する】** チェックボックスをオンにします。元の VM の実行中にテスト目的で（内部のデータ整合性を確認するため）別の VM をマウントする場合は、このチェックボックスをオフのままにします。VM の電源をオンにする前に、VM のネットワーク構成の設定を手動で変更して業務ネットワークから接続解除し、隔離された非業務ネットワークに再接続して競合を回避する必要があります。

【今すぐ実行】 ボタンをクリックすると、選択した VM が VMware Infrastructure Client に表示され、ご使用の環境内の他の仮想コンピュータと同様に管理できるようになります。VM をマウント解除（実行を停止）するには、**【表示】->【マウントされた VM】** ビューに移動します。

11.4 作成された「バックアップから VM を実行」アクティビティの管理

既存のバックアップから VM を実行アクティビティを編集することはできません。実行できるのは、**【表示】->【マウントされた VM】** ページからマウントされた VM をアンマウントすることだけです。

【マウント解除】 に加え、**【マウント解除と保存】** オプションも用意されています。同オプションを使用すると、マウントされている VM がシャットダウンされ、コンピュータが停止する際に、そのコンピュータに対する変更内容の増分バックアップが取得されます。5 分以

内にコンピュータを停止できない場合、そのコンピュータは強制的にシャットダウン（電源オフ）されることに注意してください。

12 P2V 移行

12.1 P2V 移行の実行方法

ハードウェア要件を少なくするため、多くの場合、物理コンピュータから仮想コンピュータへ移行する必要があります。物理から仮想への移行（P2V）を実行するには、Acronis ブータブル メディアから物理コンピュータを起動し、完全バックアップを作成してから、そのバックアップを仮想コンピュータに復元する必要があります。

P2V 移行を実行するには、次の手順を実行します。

1. Acronis ブータブル メディアを作成します。アクロニスのウェブ サイトでマイ アカウ
ントの [登録済み製品とダウンロード] セクションから、Acronis Backup for VMware の
Acronis メディア ビルダをダウンロードします。Acronis メディア ビルダをインストール
します。
2. 仮想コンピュータへ移行する必要がある物理コンピュータを、Acronis ブータブル メデ
ィアから起動します。
3. 物理コンピュータの完全バックアップを作成します。
4. Acronis Backup for VMware ウェブ コンソールを実行して Acronis エージェントに接続し、
[アクション] タブで [復元] をクリックします。
5. 作成したバックアップを選択し、バックアップの復元先にする対象 ESX(i) ホストを選択
します。

P2V は Windows コンピュータのみ（Windows 2000 SP4 以上のバージョン）でサポートされ
ています。

13 ESXi ホストのベア メタル リカバリ

ESXi ホストの Acronis Backup for VMware ベア メタル リカバリ (BMR) 機能は非常にユニークな機能を備えており、ESXi サーバーが異常終了して、起動できなくなったり、パッチのアップデート後に正しく動作しなくなったりした場合の復元時間を最小化することができます。同機能を使用すれば、ESXi サーバーが復元および起動された後に、ESXi サーバーのバイナリおよびパッチ、ESXi 構成、失われた VM (VM がバックアップに存在するが、データストアでは失われている場合。各 VM を個別にバックアップする必要があります) を復元できます。

ベア メタル リカバリがサポートしているのは VMware ESXi バージョン 4.1、5.0、5.1、および 5.5 のみであり、ESX はサポートしていません。

以降のセクションでは、ESXi ホスト構成のバックアップおよび復元を設定する方法について説明します。

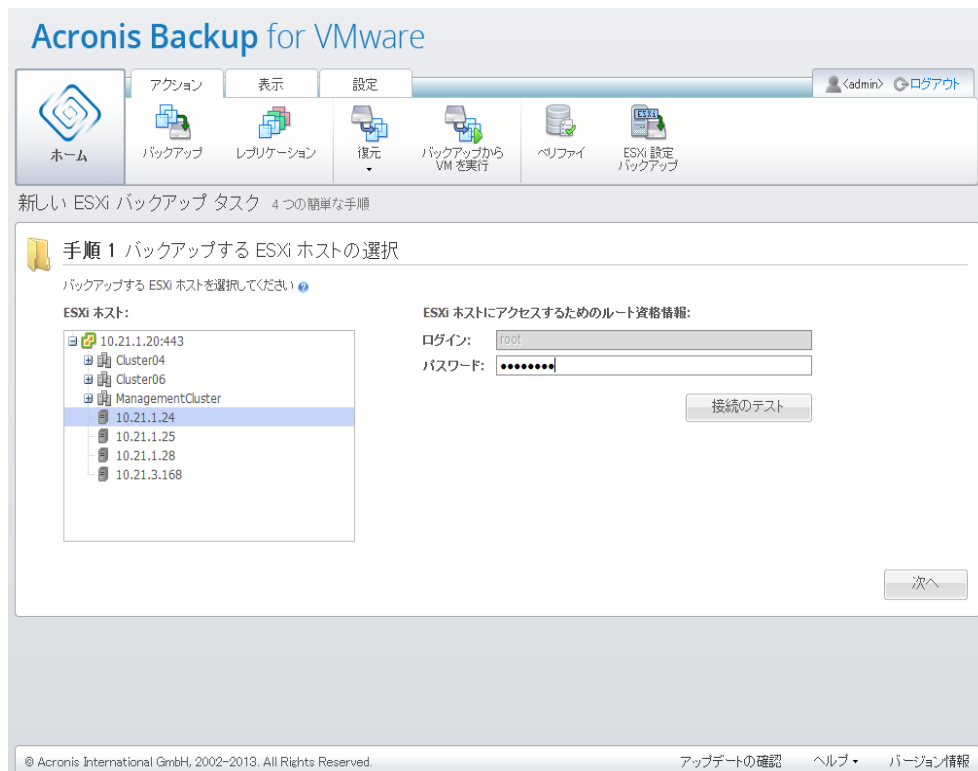
13.1 ESXi ホスト構成のバックアップ

Acronis Backup for VMware における ESXi ホスト構成のバックアップは、仮想コンピュータのバックアップとは異なります。

ESXi ホスト構成バックアップでは、ESXi ホストの SSH アクセスが強制的に有効化されます。つまり、ESXi 構成バックアップをできるようにするため、構成が自動的に調整されます。

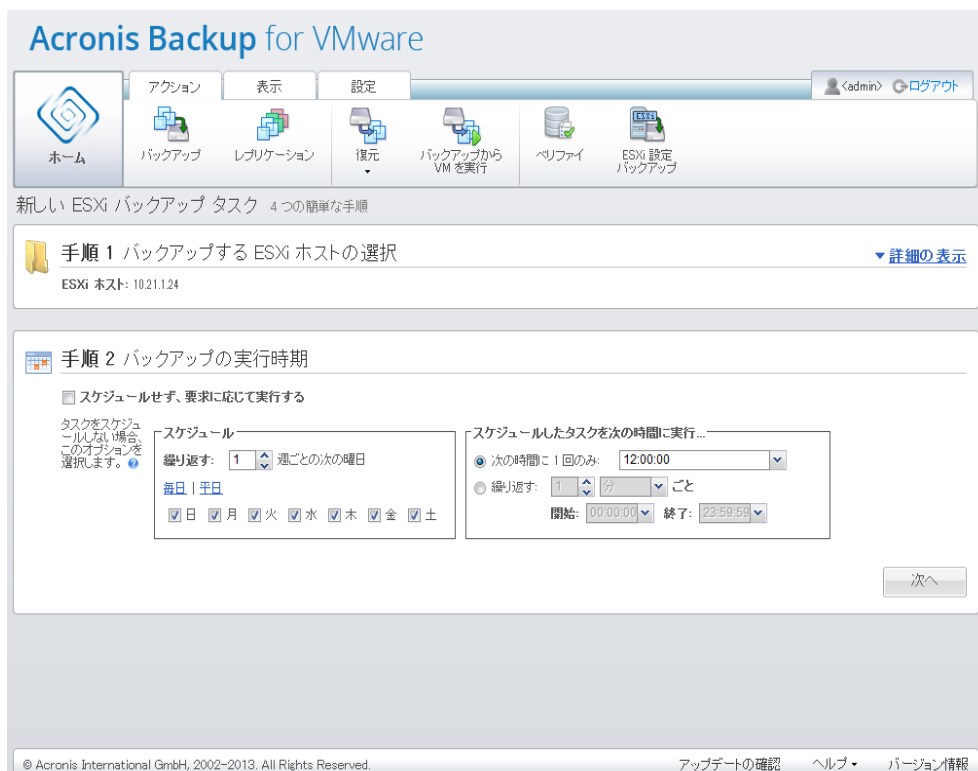
ESXi ホスト構成をバックアップするには、[アクション] -> [ESXi 設定のバックアップ] をクリックして、新しい ESXi バックアップ タスク ウィザードを実行します。新しい ESXi バックアップ タスク ウィザードの最初の手順 ([バックアップする ESXi ホストの選択]) で、構成をバックアップする ESXi ホストを選択します。Acronis Backup for VMware エージェントによって管理されるすべての ESXi ホスト/vCenter のリストから、ESXi ホストを選択します。[ESXi ホスト] リスト内に、探しているホストが表示されていない場合、そのホストが [設定] -> [ESXi(i) ホスト] ページに追加されているかどうかを確認してください。ESXi バックアップがサポートしているのは、ESXi サーバーのみなので注意してください。ESX サーバーをバックアップ対象として選択することはできません。

ESXi ホストを選択した後、ルート資格情報 (ログイン/パスワード) を入力してアクセスします。ESXi バイナリおよびパッチのバックアップを作成するには、SSH を介して ESXi サーバーへ接続します。つまり、ルート資格情報が必要です。指定した資格情報が有効であることを確認するには、[接続のテスト] をクリックします。[次へ] をクリックします。



新しい ESXi バックアップ タスク、バックアップする ESXi ホストの選択

2 番目の手順 ([バックアップの実行時期]) では、バックアップをスケジューリングすることができます。BMR バックアップ タスク スケジューラのオプションは、VM バックアップ ウィザードのオプションと同じです。



新しい ESXi バックアップ タスク、バックアップの実行時期

3 番目の手順 (バックアップ先) で、ESXi 構成バックアップ アーカイブを保存するロケーションおよびアーカイブ名を選択します。**[参照]** をクリックしてポップアップを開き、次のいずれかのロケーションを選択してから、**[OK]** をクリックします。

- ローカル フォルダ
- ネットワーク フォルダ
- FTP サーバー
- SFTP サーバー

ESXi バックアップは複数ファイルのバックアップ スキーム (レガシー モード アーカイブ) 『10ページ』でのみ作成されます。**[1 つのファイルにすべてのバックアップを保存 (推奨)]** オプションは無効です。

クリーンアップ ルールを設定する場合は、**[古いバックアップを自動的に削除]** チェック ボックスをオンにします。これらの設定の詳細は、「バックアップ先」セクション 『41ページ』で説明されています。

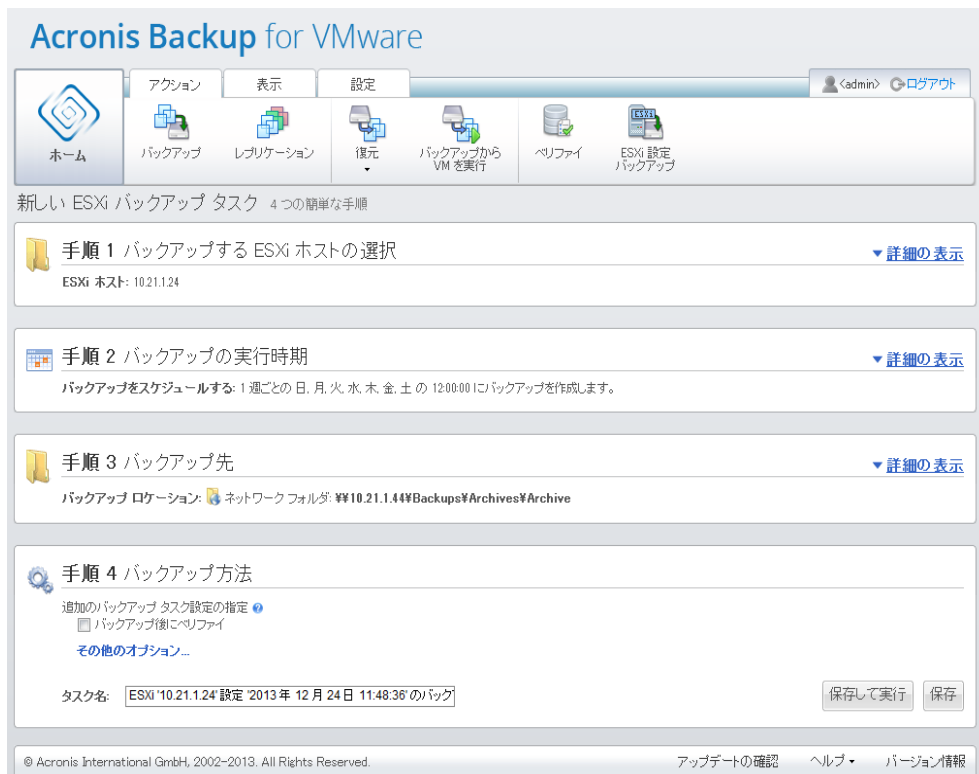
[バックアップを 2 番目のロケーションにコピー] チェック ボックスをオンにします。以下の設定により、バックアップ コピー オプションを構成できます。バックアップを保存する 2 番目のロケーションと**アーカイブ名**を選択します。**[参照]** をクリックし、使用可能なロケーションのリストから選択します。

[コピーの実行時期] ドロップダウン リストから、各バックアップが作成された直後に 2 番目のロケーションにバックアップをコピーするかどうかを選択します。または、バックアップ スケジュール日以外の、バックアップのコピーを実行する具体的な日を指定できます。この場合は、**[失われた復元ポイントをすべてコピーする]** または **[最後に作成された復元ポイントのみをコピーする]** も選択できます。

[最後に作成された復元ポイントのみをコピーする] オプションは、選択した最初のロケーションにアクセスできない場合があるときに役立ちます。**[失われた復元ポイントをすべてコピーする]** オプションを選択し、メイン ロケーションで最初のストレージの保持ルールが実行された場合、これらの復元ポイントが 2 番目のロケーションにコピーされていない場合でも、これらのルールにより、削除する必要がある復元ポイントは削除されます。このため、保持ルールが実行されるとき、復元ポイントが既に 2 番目のストレージにコピーされているかどうかは確認されません。

デフォルトでは、コピーされたバックアップのバックアップの種類とクリーンアップ ルールは、対応するプライマリ バックアップ設定と同じです。一方、たとえば、クリーンアップ ルールのオプションを変更するなど、別の設定を指定できます。

最後の手順 (**[バックアップ方法]**) では、必要に応じて、**[バックアップ後にベリファイ]** チェック ボックスをオンにします。その他の設定が表示されるポップアップ ウィンドウを開くには、**[その他のオプション...]** をクリックします。表示されるオプションについては、「バックアップ オプション 『48ページ』」セクションをご参照ください。オプション **[アーカイブの保護]**、**[その他の設定]** -> **[重複除外]**、**[その他の設定]** -> **[CBT バックアップ]** は使用できません。



新しい ESXi バックアップ タスク、バックアップ方法

新しい **ESXi バックアップ タスク** ウィザードを完了するには、タスクに名前を付ける必要があります。記号 [], { }, ; , . はタスク名には使用できません。デフォルトのタスク名は「ESXi 'ホスト名' の設定 日時のバックアップ」です。

[保存] ボタンをクリックすると、新しい **ESXi バックアップ タスク** のすべてのパラメータが保存され、**[タスク]** ビューに作成したタスクが表示されます。**[保存して実行]** ボタンをクリックすると、タスクは保存されると同時に実行されます。

13.2 ESXi ホスト構成の復元

ESXi ホスト構成の復元（BMR 復元）を使用すれば、ESXi サーバーが異常終了して、起動できなくなった場合などに、即時にその ESXi サーバーを復元できます。 **ESXi ホストの復元** ウィザードでは、過去に作成したバックアップに保存されている ESXi ホストの過去の構成の復元を設定できます。このウィザードでは、ローカル データストア（ローカル ディスクで作成されたデータストア）を確認および再設定し、過去に物理 NIC にマッピングされた vSwitch を再マッピングすることができます。さらに、ESXi ホストが復元され、起動された後に、失われた VM の復元に使用されるバックアップのロケーションを定義できます。

ESXi ホストの復元 ウィザードは Acronis ブータブル メディア インターフェイスからのみ使用できます。このメディアは、Acronis ブータブル メディア ビルダによって作成されます。ブータブル メディア ビルダは独立したインストール パッケージです。この機能を Acronis Backup for VMware エージェントのウェブ インターフェイスから実行することはできません。

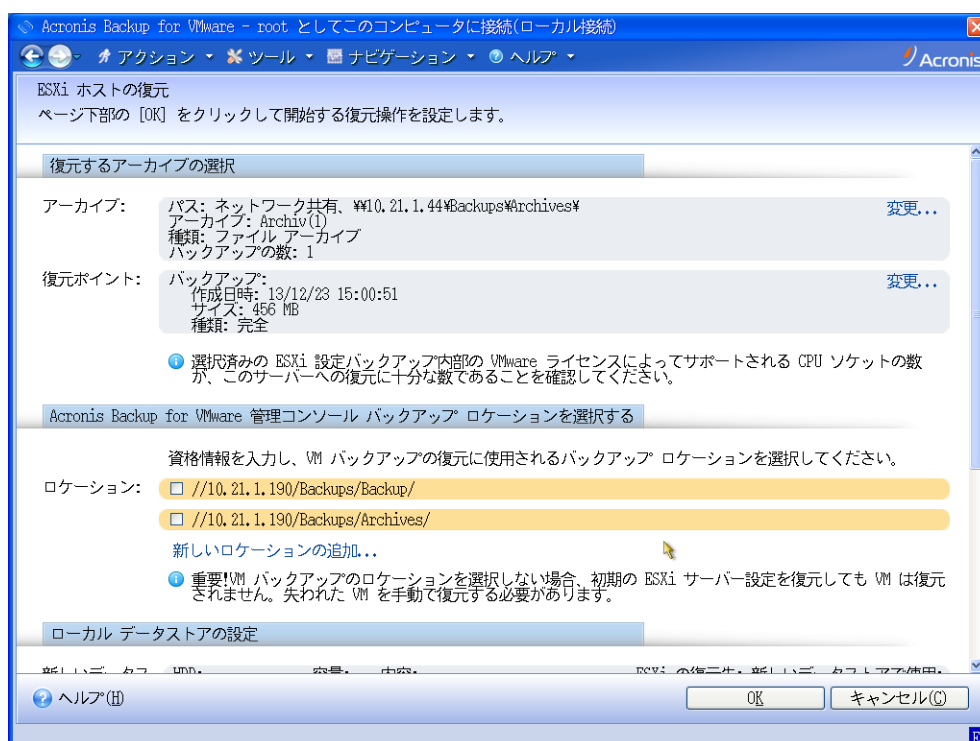
最初の手順では、**アーカイブ**と、復元される**復元ポイント**を選択します。ポップアップを開き、ESXi ホストの構成バックアップ アーカイブが保存されるロケーションを選択します。次に、**ESXi ホスト バックアップ**が格納されている**アーカイブ**を選択します。アーカイブ

を選択すると、最新の復元ポイントがデフォルトで選択されています。ただし、このデフォルトの選択は変更できます。

2 番目の手順は、**[Backup for VMware バックアップ ロケーションを選択する]** です。バックアップ ロケーションのチェックボックスをオンにして、ポップアップ ウィンドウに資格情報を入力します。各ロケーションが一覧表示されます。選択したロケーションが灰色で表示され、選択しなかったロケーションは黄色で表示されます。

ESXi ホスト構成のバックアップ アーカイブの内容に基づいて、各ロケーションが一覧表示されます。同アーカイブには VM バックアップ ロケーションに関する情報が保存されています (**[最近使用したロケーション]** パス)。この手順では、新しいロケーションを追加することができます。これらのすべてのロケーションは、ESXi ホストが起動および実行された後に、VM バックアップを復元するために使用されます。さらに、ロケーションをパスワードで保護することが可能です。保護すると、ESX サーバーが復元されて Acronis Backup for VMware が失われた VM の復元を開始した後にデータをアクセスする場合に、資格情報が必要になります。この手順で選択できるのは、次のロケーションだけです。

- ネットワーク フォルダ
- FTP サーバー
- SFTP サーバー



ESXi ホスト構成の復元

この手順で VM のバックアップ先を選択しないと、初期の ESXi サーバー構成の復元後に VM が自動的に復元されないので注意してください。その場合、失われた VM を手動で復元する必要があります。

さらに、元の ESXi ホストがアクティブで、vCenter によって管理されている時に、ESXi ホスト構成を新しいコンピュータで復元すると、予想できない問題が発生する可能性があることにも注意してください。ESXi ホスト構成を新しいコンピュータを復元する前に、元の

ESXi ホストから vCenter を削除して、復元を実行した後にそのホストを再度追加してください。

3 番目の手順は、**[ローカル データストアの設定]** です。元の ESXi サーバーで障害が発生したり、システム ハードディスク ドライブやデータストアが失われたりすることがあり得るので、復元先の構成が、元のサーバーとは異なる場合があります。

リストには、検出された HDD とその容量が表示されます。そのリストには、検出された HDD にすでに存在するデータストアも表示されています。HDD 上のデータストアが、(ESXi 構成バックアップ内に保存されている) 元の構成内のデータストアと一致している場合、そのデータストアの名前は緑色で表示されます。データストアが検出されても、元の構成と一致していない場合、そのデータストアの名前は黄色で表示されます。検出されたデータ ストアが、新しいデータ ストアの作成用にクリーンアップされるデータ ストアの場合、そのデータストアの名前は赤色で表示されます。新しいデータストアを作成するために HDD を使用する場合、**[新しいデータストアで使用:]** チェックボックスをオンにします。

この手順で選択したすべてのディスクに新しいデータストアが作成され、それらのディスク上の既存のデータはすべて上書きされます。そのため、ディスクの選択は慎重に行ってください。

ESXi システム パーティションは **[ESXi の復元先:]** 列でオンにしたディスクに作成されます。検出されたローカル ドライブまたはフラッシュ ドライブをここで選択できます。

4 番目の手順は、**[仮想ネットワークの設定]** です。この手順では、復元する ESXi 構成バックアップ内に存在している vSwitch を、物理 NIC にマッピングする必要があります。ESXi 構成バックアップは、同じサーバーにも異なるハードウェアにも復元することができます。この手順では次のことが可能です。

- デフォルトで、自動マッピングが有効になっています。現在のハードウェア内の NIC がスキャンされ、それらの NIC が、ESXi 構成バックアップ内に存在する vSwitch と自動的に対応付けられます。vSwitch の自動マッピングを確認して、必要に応じて再マッピングすることができます。
- ESXi 復元処理中に、ケーブルが vmnicX に接続されているかどうかを確認することができます。

すべての手順が完了したら、**[OK]** をクリックして復元を開始します。復元を続行した後の処理を次に示します。

1. (BIOS 順で) 最初の HDD が ESXi システム パーティションの作成に使用され、システムが ESXi 環境で再起動されます。
 2. 起動すると同時に ESXi によって専用のスクリプトが実行され、ESXi 構成の復元ウィザードで指定した設定に基づいて vSwitch およびデータストアが構成されます。
 3. Acronis Backup for VMware エージェント (仮想アプライアンス) が、新しく作成されたデータストアに配置されます。すると、ESXi 構成の復元ウィザードで指定したバックアップ先から、失われた仮想コンピュータの復元が実行されます。また、それらのバックアップ先で、ESXi 構成バックアップ後にバックアップされたソース ESXi ホストの仮想コンピュータがスキャンされ、それらの仮想コンピュータも復元されます。
- 仮想コンピュータが、復元した ESXi ホストによって現在認識されているどのデータストアからも検出されない場合、その仮想コンピュータは「失われた」と見なされます。

- 仮想コンピュータは、検出されたすべてのデータストアに復元されます。それらのデータストアを最低 **10%** の空き領域を残しながら順番に占有していきます。

14 タスクの管理

メイン メニューの **[表示]** タブで **[タスク]** をクリックすると、**[タスク]** ページ (**[表示]** → **[タスク]**) が開きます。ここではタスクの詳細が表示され、タスクに対する操作を実行できます。**[タスク]** ページで実行できるのは既存のタスクに対する基本的な操作だけであり、新しいタスクを作成することはできません (新しいバックアップ/復元/ベリファイなどのタスクを作成するには、メイン ツール バーの **[ホーム]** タブに移動する必要があります)。

このページには、Acronis Backup for VMware エージェントで作成されたすべてのタスクの一般的なリストが表示されます。タスク リストには、メイン ツール バーの **[ホーム]** タブにある各セクションで作成された **[バックアップ]**、**[復元]**、**[ベリファイ]** などの操作が表示されます。

タスク リストには、タスクについて次の情報が表示されます。

- **[タスク名]**: 一意のタスク ID
- **[タスクの種類]**: **[バックアップ]**、**[復元]**、**[ベリファイ]** など
- **[前回の完了時刻]**: そのタスクが最後に完了してから経過した時間
- **次の実行**: タスクが実行される時刻または **[手動]**
- **[ステータス]**: **[アイドル]** または **[進行中]**

停止中のタスクは **[アイドル]** として表示されます。タスクが実行中の場合、**[ステータス]** フィールドに現在のアクティビティの進行状況が割合で示されます (例: 35%)。

さらに、既に実行された全タスクの最終結果のステータスが、**正常終了** (最後の実行が成功した場合)、**警告** (最後の実行でタスクが警告と共に終了した場合) または **エラー** (最後にタスクがエラーで終了した場合) として示されます。最終結果のステータスをクリックするとタスク ログを表示できます。実行されなかったタスクは、この状態にはならず **[前回の完了時刻]** フィールドも空になります。

右上隅にあるドロップダウン リストから並べ替え条件を選択して、タスクをソートできます。タスクは、作成時間、前回の完了時刻、前回の結果、名前、次の開始時刻、ステータスおよびタスクの種類により、昇順または降順でソートできます。

[タスクの管理] ページでは、対応するボタンを使用して、一覧にあるタスクの **[実行]**、**[キャンセル]**、**[編集]** または **[削除]** ができます (以下のサブセクションを参照してください)。

[概要] タブおよび **[ソースとターゲット]** タブを表示して、一覧にあるどのタスクについても詳細を確認できます (「タスクの詳細の表示」セクション 『95ページ』を参照してください)。

14.1 タスクの実行

[実行] ボタンをクリックすると、選択したアイドル状態のタスクを実行できます。実行すると、タスクのステータスは **[アイドル]** から **[実行]** に変化し、進行状況バーとタスクの完了に対する現在の進捗状況が表示されます。

この状態で実行できるのは、タスク ログの表示（「タスク ログの表示」セクション 『94 ページ』を参照）と、アクティブな実行中タスクの **[キャンセル]**（「タスクのキャンセル」セクション 『94 ページ』を参照）だけです。他のコントロール ボタン（**[実行]**、**[編集]**、および **[削除]**）は無効になります。アクティブなタスクを編集または削除するには、まず、そのタスクを停止する必要があります。

14.2 タスクのキャンセル

[キャンセル] ボタンをクリックすると、選択したアクティブ状態のタスクをキャンセルできます。操作の承認を求めるメッセージが表示され、承認すると同時に進行中のタスクが停止し、アイドル状態になります。

アイドル状態のタスクに対して **[キャンセル]** ボタンは無効になります。キャンセルできるのは実行中のタスクだけです。

14.3 タスクの編集

[編集] ボタンをクリックすると、選択したタスクを編集できます。タスクの種類に応じて、**[アクション]** タブの対応するセクション（バックアップ、復元、ベリファイなど）に移動します。タスクの作成中に完了した、バックアップ/復元/ベリファイなどのウィザードのすべてのセクションが表示されます。ウィザードのすべての手順が同時に画面に表示されるため、現在のタスク設定を確認し、それらの設定を変更できます（詳細については、「仮想コンピュータのバックアップの作成」 『39 ページ』、「仮想コンピュータのバックアップの復元」 『63 ページ』、「バックアップのベリファイ」 『104 ページ』などのセクションをご参照ください）。

14.4 タスクの削除

[削除] ボタンをクリックすると、選択したタスクを削除できます。操作の承認を求めるメッセージが表示され、承認すると同時に、そのタスクが消去されます。

14.5 タスク ログの表示

最終結果のステータスをクリックすると、選択したタスク ログを表示できます。**[ログ]** ビュー（**[表示]** -> **[ログの表示]**）のセクションに移動し、現在のタスクのログをすべて確認できます（「ログの管理」 『107 ページ』 セクションをご参照ください）。

14.6 タスクの詳細の表示

タスク リストでタスクを選択すると、**[概要]** および **[ソースとターゲット]** タブにそのタスクの詳細が表示されます。タブに表示される情報は、タスクの種類（バックアップ、復元、ベリファイなど）によって異なります。以降のセクションでは、バックアップ タスク用タブの内容について説明します。

[概要] タブには、現在選択されているタスクの概要が詳しく表示されます。次に、バックアップ タスクの **[概要]** セクションに表示される内容の例を示します。

[開始時刻]: 2013/12/13 16:12

[残り時間]: 37 分

[前回の完了時刻]: 利用不可

[前回の結果]: 未実行

[送信済みのバイト数]: 473.875 MB

[バックアップ]: Windows Server 2012

[速度]: 3.337 MB/秒

[スケジュール]: 手動

右側の **[オプション]** セクションには、現在選択されているタスクの設定が表示されます。このセクションには、デフォルトの値とは異なるオプションだけが表示されます。すべてのタスク オプションがデフォルトの場合、このセクションには特定の値が何も表示されず「**オプション: デフォルト**」とだけ示されます。次に例を示します。

[アーカイブの保護]: オン

[アーカイブの暗号化アルゴリズム]: AES 128

[試行の回数]: 10

[試行間隔]: 1 秒

[重複除外]: オフ

[CBT バックアップ]: オフ

[FTP をアクティブ モードで使用する]: オン

[バックアップ後にベリファイ]: オン

左側にある **[ソース]** セクションの **[ソースとターゲット]** タブには、バックアップ タスクに含める ESX(i) ホストと vApp/VM のツリーが表示されます。ツリーは動的に作成され、ESX(i) ホスト全体をバックアップ対象として選択すると、このツリーは VMware IC の場合と同じコンピュータ（同じリスト）の現在の状態に合わせて表示されます。ESX(i) ホストの右側には、グループ全体がバックアップされることを示すマーク（[すべての仮想コンピュータ] マーク）が表示されます。次に例を示します。

リソース プール 1

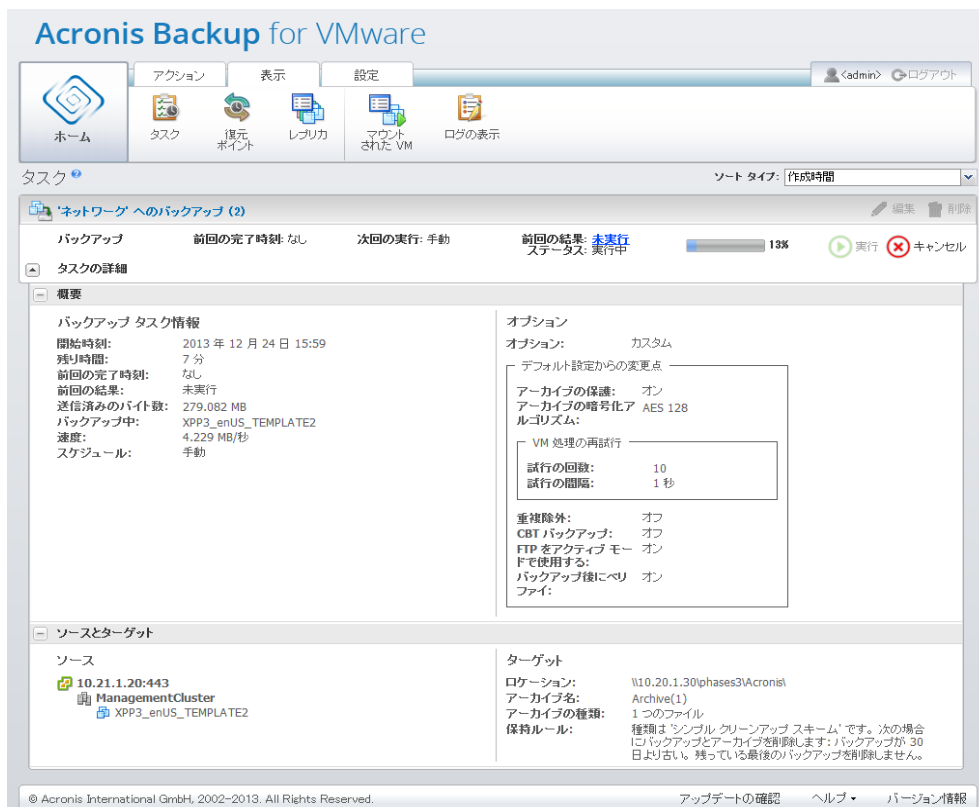
Windows Server 2012

右側の **[ターゲット]** セクションには、バックアップされたアーカイブのロケーションに関する情報が表示されます。次に例を示します。

[ロケーション]: \\172.20.48.29\Backups\Archives\

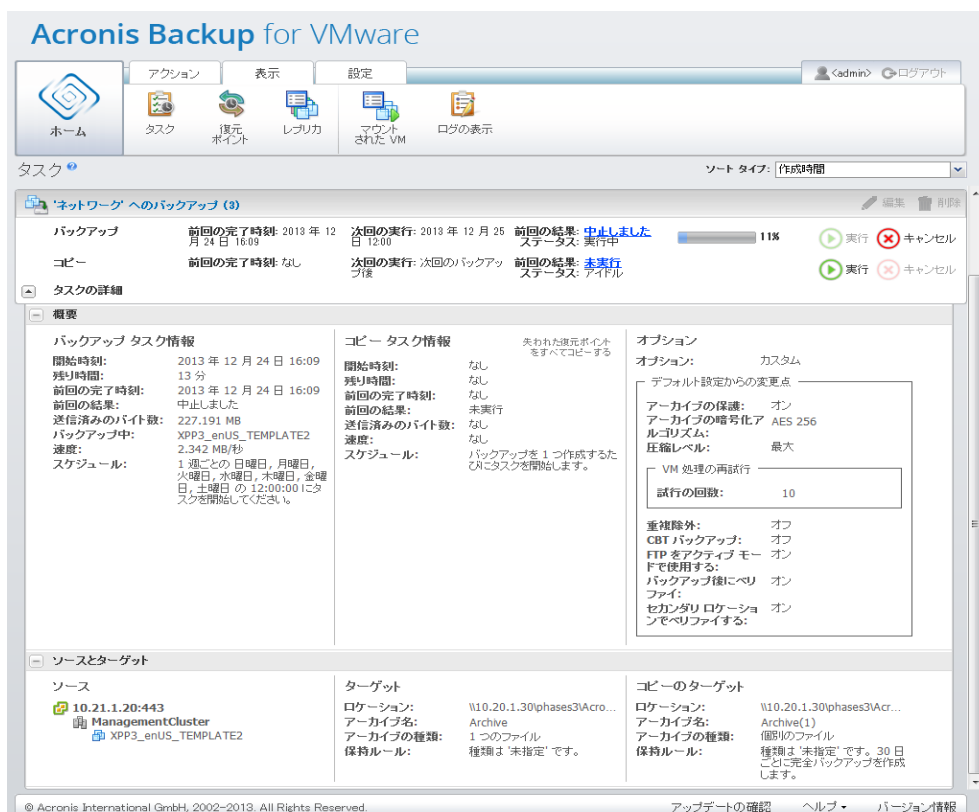
[アーカイブ]: Archive(4)

[保持ルール]: 種類は 'シンプル クリーンアップ スキーム' です。次の場合にバックアップとアーカイブを削除します: バックアップが 30 日より古い。残っている最後のバックアップは削除しません。



タスクの管理、タスクの詳細の表示、[概要] タブ、[ソースとターゲット] タブ

バックアップ タスクが、[バックアップを 2 番目のロケーションにコピー] するように構成されている場合、タスクの詳細の [概要] タブは、下記のように、[バックアップ タスク情報] と [コピー タスク情報] の両方で構成されます。



タスクの管理、タスクの詳細の表示、バックアップ タスク情報およびコピー タスク情報

15 復元ポイントの管理

メイン メニューの **[表示]** タブで **[復元ポイント]** ボタンをクリックすると、**[復元ポイント]** ページが開きます。

Acronis Backup for VMware の **[復元ポイント]** ビューには、環境内の仮想コンピュータで使用可能な復元ポイント（各仮想コンピュータの元に戻すことが可能な時点）を管理するインターフェイスが表示されます。各バックアップ タスクが正常に実行されると、新しい復元ポイントが作成されて復元ポイント リストが自動的に更新されます。

復元ポイントを選択すると、その復元ポイントを使用して基本的な操作を実行できるようになります。選択した復元ポイントに対する操作を実行するには、メイン ツール バーの対応するボタンをクリックします。以下に説明するすべての操作はウィザードに対応しており、目的のタスクを簡単に実行することができます。

[復元ポイント] ビューは、3 つのメイン セクションで構成されています。

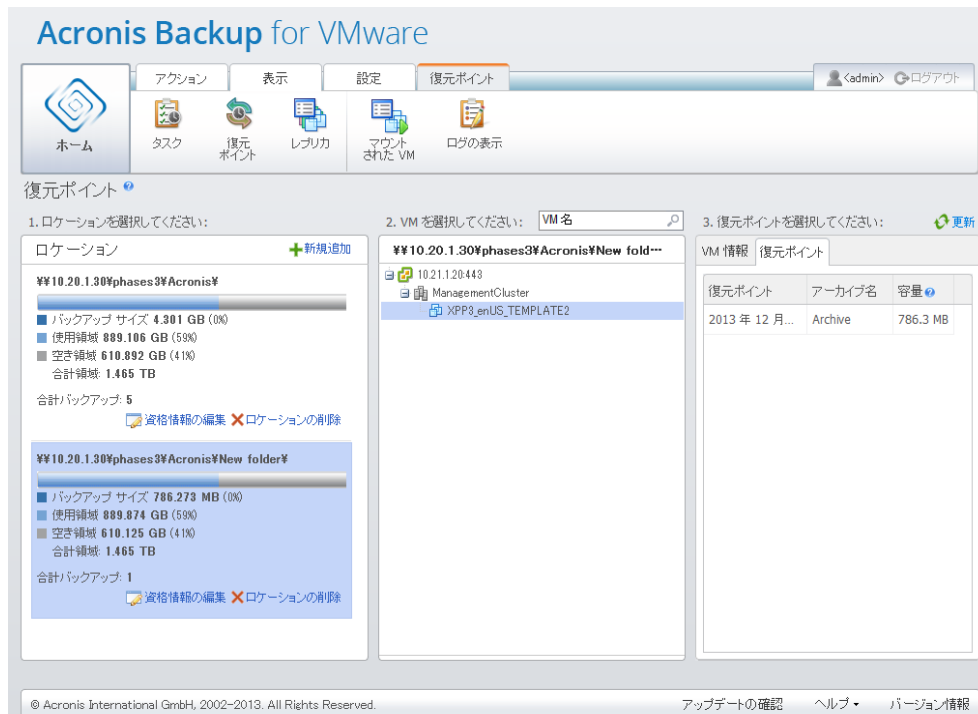
- バックアップの保存先
- 仮想コンピュータのカタログ
- 復元ポイント リスト

このページにおける主なナビゲーションの目的は、まずバックアップの保存先を（左側のセクションで）定義し、アーカイブとその内容をスキャンできるようにすることです。スキャンすると、選択した保存先に格納された全アーカイブに含まれる仮想コンピュータが、（中央のセクションの）ツリー リストに表示されます。この中央のセクションで仮想コンピュータをクリックすると、そのコンピュータで使用可能な復元ポイントおよび概要のリストを確認できます。このリストは、右側のセクションにあります。

左側の **[ロケーション]** リストには、登録されたバックアップの保存先（バックアップ先または復元元として使用したことがあるすべてのロケーション）が表示されます。**[ロケーション]** リストには次の要素が表示されます（それぞれのロケーションは別々のブロック内に表示されます）。

- **[ロケーションのパス]**: (例) \\NAS1\Backups\Acronis\Recent\
- **[ロケーションの統計情報]**:
 - **[バックアップ サイズ]**: (例) 3.242 GB (22%)
 - **[使用領域]**: (例) 5.242 GB (36%)
 - **[空き領域]**: (例) 9.412 GB (64%)
 - **[合計領域] (使用領域 + 空き領域)**: (例) 14.654 GB
- **[合計バックアップ]**: そのロケーションに含まれる復元ポイントの総数
- **[資格情報の編集]** ボタン: そのロケーションへのアクセス資格情報を変更可能 (ある場合)
- **[ロケーションの削除]** ボタン: 登録済みのロケーション リストからロケーションを削除

追加されるロケーションがない場合、このウィジェットでは、空のフィールドに「登録されたバックアップのロケーションはありません」という文字列が表示されます。他の 2 つのセクションには何も表示されません。



復元ポイントの管理、使用可能なロケーションがない場合

15.1 バックアップの保存先の追加

必要に応じて、**[ロケーション]** リストでバックアップの保存先を追加または削除することができます。上部の **[新規追加]** リンクをクリックすると、**[ロケーションの追加]** ポップアップが開きます。

削除操作では、そのロケーションからアーカイブが物理的に削除されるのではなく、Acronis Backup for VMware 構成からそのロケーションが削除されるだけです。すべてのバックアップはそのロケーションにそのまま残されるため、**[新規追加]** リンクを使用してそのロケーションを再び追加すると、それらのバックアップを表示できます。今後使用することがなく、表示する必要がなくなった不要なバックアップの保存先が存在する場合に、ロケーションを削除および追加する必要が生じる可能性があります。

[ロケーションの追加] ポップアップの左側には、次のリストが表示されます。

- Cloud Backup Storage
- ローカル フォルダ
- ネットワーク フォルダ
- FTP サーバー
- SFTP サーバー

目的のロケーションを選択するには、適切なフォルダ グループを拡張してフォルダ ツリーでそのロケーションを選択するか、**[ロケーション]** フィールドにそのロケーションのフルパスを入力します。

左側の参照ツリーからバックアップの保存先の種類を選択します。 選択したロケーション（Cloud Backup Storage、ネットワーク フォルダ、または FTP/SFTP サーバー）で認証が要求される場合は、右側のペインに資格情報を指定するダイアログが最初に表示されます。ログインが成功すると、このペインに選択した保存先の内容、つまり、そのロケーション内のアーカイブが表示されます。

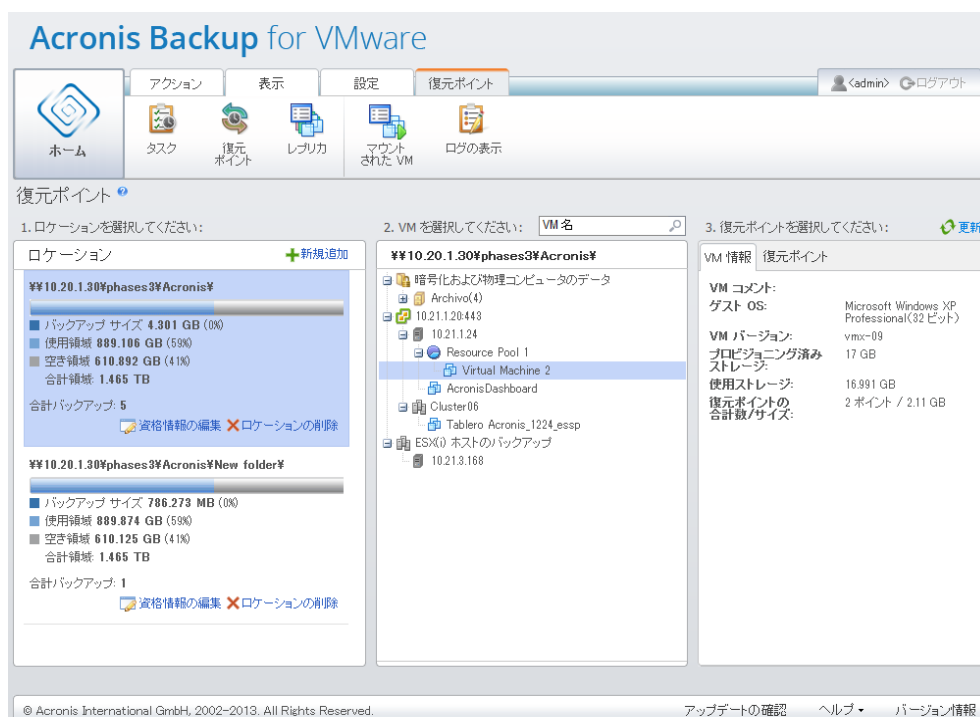
ツリーでロケーションを参照する代わりに、下部の対応する **【ロケーション】** フィールドにパスを入力し、**[参照]** ボタンをクリックしてそのロケーションを探す方法もあります。 この場合は、右側のペインに同じ認証ダイアログが表示され、ログインおよびパスワードを入力するように求められます。

ウィザードを完了するには、**【ロケーション】** フィールドでパスを選択または指定してから **[OK]** をクリックします。 有効なロケーションが選択されるまで、**[OK]** ボタンはグレー表示されます。

15.2 仮想コンピュータのカタログ

[復元ポイント] ビューの中央のセクションには、仮想コンピュータのカタログが表示されます。仮想コンピュータおよび vApp のツリー リストは、左側のセクションで選択したロケーションで見つかった各アーカイブの解析に基づいて作成されます。

選択したロケーションに、パスワードで保護されたアーカイブ、または物理コンピュータのアーカイブが含まれている場合、**[暗号化および物理コンピュータのデータ]** のリストに表示されます。このアーカイブのコンテンツを表示するには、**[パスワード]** ポップアップにパスワードを指定する必要があります。



復元ポイントの管理

このリストで選択できる仮想コンピュータは、一度に 1 台だけです。選択した仮想コンピュータの詳細ウィンドウ（右側のセクション）には、以降で説明するとおり **復元ポイントの一覧** および **復元ポイントの詳細** の 2 種類のタブが表示されます。

15.3 復元ポイントのリスト

[詳細] セクションの **[復元ポイント]** リストには、使用可能なすべての復元ポイントが一覧表示されます。このリストには次の列が含まれています。

- **[復元ポイント]**: この列には、リストに含まれる各復元ポイントが作成された日時の値が表示されます。
- **[アーカイブ名]**: 対象の復元ポイントが属している（選択したバックアップの保存先に含まれる）ファイル名が表示されます。
- **[サイズ]**: 対象の復元ポイントが属しているアーカイブの物理的なサイズ（MB/GB 単位）が表示されます。

[復元ポイント] リストから **[概要]** ビューへ切り替えることができます（「[概要] タブ 『101 ページ 』」セクションを参照）。

リストで特定の復元ポイントを選択すると、「選択したアイテムの操作 『101 ページ 』」セクションで説明するいずれかの操作を実行できるようになります。

15.4 [概要] タブ

選択した復元ポイントの概要を表示するには、**[概要]** タブに切り替えます。このタブに表示される情報は次のとおりです。

- **[VM コメント]**（選択した VM に対する VMware vSphere クライアントの **[概要]** タブから取得）
- **[ゲスト OS]**（選択した VM に対する VMware vSphere クライアントの **[概要]** タブから取得）
- **[VM バージョン]**（選択した VM に対する VMware vSphere クライアントの **[概要]** タブから取得）
- **[プロビジョニング済みストレージ]**（選択した VM に対する VMware vSphere クライアントの **[概要]** タブから取得）
- **[使用ストレージ]**（選択した VM に対する VMware vSphere クライアントの **[概要]** タブから取得）
- **[復元ポイントの合計数/サイズ]**:（例）23 ポイント/120 GB

15.5 選択したアイテムの操作

[復元ポイント] ビューのリボン メニューには次の操作ボタンが用意されています。これらを使用して、選択した復元ポイントに対する基本的な操作を実行できます。

- **[復元]**

- **Exchange の復元**
- **[バックアップから VM を実行]**
- **[ファイルの復元]** (ゲスト ファイルのダウンロード)
- **[ベリファイ]**
- **[削除]**

これらの操作は、リスト（「復元ポイントのリスト 『101ページ』」で説明した、選択した仮想コンピュータの [詳細] セクション）で特定の復元ポイントを選択すると実行できます。

15.5.1 復元

復元タスク ウィザードを実行して選択した復元ポイントから復元を実行するには、リボンメニューで **[復元]** ボタンをクリックします。ウィザードには、選択した復元ポイントの設定が事前に入力されています（「仮想コンピュータのバックアップの復元 『63ページ』」セクションを参照）。

15.5.2 Exchange の復元

Exchange Server アイテムの展開 ウィザードを実行して選択した復元ポイントから Exchange データを展開するには、リボンメニューで **[Exchange の復元]** ボタンをクリックします。ウィザードには、選択した復元ポイントの設定が事前に入力されています（「Exchange Server バックアップの展開 『73ページ』」セクションを参照）。

15.5.3 バックアップから VM を実行

バックアップから VM を実行ウィザードを起動して VM のマウント操作を実行するには、リボンメニューで **[バックアップから VM を実行]** ボタンをクリックします。ウィザードには、選択した復元ポイントの設定が事前に入力されています（「バックアップから VM を実行 『80ページ』」セクションを参照）。

15.5.4 ファイルの復元

ファイルの復元ウィザードを実行してゲスト ファイルのダウンロード操作を実行するには、リボンメニューで **[ファイルの復元]** ボタンをクリックします。ウィザードには、選択した復元ポイントの設定が事前に入力されています（「ファイルの復元 『70ページ』」セクションを参照）。

15.5.5 ベリファイ

新しいベリファイ タスクを実行してバックアップのベリファイを実行するには、リボンメニューで **[ベリファイ]** ボタンをクリックします。ベリファイ ウィザードには、選択した復

元ポイントの設定が事前に入力されています（「バックアップのベリファイ 『104ページ』」セクションを参照）。

15.5.6 削除

選択した復元ポイントを削除するには、リボン メニューで **[削除]** ボタンをクリックします。**[復元ポイントの削除]** ポップアップが表示され、削除対象として選択した復元ポイントのリストを確認できます。

レガシーモードのアーカイブ 『10ページ』 では、一部の復元ポイントに依存関係がある場合があります。これは、復元ポイントを 1 つだけ削除することはできないということです。このような場合は、選択した復元ポイントと依存関係がある復元ポイントのチェーン全体が削除対象として指定されます。**Always Incremental** アーカイブ 『11ページ』 に属している復元ポイントは、何の制限もなく削除できます（この場合、削除リストには復元ポイントが 1 つだけ表示されます）。

ポップアップで **[削除]** ボタンをクリックして処理を確定すると、**[タスク]** ビューに削除タスクが表示されます。このタスクは完了と同時に表示されなくなります。タスクの結果は、**[ダッシュボード]** ビューとログ ファイルに表示できます。

16 その他の操作

16.1 バックアップのベリファイ

バックアップのベリファイは、バックアップからデータ リカバリを実行できるかどうかを確認する処理です。ベリファイの成功は復元が成功する可能性が高いことを示しますが、復元処理に影響するすべての要因を確認するわけではありません。オペレーティング システムをバックアップする場合、新しい仮想コンピュータへの復元テストによってのみ復元の成功が保証されます。

Acronis Backup for VMware でベリファイできるのは、**ロケーション**、**アーカイブ**、または**復元ポイント**です。復元ポイントのベリファイでは、バックアップからダミーの復元先に対してすべてのファイルの復元が疑似的に実行されます。アーカイブのベリファイでは、そのアーカイブに保存されているすべての復元ポイントがベリファイされます。ロケーションのベリファイでは、そのロケーションに保存されているすべてのアーカイブの復元が確認されます。

16.1.1 ベリファイの対象

最初に、どの種類のアイテムをベリファイするか、使用可能な 3 つのオプション（**[ロケーション]**、**[アーカイブ]**、**[復元ポイント]**）の中から選択して定義します。

[ロケーション]: ロケーションをベリファイすると、そのロケーションにある全アーカイブの整合性を確認できます。これは通常、特定アーカイブまたは復元ポイントの高精度の検証と比較して非常に時間のかかる処理です（特に、そのロケーションに複数のアーカイブを格納した場合）。また、ベリファイにかかる時間は選択したロケーションにある各アーカイブ内のバックアップ（復元ポイント）数によって異なります。ロケーションのベリファイでは、パスワードで保護されたアーカイブはベリファイされないことに注意してください。代わりにアーカイブをベリファイするオプションを選択する必要があります。



新しいベリファイ タスク/ベリファイの対象/ロケーション

[アーカイブ]: アーカイブをベリファイすると、特定アーカイブ内のバックアップ（復元ポイント）をすべて確認できます。一般的に、この手順はロケーション全体をベリファイするよ

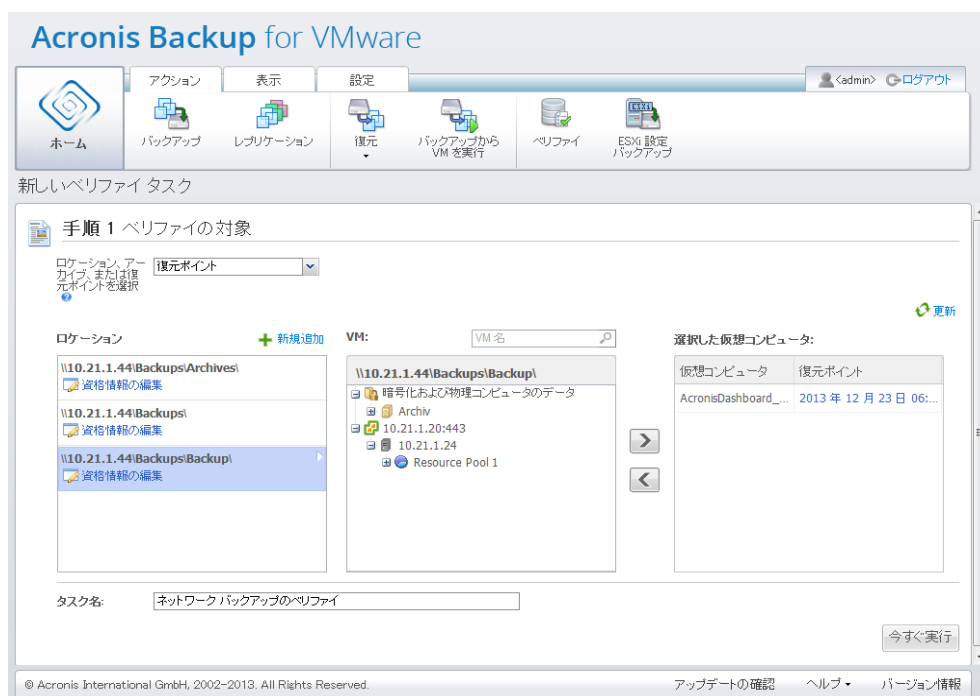
りも速く行われます。ただし、このアーカイブ内の特定の復元ポイントをベリファイするよりも遅くなります。

[復元ポイント]: 特定の復元ポイントへ戻れるように、選択した復元ポイントだけに高精度の検証を実行することができます（復元ポイントは 1 つのアーカイブ内に存在する必要はありません）。

ベリファイの対象アイテムの種類を選択したら、バックアップの保存先を定義します。復元ポイントのリストを取得するには、ロケーション、またはロケーションとアーカイブを指定します。復元ポイントをベリファイすると、選択したアーカイブまたはロケーションで、そこに存在する復元ポイントがスキャンされます。これは、ベリファイする復元ポイントを選択するために必要な手順です。ベリファイ対象として選択したアイテムの種類に応じて、いくつかのコントロールは無効になります（たとえば、復元ポイントのリストはロケーションまたはアーカイブをベリファイしなければ表示されません）。

選択した保存先に格納されたすべてのアーカイブに含まれる仮想コンピュータのツリー リストが表示され、表示された仮想コンピュータのいずれかを [選択した仮想コンピュータ] セクションに移動することで選択できます。[選択された仮想コンピュータ] セクションでは、選択した仮想コンピュータと使用可能な復元ポイント（特定のコンピュータの状態が含まれる時点）の一覧が表示されます。復元ポイントはクリックして選択できます。

ベリファイ タスク作成ウィザードを完了するには、タスク名を設定する必要があります。記号 [], {}, ;, . はタスク名には使用できません。



新しいベリファイ タスク。ベリファイの対象/復元ポイント

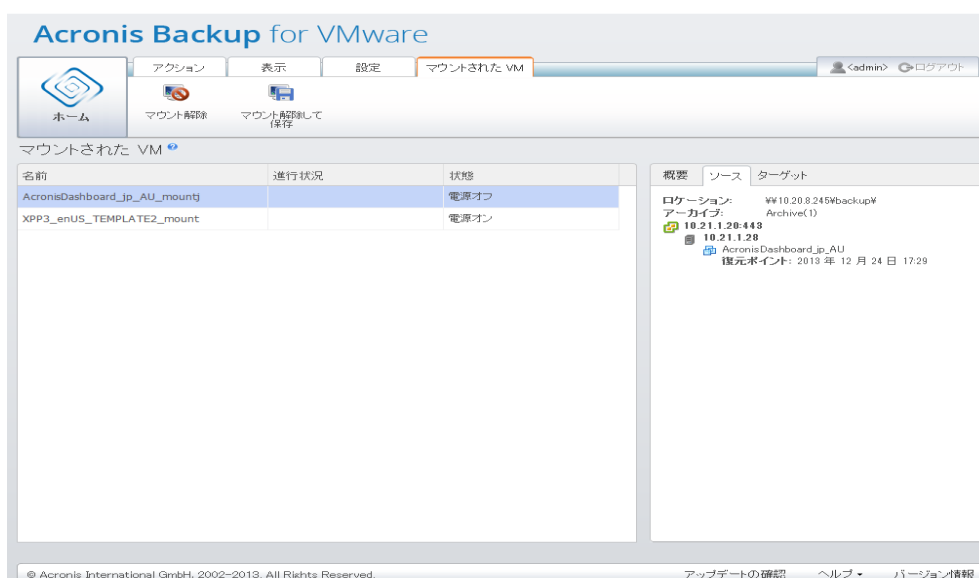
[今すぐ実行] ボタンをクリックすると、選択したアイテムがベリファイされ、**[タスク]** ビューに新しく作成したベリファイ タスクの進行状況が表示されます。結果は **[ダッシュボード]** ビューおよび **[ログの表示]** ビューに表示されます。

16.2 マウントされた VM の管理

[マウントされた VM] ページを開くには、Acronis Backup for VMware のメイン リボン メニューの [表示] タブで、[マウントされた VM] をクリックします。

16.2.1 マウントされた VM のリスト

[マウントされた VM] ビューには、ESX(i) ホスト上で現在マウントされている、またはバックアップから実行中の仮想コンピュータの概要が表示されます。



[マウントされた VM] ビュー

最初に、まだ仮想コンピュータを何も実行していない場合は、[マウントされた VM] リストが空です。[バックアップから VM を実行] 操作を実行すると（「バックアップから VM を実行」『80ページ』セクション）、[マウントされた VM] ビューが自動的に開き、実行したコンピュータが表示されます。

テーブルには、これらコンピュータのリストと状態（コンピュータが実行中であれば [電源オン]、実行中でなければ [電源オフ]）が表示されます。

16.2.2 マウントされた VM の詳細

マウントされている仮想コンピュータの詳細を確認するには、リスト内でそのコンピュータを選択します。選択した仮想コンピュータの詳細が右側のセクションに表示されるので、その他の詳細を確認するにはタブを切り替えてください。

リスト内で仮想コンピュータを選択すると、右側のセクションにそのコンピュータの詳細が表示されます。選択中のタスクに関する情報は、タブ ビューに表示されます。タブには [概要]、[ソース]、および [ターゲット] の 3 種類があります（デフォルトのタブは [概要]）。

1 つ目の **[概要]** タブには、選択中の仮想コンピュータに関する概要が表示されます。次に、**[概要]** タブに表示される内容の例を示します。

[開始時刻/日付]: 2013/11/05 20:11

[ソース] タブには、マウントされている ESX(i) ホストと vApp/VM のツリーが表示されます。次に、**[ソース]** タブに表示される内容の例を示します。

[ロケーション]: \\172.20.24.68\BackupLocation\

[アーカイブ]: Archive(4)

172.20.24.120:443

仮想コンピュータ 2

復元ポイント: 2013/08/01/ 14:39

[ターゲット] タブには、選択した VM の実行先に関する情報が表示されます。次に **[ターゲット]** タブに表示される内容の例を示します。

ESX ホスト 1 (10.250.40.30) “すべての仮想コンピュータ”:
Small_vm

16.2.3 VM のマウント解除

[マウントされた VM] ビューのコンテキスト ツール バーには、**[マウント解除]** と **[マウント解除して保存]** の 2 つのコントロール ボタンがあります。

[マウントされた VM] のリストで仮想コンピュータを選択すると、**[マウント解除]** ボタンをクリックしてそのコンピュータをマウント解除（バックアップからの実行を停止）できるようになります。

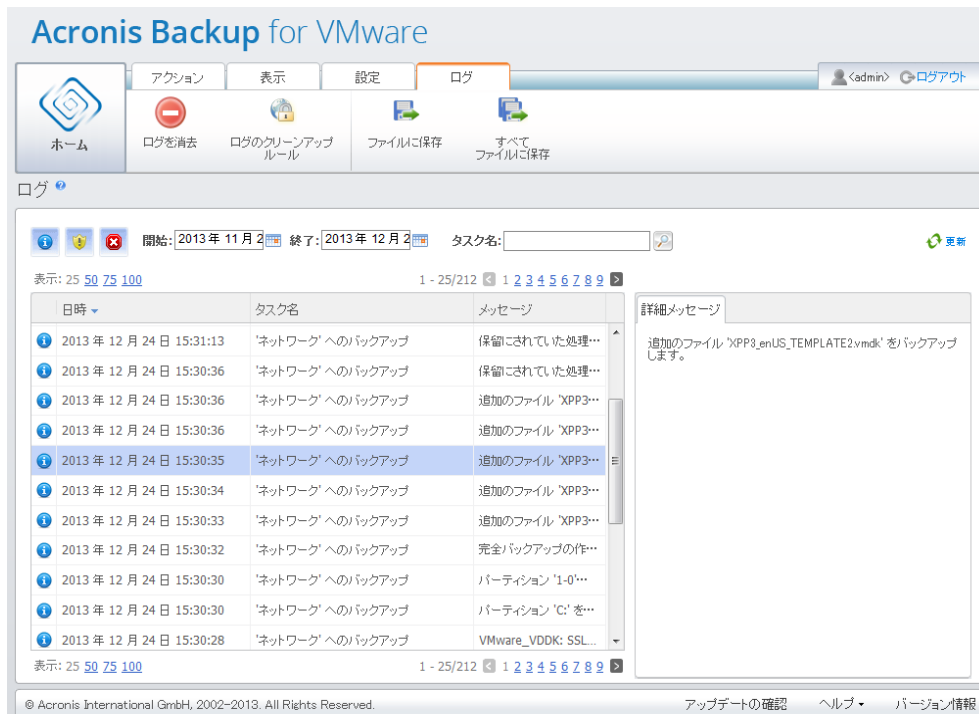
[マウント解除と保存] 操作を実行すると、バックアップからのコンピュータの実行が停止され、そのコンピュータで行われたすべての変更をアーカイブにコミットして新しい復元ポイントが追加されます。復元ポイントは、「アプリケーション アウェア」オプションを使用せずに作成されます。

16.3 ログの管理

[ログ] ページを開くには、Acronis Backup for VMware のメイン リボン メニューの **[表示]** タブで、**[ログの表示]** をクリックします。

16.3.1 ログ リスト

[ログの表示] ビューでは、Acronis Backup for VMware エージェントで発生したイベントのリストを提供します。リストには、バックアップ、復元、バックアップやその他タスクからの VM の実行のほか、管理対象となる ESX(i) ホスト/vCenter への接続の確立など、システムメッセージが含まれます。



ログ リスト

ログ リストには、**【日時】**、**【タスク名】**、および **【メッセージ】** の列が含まれています。列ヘッダーをクリックするとログ リストをソートできます。昇順と降順を切り替えるには、列ヘッダーをもう一度クリックしてください。

また、リストの上部にある複数のフィルタを使用して、ログ イベントをフィルタリングすることができます。

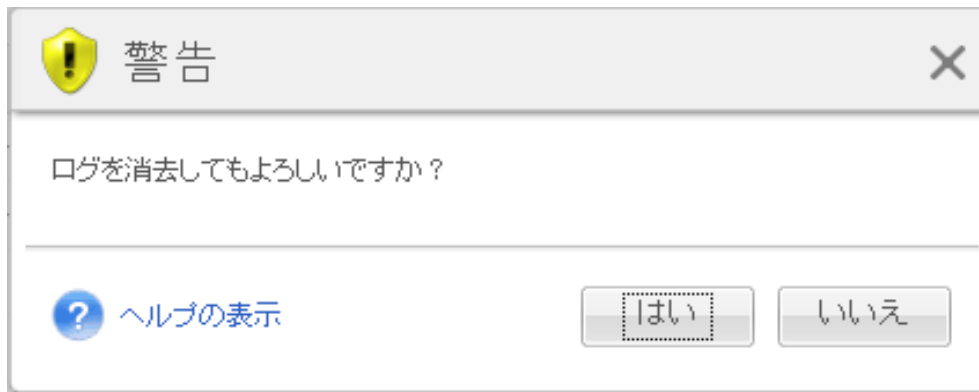
- イベント フラグ（成功、警告、エラー）
- 日時
- タスク名

リストでログ イベントをクリックすると、右側のウィンドウにそのログの詳細メッセージが表示されます。**【クリックして詳細情報を表示する】** リンクをクリックすると、ブラウザのウィンドウが新しく開き、Acronis ナレッジ ベースが表示されます。このリンクが使用できるのは、「エラー」タイプのログ イベントに対してだけです。

コンテキスト ツール バーから、ログ イベントをクリーンアップしたり、ログのサイズを一定の制限内に維持する自動クリーンアップ ルールを設定したりすることができます。これらの操作については、以降のサブセクションで説明します。

16.3.2 ログの消去

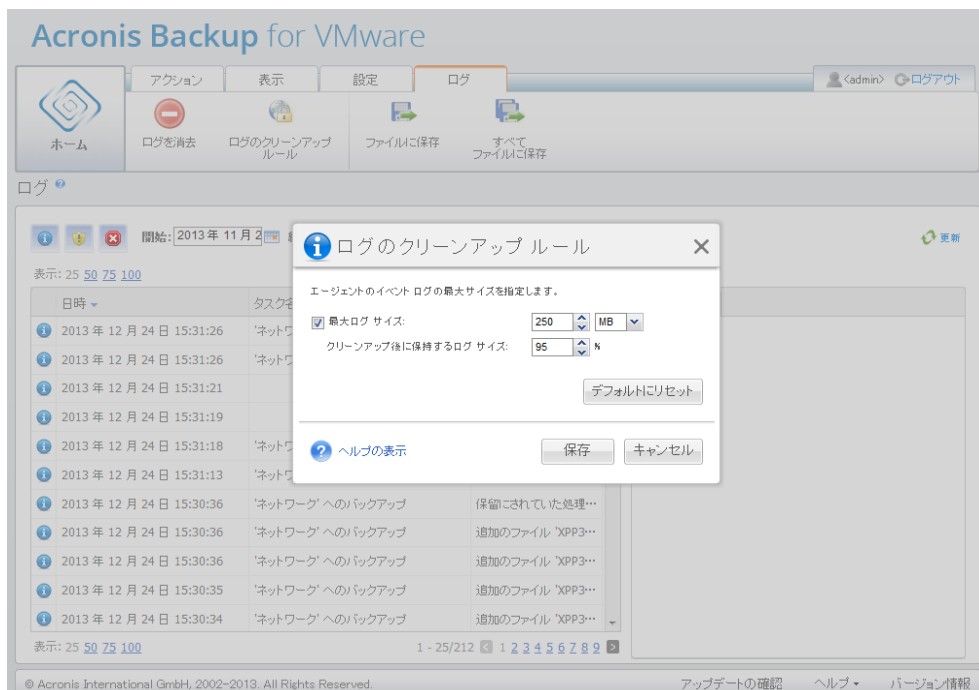
すべてのログ エントリを消去するには、メイン ツール バーで **【ログの消去】** をクリックします。この操作では、Acronis Backup for VMware ログ内のすべてのエントリがクリーンアップされます。ログの消去処理を確認するために、「ログをクリアしてもよろしいですか？」という警告メッセージが表示されます。承認すると同時に、すべてのログが消去されます。



[ログの消去] ダイアログ

16.3.3 ログのクリーンアップ ルール

ログ エントリを維持するルールを設定するには、メイン ツール バーで **[ログのクリーンアップ ルール]** ボタンをクリックします。つまり、このオプションでは、Acronis Backup for VMware エージェントのログをクリーン アップする方法を指定します。



[ログのクリーンアップ ルール] ダイアログ

[ログのクリーンアップ ルール] オプションを有効にするには、チェック ボックスをオンにします。エージェント ログ フォルダ（例: Windows XP/2003 Server では、%ALLUSERSPROFILE%\Application Data\Acronis\vmProtect\VMMS\LogEvents）の最大サイズを定義します。

[最大ログ サイズ] の値に加えて、維持したいログ エントリ数も設定することができます。

[ログのクリーンアップ ルール] 設定のデフォルト値は次のとおりです。

- **[最大ログ サイズ]:** 250 MB
- **[クリーンアップ後に保持するログ サイズ]:** 95 %

[デフォルトにリセット] ボタンをクリックすると、デフォルトの設定値に戻ります。

[ログのクリーンアップ ルール] オプションを有効にすると、ログ エントリが 100 個に達するごとに、実際のログ サイズとデフォルトの**最大ログ サイズ**が比較されます。最大ログ サイズを超えた場合、最も古いログ エントリが削除されます。デフォルト設定の 95% では、ログの大部分が保持されます。最小値の 1% では、ログがほぼクリアされた状態で維持されます。

16.3.4 ログをファイルに保存

フィルタされたログ エントリをログ リストから保存するには、リボン バーにある **[ファイルに保存]** ボタンをクリックします。この操作によって、選択されたログの .zip ファイルを取得し、ローカル PC に保存できます。発生した問題をトラブルシューティングするとき、**[ログをファイルに保存]** 操作を実行する場合があります。

このほか、**[すべてをファイルに保存]** ボタンをクリックすることで、Acronis Backup for VMware のログ エントリ履歴をすべて保存できます。

16.4 ライセンスの管理

[ライセンス] ページを開くには、Acronis Backup for VMware のメイン リボン メニューの **[設定]** タブで、**[ライセンス]** をクリックします。

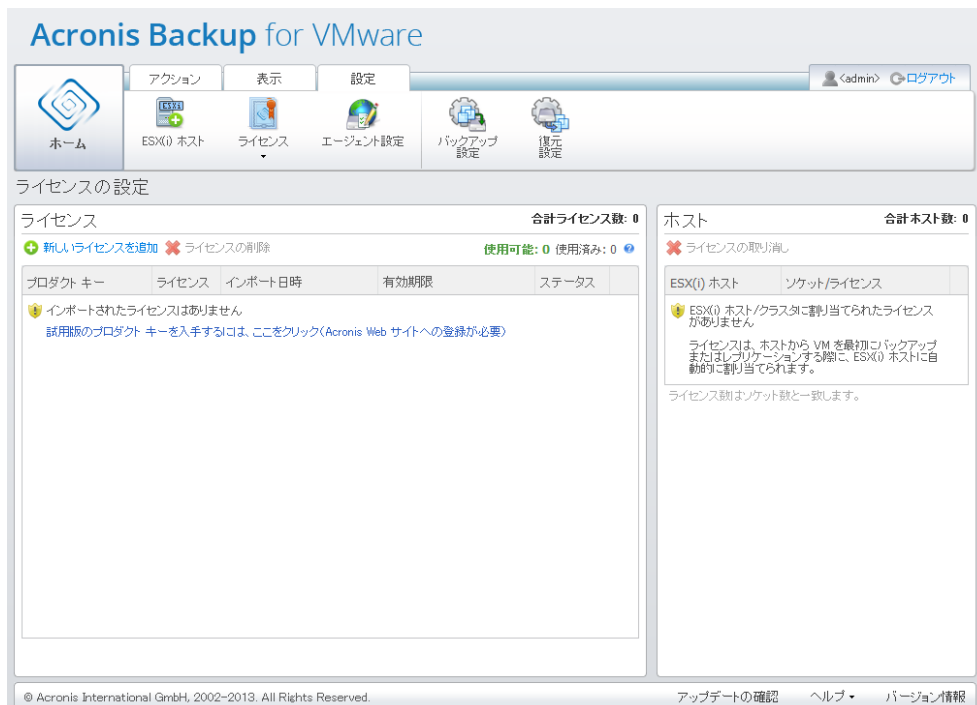
[ライセンス] ビューには、Backup for VMware エージェントにインポートされたライセンスの概要が表示されます。ここではツール バーのボタンを使用して、ライセンスのプロダクト キーを**追加**したり、ESX(i) ホストへのライセンスのバインドを**削除**したりできます。ライセンスの紐付けを削除するとライセンスは解放されます。

Backup for VMware のライセンス スキームは、管理対象の ESX(i) ホスト/クラスタの CPU にそれぞれ個別のライセンスが必要であることを意味します。

Acronis Backup for VMware を初めて実行する際、ライセンスはいずれの ESX(i) ホスト/クラスタにもバインドされていません。バインドされたライセンスがない場合、VM の保存先は Acronis Cloud Backup Storage のみです。以下の説明にあるように、新しいライセンスを追加することができます。

インポートされた（追加された）プロダクト キーには、複数のライセンスが含まれている場合があります。**[ライセンス]** ページの右側のセクションに、プロダクト キーのリスト、ライセンスの数、インポート日と有効期限が表示されます。

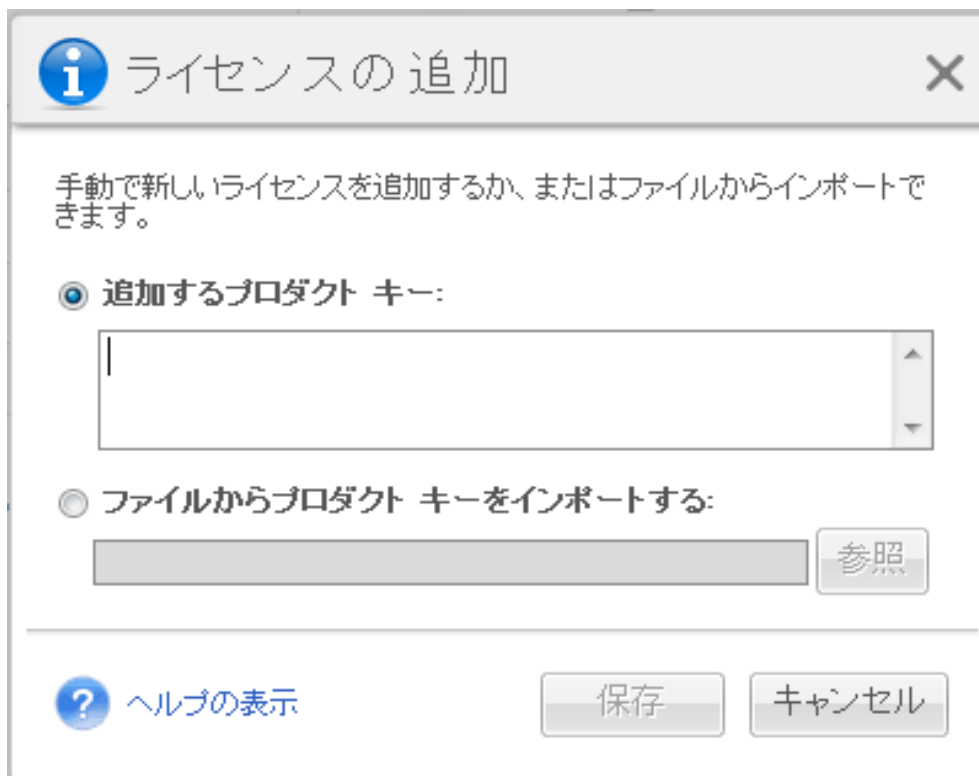
左側のセクションには、いくつかのライセンスがバインドされた ESX(i) ホスト/クラスタのリストが表示されます。ライセンスは、ESX(i) ホスト上の仮想コンピュータで最初のバックアップまたは復元を行った際に ESX(i) ホスト/クラスタへバインドされます。クラスタの場合は、クラスタ上の全ホストにライセンスが紐付けされます。クラスタからホストが削除されても、ライセンスは自動で解放されません。バインドされたライセンスを削除するには、ここから ESX(i) ホスト/クラスタを選択してツール バーの **[削除]** ボタンをクリックします。これによって対象のホストにバインドされたライセンスが再度解放され、別の ESX(i) ホスト/クラスタで再利用できるようになります。



[ライセンスの管理] ページ、ライセンス リスト

16.4.1 ライセンスの追加

ライセンスを追加するには、ライセンスを対応するフィールドにコピー アンド ペーストするか、インポートするライセンスが格納されたファイルを参照します。Acronis Backup for VMware では、.txt または .csv のファイル フォーマットがサポートされています。



新しいライセンスを追加すると同時に次のメッセージが表示され、追加されたライセンスの番号が示されます。



[ライセンスの管理] ページ、「追加の成功」メッセージ

16.4.2 ライセンス追加の失敗

ライセンス追加の失敗には、次の原因が考えられます。

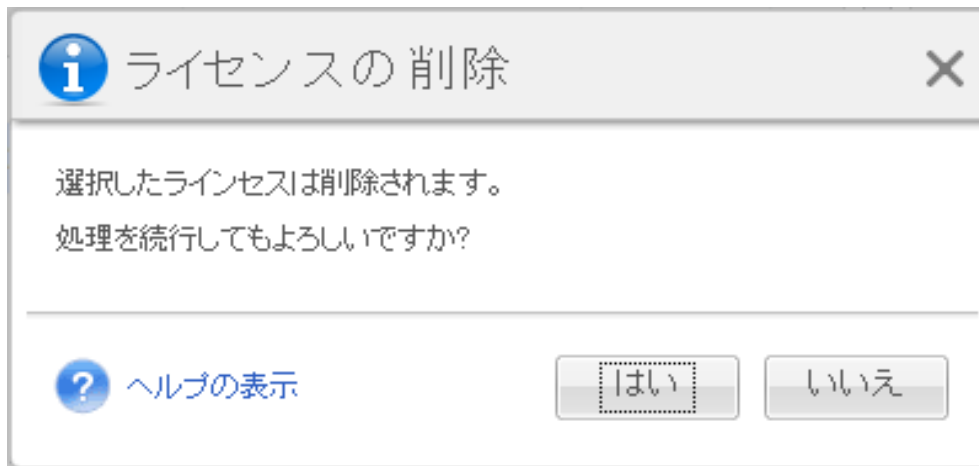
- ライセンスが既にインポートされている。
- ライセンスが正しくない。

その他の問題も考えられます。ライセンスが正しいことを確認してもライセンスを追加できない場合は、アクロニスのサポート 『124ページ』 までお問い合わせください。

16.4.3 ライセンス/ESX(i) ホストの削除

リストでいずれかの ESX(i) ホスト/クラスタを選択し、**[削除]** ボタンをクリックします。選択された ESX(i) ホストに割り当てられたライセンスはリセットされ、ライセンスは解放されます。対象ホスト上の実行中のコンピュータでバックアップまたは復元を行うと、ライセンスは自動的にこのホストへ再割り当てされます。

この場合はダイアログで **[はい]** を選択し、ライセンスの紐付け削除を承認する必要があります。



[ライセンスの管理] ページ、ライセンス削除の確認ダイアログ

16.4.4 使用可能なライセンス

Acronis Backup for VMware で使用できるライセンスには、以下のように複数の種類があります。

- Acronis vmProtect 6/7/8 標準ライセンス
- Acronis Backup for VMware アップグレード ライセンス
- Acronis Backup for VMware 標準ライセンス
- Acronis Backup for VMware 試用版ライセンス

Acronis Backup for VMware では「ソケットごとの」ライセンス スキームを使用し、ESX(i) ホストの各 CPU ソケットに Acronis Backup for VMware のライセンスが 1 つ必要です。ライセンスは、ESX(i) ホストからの仮想コンピュータの最初のバックアップまたはレプリケーションを行ったときに ESX(i) ホストに割り当てられます。このホストが VMware クラスタの一部である場合、ライセンスは、このクラスタに含まれるその他すべての ESX(i) ホストにも割り当てられます。

詳細とステータスが記載されたすべてのプロダクト キーは、ライセンスの種類に従ってリストされます。

Acronis Backup for VMware は、Acronis Backup for VMware 標準ライセンスか Acronis Backup for VMware アップグレード ライセンスを使用します。Acronis Backup for VMware アップグレード ライセンスを追加するには、十分な数の Acronis vmProtect 6/7/8 標準ライセンスが既に登録されている必要があります。そうでない場合、Acronis Backup for VMware アップグレード ライセンスの追加に失敗します。

使用可能なライセンスの数は、いくつかのライセンス（Backup for VMware 標準ライセンスと Backup for VMware アップグレード ライセンス）を ESX (i) ホストへの割り当てに使用できるかを示します。使用中のライセンスは、既にそれぞれの ESX (i) ホストに割り当てられたライセンスです。ライセンスの合計数は、使用中のライセンスと使用可能なライセンスを合わせたものです。未アップグレード ライセンスの数は、Acronis Backup for VMware アップグレード ライセンスが追加されていない vmProtect 6/7/8 標準ライセンスを示します。

16.5 ESX(i) ホストの管理

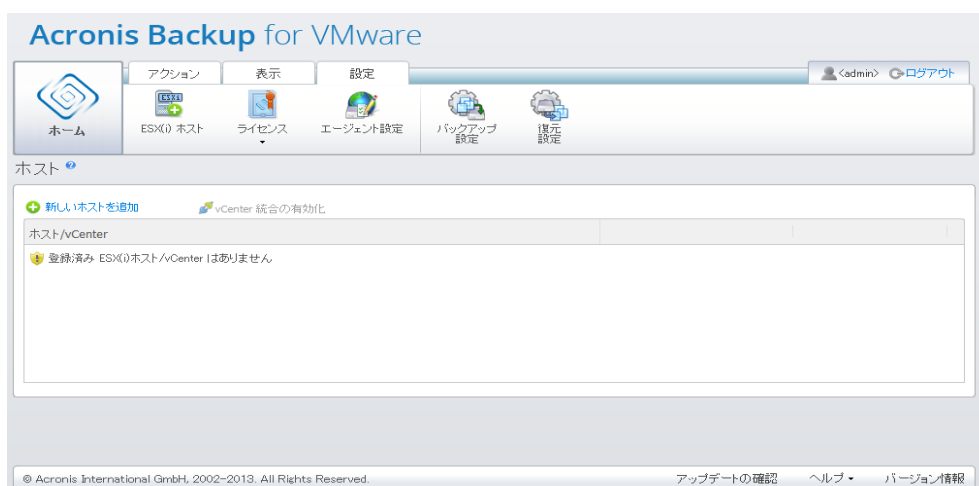
[ESX(i) ホスト] ページを開くには、Acronis Backup for VMware のメイン リボン メニューの **[設定]** タブで、**[ESX(i) ホスト]** をクリックします。

16.5.1 ESX(i) ホストのリスト

[ホスト] ビューには、Acronis Backup for VMware エージェントの設定に登録されている ESX(i) ホスト/vCenter の概要と管理インターフェイスが表示されます。リボンのボタンを使用して、他の ESX(i) ホストをリストに追加したり、それらを削除したりできます。

Acronis Backup for VMware を初めて実行する際、登録されている ESX(i) ホスト/クラスタは存在しません。このページでは、以下の手順に従って新しい ESX(i) ホストを追加できます。

ESX(i) ホスト/vCenter を追加すると、ホストのリストに表示されます。



[ESX(i) ホストの設定] ページ、ホストのリスト

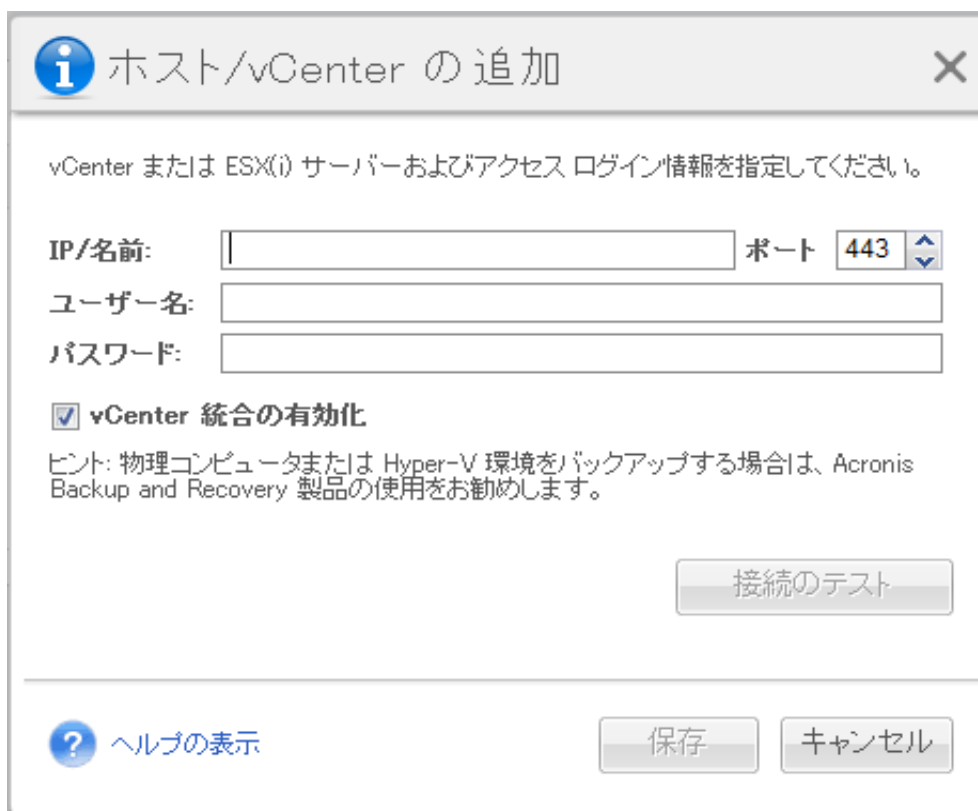
ESX(i) ホスト/vCenter を追加しても、自動的にライセンスはバインドされません。このホスト上で実行されている仮想コンピュータでバックアップ/復元タスクを実行した場合にのみ紐付けされます。ESX(i) ホスト/vCenter を追加すると、ESX(i) ホスト/vCenter 上で実行されている仮想コンピュータを使用してバックアップ/復元タスクを実行できるようになります。

ESX(i) ホスト/vCenter を削除すると、ESX(i) ホスト/vCenter 上で実行されている仮想コンピュータに適用されているすべてのタスクが表示されなくなります。タスクに各種 ESX(i) ホストの仮想コンピュータが含まれている場合は、構成からいずれかの ESX(i) ホストを削除してもタスクは削除されません。

ESX(i) ホスト/vCenter を正常に管理するには、ログイン資格情報が必要です。資格情報はここで入力できます。入力した情報は、ESX(i) ホスト/vCenter を手動で削除するか、資格情報を変更するまで記録されます。セキュリティ上の制限により、企業ポリシーでパスワードの変更が求められている場合に、資格情報の変更操作が必要となる可能性があります。この場合はリストで ESX(i) ホスト/vCenter を選択し、右側の **[資格情報の編集]** ボタンをクリックします。

16.5.2 ESX(i) ホストの追加

ESX(i) ホスト/vCenter を追加するには、目的の ESX(i) ホスト/vCenter にアクセスするための IP アドレス/ホスト名と、ユーザーの資格情報を指定する必要があります。カスタム ポートを指定することも可能です。指定した資格情報が正しいことを確認するには、**[接続のテスト]** ボタンで接続を確認します。次に、**[保存]** をクリックして ESX(i) ホスト/vCenter を追加してください。



[ESX(i) ホストの管理] ページ、[ホスト/vCenter の追加] ダイアログ

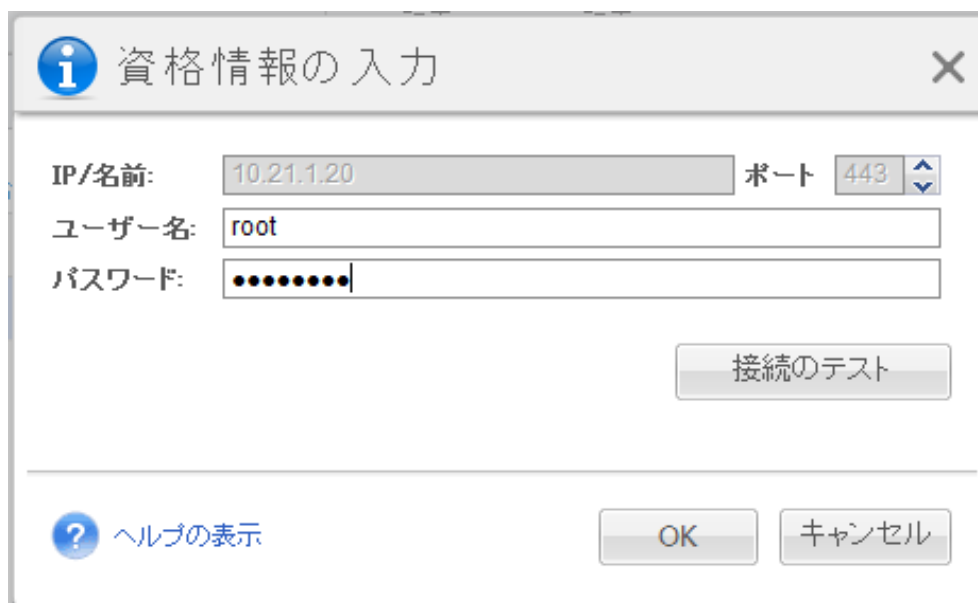
16.5.3 vCenter の一部である ESX(i) ホストの追加

vCenter 自体を追加する代わりに vCenter の一部である ESX(i) ホストを直接追加した場合に最も問題となるのは、Acronis Backup for VMware エージェントが、vCenter の代わりに ESX(i) ホストに対して行った変更内容を追跡できなくなる点です。これにより、予測できない結果が生じる可能性があります。たとえば、バックアップから VM を実行する場合、マウント解除時に一時ファイルが vCenter によってロックされるため、ESX(i) ホストから削除されなくなります。このため、個別の ESX(i) ホストではなく、vCenter を追加することを強くお勧めします。

vCenter の一部である ESX(i) ホストの追加を試みると、次の警告メッセージが表示されます。vCenter を追加するには **[いいえ]** をクリックしてください。

16.5.4 ログイン資格情報

セキュリティ上の制限により、企業ポリシーでパスワードの変更が求められている場合に、資格情報の変更操作が必要となる可能性があります。リストで **ESX(i) ホスト/vCenter** を選択して **[資格情報の編集]** をクリックし、**ESX(i) ホスト/vCenter** 接続のログイン/パスワード情報を指定します。**Acronis Backup for VMware** をドメイン環境で実行している場合、ユーザー名は、ドメイン\ユーザー名という形式で指定する必要があります。指定した資格情報が正しいことを確認するには、**[接続のテスト]** ボタンで接続を確認します。次に、**[OK]** をクリックして **ESX(i) ホスト/vCenter** を追加してください。



[ESX(i) ホストの管理] ページ、[資格情報の入力] ダイアログ

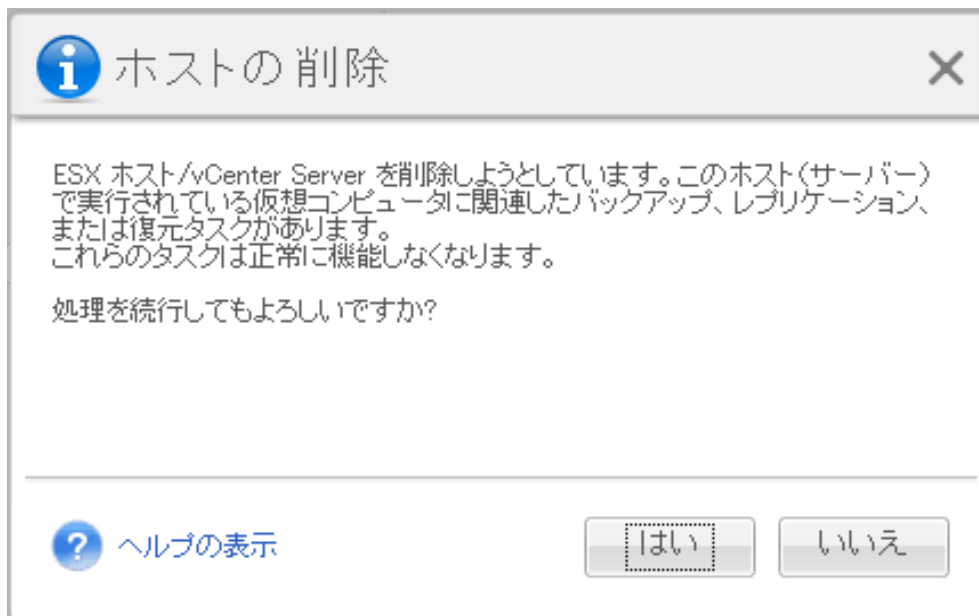
16.5.5 ESX(i) ホストの削除

ESX(i) ホスト上で実行される仮想コンピュータのバックアップ/復元操作を今後行わない場合は、**Acronis Backup for VMware** 構成から **ESX(i) ホスト**を削除する必要があります。このホストに割り当てられたライセンスは、自動的に削除されません。紐付けされたライセンスを削除するには、**[設定] -> [ライセンス]** 『110ページ』 ページに移動します。

ESX(i) ホスト/vCenter を削除すると既存タスクの誤作動を引き起こす可能性があるため、削除時に次の警告メッセージが表示されます。

「**ESX(i) ホスト/vCenter** を削除しようとしています、このホストで実行している仮想コンピュータに関連したバックアップまたは復元タスクがあります。これらのタスクは正常に機能しなくなります。処理を続行してもよろしいですか？」

[はい] を選択すると、その **ESX(i) ホスト/vCenter** 上で実行中の仮想コンピュータに適用された **Acronis Backup for VMware** タスクはすべて削除されます。タスクに他の **ESX(i) ホスト**の仮想コンピュータが含まれている場合は、このタスクはタスク構成から不要な仮想コンピュータを削除するよう自動的に変更されます。これにより、登録に残され **ESX(i) ホスト**で管理できる仮想コンピュータのみが残ります。



[ESX(i) ホストの管理] ページ、[ホストの削除] ダイアログ

16.6 設定の管理

16.6.1 Cloud Backup サブスクリプション

[設定] タブに移動して、**[エージェント設定]** をクリックし、**[Acronis Cloud Backup サブスクリプション]** セクションを選択します。

最初に、Acronis Cloud Backup Storage へのログイン資格情報を指定して、**[OK]** をクリックします。Acronis ウェブ サイトにアカウントがあることを確認してください。アカウントがない場合は、作成する必要があります。

次に、リストからコンピュータに割り当てる使用可能なサブスクリプションを選択して、**[今すぐアクティブ化する]** をクリックします。**[OK]** をクリックして確認すると、選択したサブスクリプションがアクティブ化されます。アクティブ化には数分かかることがあり、終了すると選択したコンピュータ、使用されているクォータ、および有効期限が、アクティブ化されたサブスクリプションのリストに表示されます。ストレージのクォータまたはサブスクリプション期間を増やす必要がある場合は、アカウント管理ウェブ ページに移動し、サブスクリプションをアップグレードするか更新します。

Cloud Backup サブスクリプションは、Backup for VMware ライセンスから独立しているため、有効な Acronis Backup for VMware Cloud Backup サブスクリプションがあれば、Cloud Backup for VMware ライセンスがなくても VM をクラウドにバックアップできます。つまり、ESXi ホストのソケットの量に対する依存関係はないということです。Cloud Backup サブスクリプションのみを使用して、任意の数の VM をバックアップできます。

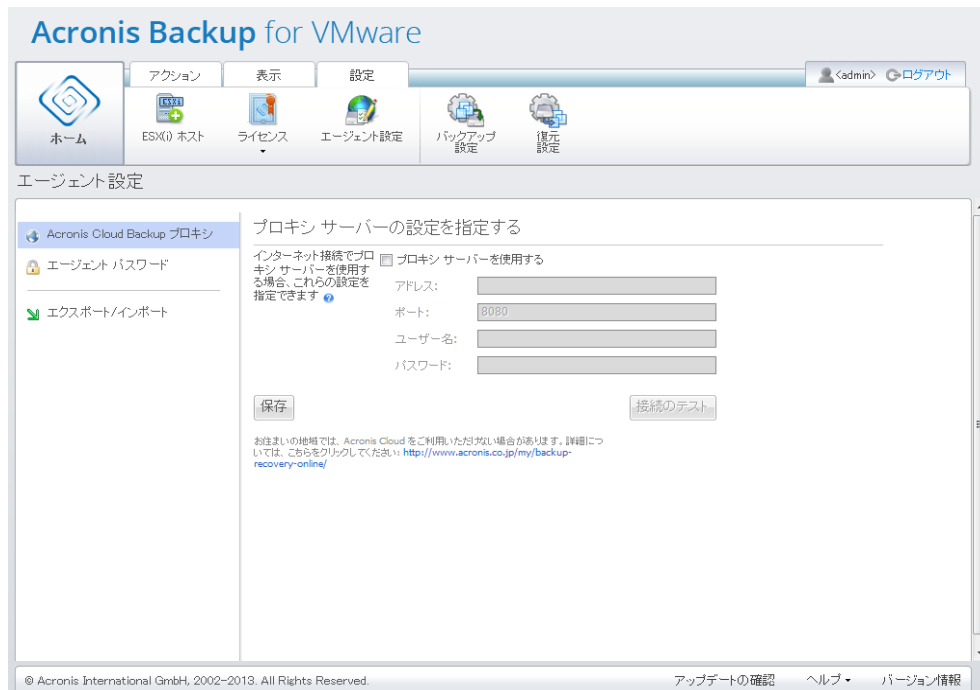
16.6.2 Cloud Backup プロキシ

[設定] タブに移動して、**[エージェント設定]** をクリックし、**[Acronis Cloud Backup プロキシ]** セクションを選択します。

Cloud Backup プロキシの設定は、インターネット経由で Acronis Cloud Backup Storage を利用してバックアップおよび復元する場合にのみ効果があります。

このオプションでは、Acronis エージェントをプロキシ サーバー経由でインターネットに接続するかどうかを定義します。

Acronis Backup for VMware Cloud Backup Storage は、HTTP および HTTPS プロキシ サーバーのみをサポートしています。



設定の構成、Cloud Backup プロキシ

プロキシ サーバーを設定する手順は、次のとおりです。

[プロキシ サーバーを使用する] チェックボックスをオンにします。

- **[アドレス]** に、プロキシ サーバーのネットワーク名または IP アドレス (proxy.example.com、192.168.0.1 など) を指定します。
- **[ポート]** に、プロキシ サーバーのポート番号 (80 など) を指定します。
- プロキシ サーバーで認証を必要とする場合は、**[ユーザー名]** および **[パスワード]** フィールドに資格情報を指定します。

プロキシ サーバー設定をテストするには、**[接続テスト]** をクリックします。

設定を適用するには、**[保存]** をクリックします。

プロキシ サーバーの設定が不明な場合は、ネットワーク管理者またはインターネット サービス プロバイダにお問い合わせください。

また、ウェブ ブラウザの設定を参照して、これらの設定を確認することもできます。よく知られている 3 つのブラウザでこの設定を探す方法は、次のとおりです。

- Microsoft Internet Explorer の場合: **[ツール]** メニューで **[インターネット オプション]** をクリックし、**[接続]** タブで **[LAN の設定]** をクリックします。

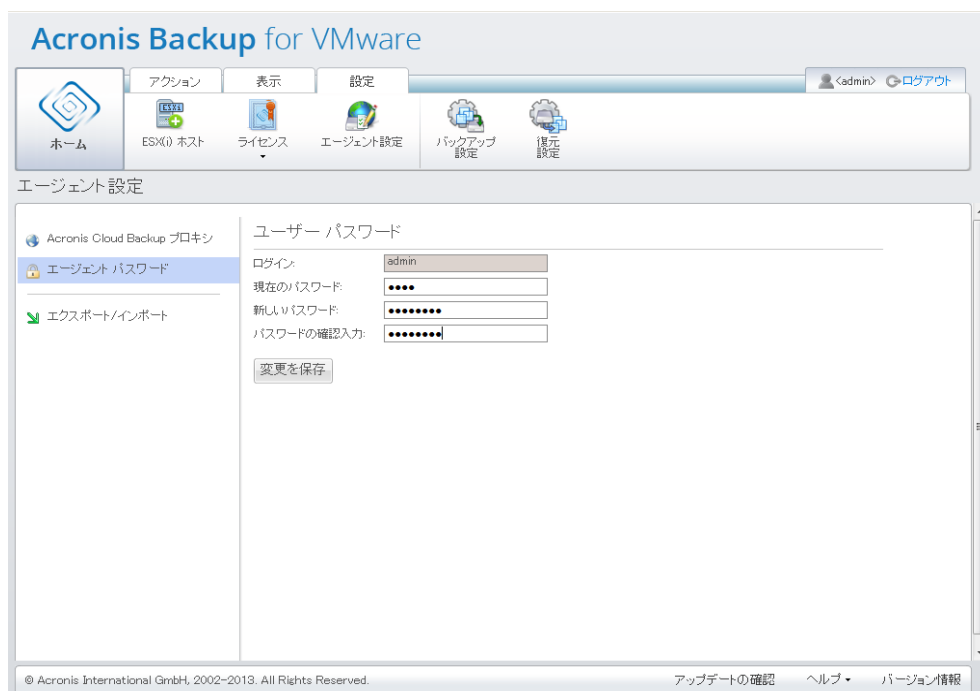
- Mozilla Firefox の場合: [ツール] メニュー (メインの [Firefox] ボタンをクリックするか、キーボードの Alt キーを押すとアクセスできます) で、[オプション] をクリックし、[詳細] をクリックします。[ネットワーク] タブの [接続] で [接続設定] をクリックします。
- Google Chrome の場合: [オプション] の [高度な設定] をクリックし、[ネットワーク] で [プロキシ設定を変更] をクリックします。

16.6.3 エージェント パスワード

ユーザー パスワードを変更するには、[設定] タブに移動して、[エージェント設定] をクリックし、[エージェント パスワード] セクションを選択します。

ここでは、Acronis Backup for VMware エージェントのユーザーのパスワードを変更できます。ユーザー名 (ログイン) は変更できません。パスワードを変更するには、最初に古いパスワードを指定してから、対応するフィールドに新しいパスワードと確認用パスワードを入力する必要があります。

[エージェント パスワードの管理] オプションは、エージェントが仮想アプライアンス 『22 ページ』としてインストールされている場合のみ利用可能です。Windows エージェント 『23 ページ』接続の場合、Acronis Backup for VMware は Windows ユーザー アカウント (ローカルのログイン権限を持つアカウントで、[スタート]->[Secpol.msc]->[ローカル ポリシー]->[ユーザー権利の割り当て] から、セキュリティ ポリシー [ローカル ログオンを許可する] にユーザーを追加する必要がある) を使用します。



設定の構成、ユーザー パスワード

16.6.4 構成のエクスポート/インポート

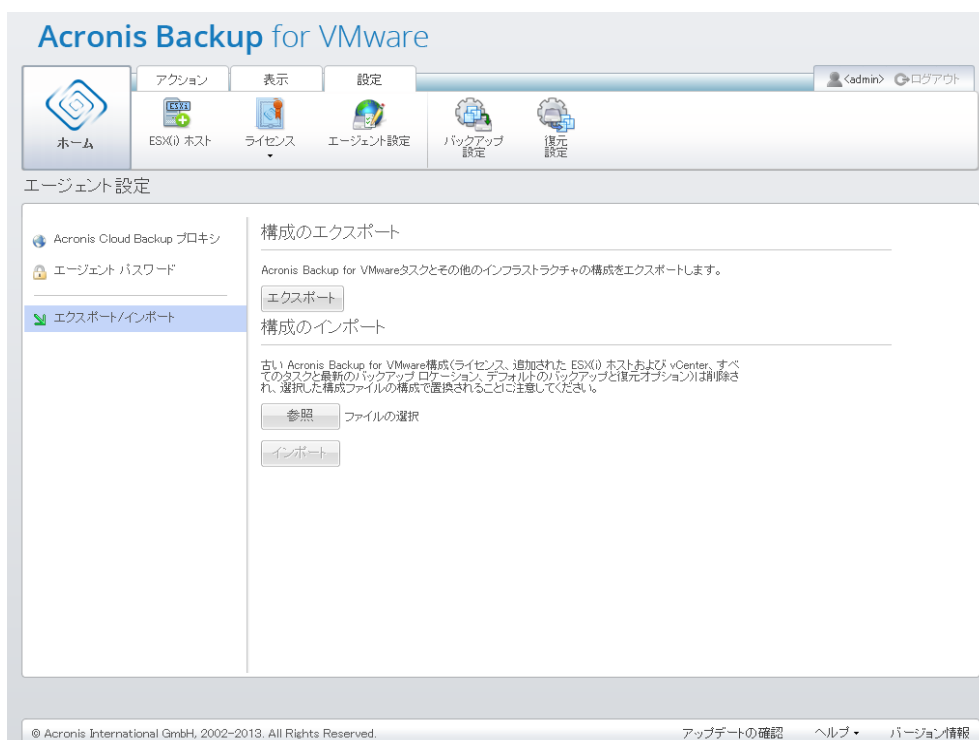
[設定] タブに移動して、**[エージェント設定]** をクリックし、**[エクスポート/インポート]** セクションを選択します。

ここで **Acronis Backup for VMware** エージェント（仮想アプライアンス/Windows エージェント）の構成をエクスポートおよびインポートできます。この機能を使用すると、現在の構成をエクスポートし、必要に応じて復元することで、起こり得るソフトウェア/ハードウェアの異常終了からエージェントを保護できます。何らかの理由で再インストールが必要になった場合は、保存された構成を別のエージェントにインポートすることもできます。

構成のエクスポート

[エクスポート] ボタンをクリックして、**Acronis Backup for VMware** タスクおよび他のインフラストラクチャ構成を .xml ファイルとして、ローカル コンピュータに保存します。エクスポートされた構成には、次のものが含まれます。

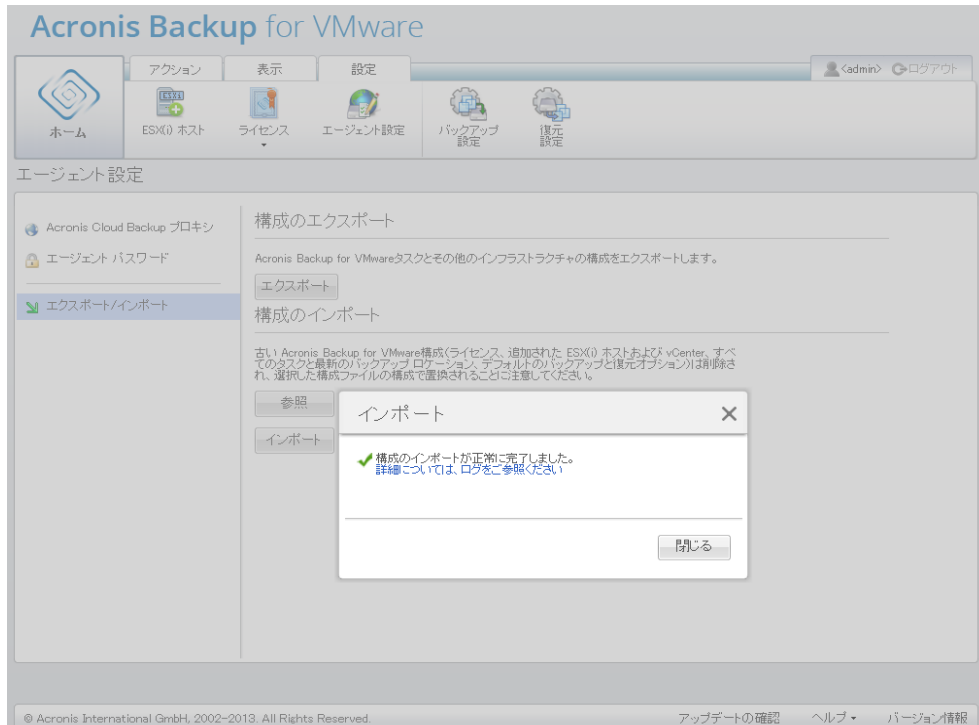
- 追加された ESX(i) ホストとこれらのホスト/vCenter にアクセスするための資格情報のリスト
- 追加されたライセンスのリスト
- すべての現在のタスクとタスクのスケジュール
- ローカル フォルダ、ネットワーク共有、FTP/SFTP、Acronis Cloud Backup などの最近のバックアップ ロケーション
- デフォルトのバックアップ/復元設定と電子メール通知およびアーカイブ保護のための資格情報（設定されている場合）
- Acronis Cloud Backup プロキシ設定
- ログのクリーンアップ ルール



設定の構成、構成のエクスポート/インポート

構成のインポート

[参照] で保存した構成ファイルを選択し、[インポート] ボタンをクリックして、インポート処理を開始します。古い Acronis Backup for VMware 構成（ライセンス、追加された ESX(i) ホストおよび vCenter、すべてのタスク、および最近のバックアップ ロケーション、デフォルトのバックアップ設定および復元設定）は削除され、選択された構成ファイルの構成に置き換えられることに注意してください。



設定の構成、構成のインポート

17 ベスト プラクティス

このセクションでは、Acronis Backup for VMware の操作について、いくつか例を紹介します。

Acronis Backup for VMware エージェントをインストールしたら、アクセス資格情報を使用して接続する必要があります。

1. ESX(i) ホストの追加

まず、バックアップやその他の操作を実行できるように、仮想コンピュータが稼動する vCenter または個別の ESX(i) ホストの IP アドレス/ホスト名と資格情報を指定する必要があります。[ダッシュボード] の [クイック スタート] で [ESX(i) ホストの設定] をクリックするか、[設定] メニューで [ESX(i) ホスト] ビューに移動して、[追加] をクリックします。vCenter または ESX(i) サーバーおよびアクセス資格情報を指定してください。詳細については、「ESX(i) ホストの管理 『114ページ』」セクションをご参照ください。

2. ライセンスの追加

ESX(i) ホストを設定しても、ライセンスは自動的にバインドされません。ライセンスを設定するには、[ライセンス] ページに移動する必要があります。[ダッシュボード] の [クイック スタート] で [ライセンスの設定] をクリックするか、[設定] メニューで [ライセンス] ビューをクリックします。次に、[追加] をクリックしてプロダクト キーを指定します。詳細については、「ライセンスの管理 『110ページ』」セクションをご参照ください。

設定が終われば、実際に仮想インフラストラクチャのバックアップを開始できます。

17.1 仮想コンピュータからネットワーク共有へのバックアップ

複数 (例: 5 つ) の仮想コンピュータのバックアップを作成し、ネットワーク共有に保存する方法について説明します。

[ESX(i) ホスト] および [ライセンス] を設定したらバックアップ タスクの作成ウィザードを実行します。このウィザードは、バックアップ処理のすべての手順を案内します。[ダッシュボード] の [クイック スタート] で [バックアップ タスクの作成] をクリックするか、またはメイン メニューの [ホーム] タブで [バックアップ] をクリックします。次に、新しいバックアップ タスク ウィザードを実行します。詳細については、「仮想コンピュータのバックアップの作成 『39ページ』」セクションをご参照ください。

新しいバックアップ タスク ウィザードの手順 1 では、5 台の仮想コンピュータを選択します。次の手順 2 では、バックアップ アーカイブを保存する目的のネットワーク共有ロケーションを参照します。手順 3 と 4 では、目的のスケジュールとバックアップ方法を選択し、その後、ウィザードを終了します。これで、作成したバックアップ タスクにより、必要なタスクを実行できるようになります。タスクの進捗状況は、Acronis Backup for VMware インターフェイスの [ダッシュボード] と [タスク] ([表示]->[タスク]) ビューの両方で確認できます。

17.2 仮想コンピュータのバックアップを新しいロケーションに復元する

これまでにバックアップの作成が完了しました。次に例として、バックアップした仮想コンピュータを新しいロケーションに復元する方法を考えます。

これには、**バックアップ タスク復元**ウィザードを実行します。このウィザードは、復元処理のすべての手順を案内します。メイン メニューの **【ホーム】** タブで **【復元】** をクリックし、次にウィザードを実行します。詳細は、「仮想コンピュータのバックアップの復元 『63ページ』」セクションをご参照ください。

ウィザードの最初の手順では、バックアップされた仮想コンピュータを選択します。手順 2 では、コンピュータの復元先にする新しいロケーションを選択します。手順 3 では、希望する復元タスクを選択してからウィザードを終了します。**【今すぐ実行】** をクリックしてすぐにコンピュータを復元するか、**【保存】** をクリックして後から復元してください。

17.3 ファイル/フォルダの復元

最初の 2 つのユース ケースでは、Acronis Backup for VMware でバックアップ処理と復元処理を実行する方法を紹介しました。ここではもう 1 つ、選択したファイルを特定のアーカイブから復元する方法について説明します。これは、仮想コンピュータ全体を復元せずに、バックアップ アーカイブから 1 つ、または少数のファイルだけを復元する場合のユース ケースです。

メイン メニューの **【ホーム】** タブで **【ファイルの復元】** をクリックし、**ファイルの復元**ウィザードを実行します。ファイルの復元ウィザードの最初の手順では、仮想コンピュータの復元ポイントを選択する必要があります。復元ポイントによって、ファイルまたはフォルダを抽出する VM の状態が定義されます。次の手順 2 では、復元に必要なファイルを選択して **【ダウンロード】** をクリックします。**ファイルの復元**に関する詳細については、「ファイルの復元 『70ページ』」セクションをご参照ください。

また、同じウィザードを別の方法で実行することもできます。これは、**【復元ポイント】** ビューで復元ポイントに直接アクセスする方法です。この場合、**【表示】** タブに移動して **【復元ポイント】** をクリックします。次に、ファイルを復元する仮想コンピュータの状態を選択します。適切なセクションで正しい復元ポイントを選択したら、コンテキスト メニューで **【ファイルの復元】** ボタンをクリックしてください。**ファイルの復元**ウィザードに移動し、手順 1 ではあらかじめ選択された復元ポイントが入力されているので、**【次へ】** をクリックして手順 2 に進みます。次に、復元するファイルとフォルダ、またはそのいずれかを選択して **【ダウンロード】** をクリックします。

18 サポート

18.1 テクニカル サポート

保守サポート プログラム

Acronis 製品に関するサポートが必要な場合には、<http://www.acronis.co.jp/support/> にアクセスしてください。

製品アップデート

マイ アカунツ (<https://www.acronis.co.jp/my>) にログインし、製品を登録していただきますと、お客様がお使いのすべての Acronis ソフトウェアの最新アップデートを弊社ウェブサイトよりダウンロードすることができます。Acronis 製品をウェブサイトで登録するには(英語) (<http://kb.acronis.com/content/4834>)およびアクロニス ウェブ サイトのユーザーガイド (日本語) (<http://kb.acronis.com/content/8128>)をご参照ください。

18.2 トラブルシューティング

Acronis Backup for VMware の使用時にトラブルが発生した場合やアクロニス テクニカル サポートに問い合わせるときは、作業ログを保存して送信してください。[ログ] 『107ページ』 ページに移動し、[すべてファイルに保存] 『110ページ』.をクリックしてください。

アクロニス テクニカル サポートへのお問い合わせについては、
<http://www.acronis.com/support/> をご参照ください。

19 用語集

A

Always Incremental アーカイブ

これは、新世代のアーカイブ 『127ページ』 フォーマットであり、異なる複数の仮想コンピュータから複数のバックアップ 『131ページ』 を取得して含めることができます。すべてのバックアップは 増分モード 『135ページ』 でそのアーカイブに保存されます。レガシーモードのアーカイブ フォーマットでは各バックアップが別の TIB ファイルへ保存されるのに対して、増分モードではすべてのデータが物理的に 1 つのファイルに配置されます。ここでは、Always Incremental アーカイブ内で実行されるバックアップ ローテーションについて説明します。

事前に定義された保持ルール（たとえば「5 日以上前のバックアップはすべて削除する」など）に従ってあるバックアップの有効期限が切れると、プログラムによって期限切れバックアップに属している古いブロックは「空き」ブロックとしてマーク付けされます。期限切れのバックアップのブロックに（増分バックアップ テクノロジーにより、新しいバックアップで使用される可能性がある）依存関係がある場合は、アーカイブの整合性をとるために「空き」マークは付けられません。アーカイブは以前と同じくストレージ上の同じ領域を占有します。ただし、このアーカイブに保存された新しいバックアップは、データをまず「空き」ブロックへ書き込み、すべての「空き」ブロックが埋まった場合にのみ、アーカイブの合計サイズが増加します。

この方法では、アーカイブのサイズをできるだけ小さく保ち、サイズが無制限に大きくなりないようにします。

C

CBT (Changed Block Tracking)

変更された仮想ディスクのブロックを識別し、バックアップ/レプリケーション プロセスで、これらの変更されたブロックのみを転送できる VMware ESX (i) の機能。たとえば、CBT テクノロジーを使用すると、増分バックアップの速度を最大で 20 倍速くすることができます。

G

GFS (Grandfather-Father-Son)

バックアップ アーカイブ 『131ページ』 のサイズとアーカイブから使用可能な復元ポイント 『136ページ』 の数の間で、最適なバランスを維持するための一般的なバックアップ スキーム 『131ページ』。GFS では、直近の数日間を対象とした日単位での復元、直近の数週間を対象とした週単位での復元、過去の任意の時点を対象とした数ヵ月単位での復元を実行できます。

詳細については、「GFS バックアップ スキーム」をご参照ください。

P

P2V

物理コンピュータから仮想環境への移行。通常、P2V の処理には、以下の手順が含まれます。

- 特別なブータブル メディア 『133ページ』を使用した物理コンピュータのバックアップ作成
- バックアップの仮想環境への復元 (ESX(i) サーバー)

S

Storage vMotion

実行中の仮想コンピュータを特定のストレージ デバイスから別のストレージ デバイスへ移行できる VMware vCenter 固有の機能。

U

Universal Restore (Acronis Universal Restore)

異なるハードウェアまたは仮想コンピュータ上で Windows の起動を支援する Acronis 独自のテクノロジー。Universal Restore は、ストレージ コントローラ、マザーボード、チップセットなどのオペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

Acronis Backup for VMware では、Universal Restore テクノロジーは主に P2V 『126ページ』 移行シナリオで使用されます。

Linux を復元している場合は、Universal Restore を使用できません。

V

vApp

1 つのオブジェクトとして管理できる仮想コンピュータのグループ。相互依存関係にある複数の仮想コンピュータで、複雑な多重階層のアプリケーションが実行されている場合でも、vApp ではそのアプリケーションを簡単に管理できます。また、vApp では仮想コンピュータやリソース プールと同じ基本的な処理を実行可能です。vApp を使用すると、vApp 内の仮想コンピュータに電源を入れる順序を設定したり、vApp 内の仮想コンピュータに自動的に IP アドレスを割り当てたり、アプリケーション レベルのカスタマイズを実行したりできます。

Acronis Backup for VMware 製品の用語では、「vApp」は VM のコンテナと解釈されています。このコンテナには、バックアップに含まれる独自のプロパティがあり、vApp の一部または全部が復元される際、vApp と共にそのプロパティも復元されます。

vCenter

VMware vCenter Server (旧 VMware VirtualCenter) は、VMware vSphere 環境の集中管理が可能です。このため IT 管理者は、他の管理プラットフォームに比べて飛躍的に仮想環境の管理を向上させることができます。

詳細については

<http://www.vmware.com/jp/products/datacenter-virtualization/vcenter-server/overview.html> をご覧ください。

Acronis Backup for VMware 製品の場合、「vCenter」アイテムはデータセンター、ESX (i) ホストなどを含む ESX (i) 仮想インフラストラクチャのコンテナとみなされます。

vMotion

同じストレージを共有している異なる類似したハードウェア ホスト間で、運用中のゲスト仮想コンピュータを移行できる VMware vCenter 固有の機能。このような切り替えは、移行時に仮想コンピュータのユーザーに気付かれることなく、完全に透過的に実行されます。

アーカイブ

「バックアップ アーカイブ 『131ページ 』」をご参照ください。

エージェント (Acronis Backup for VMware エージェント)

仮想コンピュータのバックアップと復元を実行し、VMware ESX (i) インフラストラクチャで、使用可能なバックアップやコンピュータのタスク管理および操作など、その他の管理操作を実行できるようにするアプリケーション。

Acronis Backup for VMware には、VMware ESX (i) 仮想化サーバー上の仮想コンピュータをバックアップするエージェントが含まれており、エージェントはこのサーバーに接続されます。1 つのエージェントで複数の ESX(i) ホストまたは vCenter を管理することができます。ベスト プラクティスは、その vCenter で管理されている特定の ESX(i) ホストではなく、エージェント上の vCenter を登録することです。それ以外の場合、vMotion 『127ページ 』はサポートされません。

エージェント コンポーネントは、Windows プラットフォームにインストールされた Windows ベースの場合と、ESX(i) ホスト上の特定の仮想コンピュータで実行されるアプライアンス ベースの場合があります。

クリーンアップ

保持期間を過ぎたバックアップを破棄するため、またはアーカイブが特定のサイズを超えないようにするために、バックアップ アーカイブ 『131ページ』 からバックアップ 『131ページ』 を削除すること。

クリーンアップとは、アーカイブを生成するバックアップ タスク 『132ページ』によって、保持ルール セットをアーカイブに適用することです。この処理では、アーカイブが最大サイズを超えたかどうか、バックアップが期限切れになっているかどうか、またはその両方が確認されます。保持ルールに違反しているかどうかに応じて、クリーンアップによってバックアップが削除される場合があります。

詳細については、『ユーザー ガイド 『41ページ』』をご参照ください。

コピー

仮想コンピュータを新しい場所（新しいデータストアまたはリソース プール、あるいはその両方）にコピーする処理。この処理の結果、重複する仮想コンピュータが作成され、元のコンピュータから独立して実行されます。

コンソール (Acronis Backup for VMware 管理コンソール)

コンソールは、製品の機能にアクセスするため、Acronis Backup for VMware エージェントによって提供される Web ベースのユーザー インターフェイスです。このインターフェイスは、サポートされているインターネット ブラウザから指定した URL、たとえば <https://192.168.0.23:9876/>、に移動した後にアクセスできます。ここで、192.168.0.23 は Acronis Backup for VMware エージェント 『127ページ』の IP アドレスであり、9876 はポートです。管理者は、Web ベース コンソールとエージェントの直接接続を使用すると直接管理 『135ページ』を実行できます。

コンピュータ (仮想コンピュータ)

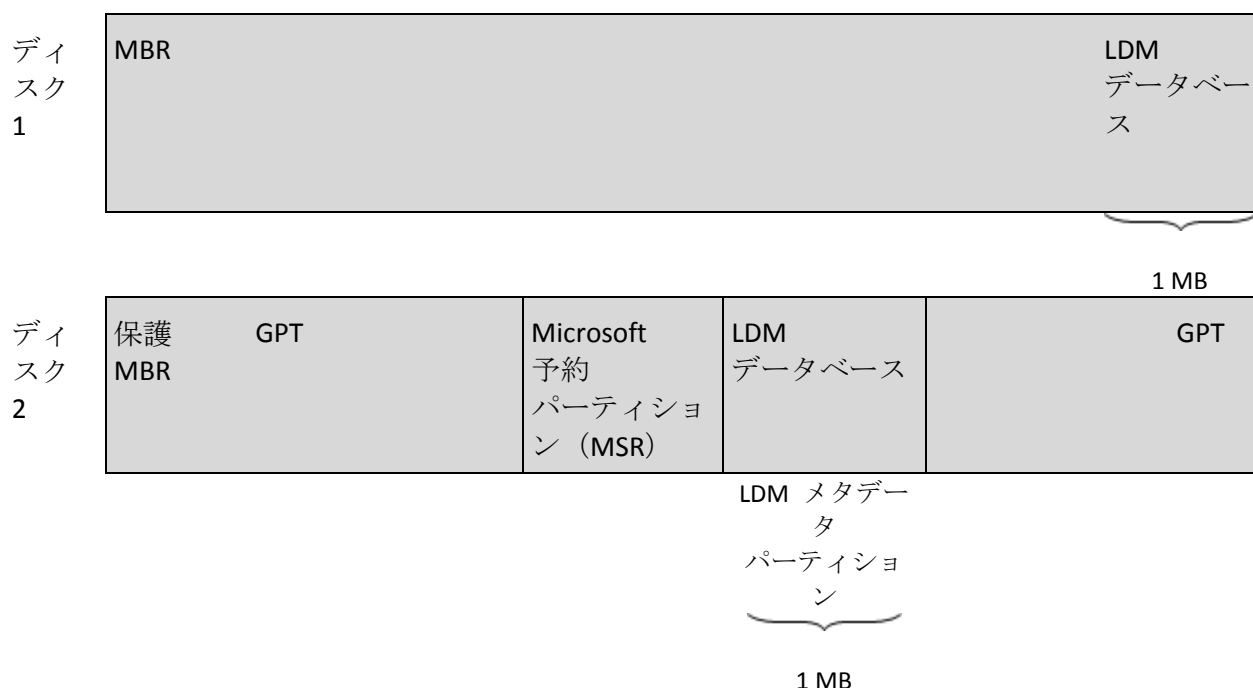
オペレーティング システムのインストールで一意に識別される仮想コンピュータ。

ダイナミック ディスク

Windows 2000 以降の Windows で使用可能になった論理ディスク マネージャ (LDM) で管理するハード ディスク。LDM は、障害耐性やパフォーマンスの向上、ボリューム サイズの拡張のために、ストレージ デバイスでボリュームを柔軟に割り当てる場合に役立ちます。

ダイナミック ディスクでは、マスタ ブート レコード (MBR) または GUID パーティション テーブル (GPT) のパーティション スタイルを使用することができます。MBR または GPT に加えて、各ダイナミック ディスクには、LDM がダイナミック ボリュームの構成を格納す

る非表示のデータベースがあります。ストレージの信頼性を高めるために、各ダイナミックディスクでは、ディスク グループに存在しているすべてのダイナミック ボリュームに関して、完全な情報が保持されています。このデータベースは、MBR ディスクの最後の 1 MB を使用します。GPT ディスクでは、Windows によって専用の LDM メタデータ パーティションが作成され、Microsoft 予約パーティション (MSR) から領域が確保されます。



MBR (ディスク 1) および GPT (ディスク 2) ディスク上で形成されるダイナミック ディスク。

ダイナミック ディスクの詳細については、Microsoft ナレッジ ベースの次の記事を参照してください。

「Disk Management (Windows XP Professional Resource Kit) (英語)」
(<http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/bb457110.aspx>)。

816307 「Windows Server 2003 ベースのコンピューターでのダイナミック ディスクの使用に関する推奨事項」 (<http://support.microsoft.com/kb/816307/JA-JP>)。

ダイナミック ボリューム

ダイナミック ディスク 『128ページ』、より正確には、ディスク グループ 『130ページ』上に存在するボリューム。ダイナミック ボリュームは、複数のディスクにまたがる可能性があります。ダイナミック ボリュームは、通常、以下のように特定の目的に基づいて構成されます。

- ボリューム サイズを拡張するため (スパン ボリューム)。
- アクセス時間を短縮するため (ストリップ ボリューム)。
- 冗長性を得ることで障害耐性を実現するため (ミラーおよび RAID-5 ボリューム)。

ダイナミック ディスクを含む仮想コンピュータをバックアップする場合、Acronis Backup for VMware は、ダイナミック ディスクの構造全体ではなく、論理的なダイナミック ボリュームをバックアップします。

タスク

Acronis Backup for VMware でのタスクとは、特定の時間または特定のイベント発生時に登録済みのコンピュータで実行すべき一連のアクションを指します。これらのアクションは xml スクリプト ファイルに記述します。開始条件(スケジュール)は、保護されたレジストリ キー (Windows ベース エージェントの場合) または保護されたファイル (アプライアンス ベース エージェントの場合) に保存されます。

ディスク グループ

共通の構成データを LDM (Logical Disk Manager) データベースに格納した結果、総体的に管理できるようになったダイナミック ディスク 『128ページ』の集合体。通常、同じコンピュータ内で作成されるすべてのダイナミック ディスクは、同じディスク グループのメンバーです。

LDM または他のディスク管理ツールで最初のダイナミック ディスクが作成されると、ディスク グループの名前はすぐにレジストリ キー

HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\dmio\Boot Info\Primary Disk Group\Name で確認できるようになります。

次に作成またはインポートしたディスクは、同じディスク グループに追加されます。グループは、最低 1 つのメンバーが存在している限り存続します。最後のダイナミック ディスクが切断されたり、ベーシック ディスクに変換されたりすると、グループは使用停止になります。ただし、その名前は上記のレジストリ キーに残されます。ダイナミック ディスクが再び作成されたり、接続されたりすると、増分された名前のディスク グループが作成されます。

別のコンピュータに移動された場合、ディスク グループは「外部」と見なされ、既存のディスク グループにインポートされるまで使用できなくなります。インポートでは、1 つのエンティティを形成するために、ローカルと外部の両方のディスクで構成データが更新されます。ディスク グループがコンピュータに存在しない場合、外部グループは、そのままの状態でインポートされます (元の名前のまま)。

ディスク グループの詳細については、Microsoft ナレッジ ベースの次の記事を参照してください。

222189 「Windows のディスク管理における "ディスク グループ" について」
(<http://support.microsoft.com/kb/222189/ja>) 。

データストア

仮想コンピュータの処理に必要な仮想コンピュータのファイルとその他のファイルを保持する論理コンテナ。データストアは、ローカル ストレージ、iSCSI、ファイバ チャネル SAN、または NFS を含めて、さまざまな種類の物理ストレージに格納できます。データストアは、VMFS ベースまたは NFS ベースで使用できます。

バックアップ

単一バックアップ操作『132ページ』を単一の復元ポイント『136ページ』(アーカイブ『131ページ』内) としたときの結果。特定の仮想コンピュータを対象として、特定の日にバックアップされたデータ コピー (仮想コンピュータ ボリューム) が物理的に保存されるファイルです。Acronis Backup for VMware によって作成されたバックアップの拡張子は TIB です。1 個のバックアップ ファイルには、複数のコンピュータから取得した役立つデータと必要なメタデータを含めることができます。

バックアップ アーカイブ (アーカイブ)

バックアップ タスク『132ページ』によって作成および管理されるバックアップ『131ページ』のセット。レガシー モード フォーマットの場合は、1 つのアーカイブに、複数の完全バックアップ『134ページ』だけでなく、増分バックアップ『135ページ』と差分バックアップ『135ページ』も格納できます。Always Incremental『125ページ』 フォーマットの場合は、1 つのアーカイブに増分バックアップのみを格納できます (最初のバックアップは常に完全バックアップになります)。同じアーカイブに属するバックアップは、常に同じ場所に保存されます。複数のバックアップ タスクで同じアーカイブに同じソース データをバックアップできますが、基本的なシナリオは「1 つのタスクにつき 1 つのアーカイブ」です。

アーカイブ内のバックアップは、バックアップ タスクによって管理します。手動でアーカイブの処理 (ベリファイ『133ページ』、内容の表示、バックアップのマウントと削除) を行う場合は、Acronis Backup for VMware を使用する必要があります。Windows エクスプローラーやサードパーティのファイル マネージャなど、Acronis 以外のツールでアーカイブやバックアップを変更しないでください。

バックアップ オプション

アーカイブの保護、バックアップから除外するファイル、データの圧縮レベルなど、バックアップ処理『132ページ』の設定パラメータ。バックアップ オプションは、バックアップ タスク『132ページ』の一部です。

バックアップ スキーム

バックアップ スケジュール、保持ルール (オプション)、およびクリーンアップ『127ページ』 スケジュールが含まれているバックアップ タスク『132ページ』の一部です。たと

例えば、毎月の末日の午前 10 時に完全バックアップ『134ページ』を実行し、日曜日の午後 10 時に増分バックアップ『135ページ』を実行します（以前のフォーマットの場合は、アーカイブ『127ページ』）。3 か月経過したバックアップは削除されます。バックアップ操作が完了するたびに削除するバックアップが確認されます。バックアップが **Always Incremental**『125ページ』モードで実行される場合、完全または増分など、バックアップの種類を設定する必要はありません。

Acronis Backup for VMware では、GFS『125ページ』などの一般的な最適化バックアップ スキームを使用したり、カスタム バックアップ スキームを作成したり、データを一度にバックアップしたりすることが可能です。

バックアップ タスク (タスク)

特定の仮想コンピュータまたは仮想コンピュータのセットを保護する方法を指定したルールセット。バックアップ タスクでは、次の項目を指定します。

- バックアップするデータ（つまり、バックアップするコンピュータ）。
- バックアップ アーカイブの保存先（バックアップ アーカイブの名前と場所）。
- バックアップ スケジュールと保持ルール（オプション）が含まれているバックアップ スキーム。
- アーカイブ ベリファイ ルール（オプション）。
- バックアップ オプション。

たとえば、バックアップ タスクには次の情報を含めることができます。

- 仮想コンピュータ「VM1」、「VM2」（タスクが保護するデータ）をバックアップする。
- バックアップ アーカイブの名前を **MySystemVolume** として、またその場所を `\\server\backups\` に設定する。
- 毎月の末日の午前 10 時に完全バックアップを実行し、日曜日の午後 10 時に増分バックアップを実行する（以前のフォーマットの場合は、アーカイブ『127ページ』）。3 か月経過したバックアップを削除する（バックアップ スキーム）。
- 最新のバックアップを作成直後にベリファイする（ベリファイ ルール）。
- アーカイブをパスワードで保護する（オプション）。

物理的に、バックアップ タスクは、指定されたパラメータ（バックアップ オプション『131ページ』）に従ってエージェント『127ページ』側で実行するためにあらかじめ定義されたアクション セットです。

バックアップ処理

データを特定の日時の状態に戻すため、コンピュータのハード ディスクに存在しているデータのコピーを作成する処理。

ブータブル エージェント

Acronis Backup for VMware エージェント 『127ページ』 のバックアップ機能を備えたブータブル レスキュー ユーティリティ。一般的に P2V 『126ページ』 移行を目的とします。ブータブル エージェントは Linux カーネルに基づいています。ブータブル メディア 『133ページ』 を使用して、コンピュータでブータブル エージェントを起動できます。処理の設定と制御は、GUI を使用してローカルでのみ実行できます。

ブータブル メディア

ブータブル エージェント 『132ページ』 を含む物理的なメディア（CD、DVD、USB フラッシュドライブ、またはブート デバイスなどのコンピュータの BIOS によってサポートされる他のメディア）。

P2V 『126ページ』 移行を実行するために、Acronis Backup for VMware のブータブル メディアが物理コンピュータのバックアップに使用されます。

ベリファイ

バックアップ 『131ページ』 からデータ リカバリを実行できるかどうかを確認する処理です。

仮想コンピュータのバックアップのベリファイでは、バックアップに保存されているすべてのデータ ブロックのチェックサムを計算します。このプロシージャでは多くのリソースが使用されます。

ベリファイの成功は復元の成功の可能性が高いことを示しますが、復元処理に影響するすべての要因を確認するわけではありません。オペレーティング システムをバックアップする場合は、新規/既存の仮想コンピュータへの復元テストを実行するか、またはバックアップから仮想コンピュータを実行することによってのみ、将来の復元の成功が保証されます。

ベリファイ ルール

バックアップ タスク 『132ページ』 の一部。ベリファイを実行する時期と頻度を定義し、アーカイブ 『127ページ』 全体のベリファイを実行するのか、アーカイブ内の最新バックアップをベリファイするのかを定義するルール。

メディア ビルダ

ブータブル メディア 『133ページ』 を作成するための専用ツール。

リソース プール

ESX (i) 仮想環境でのリソース管理の概念を表している VMware の用語。リソース プールは、スタンドアロンの ESX (i) ホストまたは ESX (i) クラスタのリソースを、より小規模なプールに分割する方法を提供します。リソース プールは、リソース プール内で実行する仮想コンピュータが共有する CPU とメモリのリソース セットで構成されます。リソース プールは自己完結型であり、リソース プールは互いに分離しています。

このテクノロジーでは、複数の物理サーバーを 1 つのリソース プールに統合して、CPU の処理能力とメモリの容量を集約することができます。

仮想コンピュータはリソース プールで実行され、リソース プールからリソースを確保します。このようなリソースの割り当て調整により、仮想コンピュータの負荷はリソース プール全体にわたって継続的に分散されます。負荷が増加すると、vCenter Server は自動的に追加のリソースを割り当て、リソース プール内のホストの間で仮想コンピュータが透過的に移行されます。

レガシーモードのアーカイブ

「バックアップ アーカイブ 『131ページ 』」をご参照ください。

漢字

暗号化されたアーカイブ

AES (Advanced Encryption Standard) に従って暗号化されたバックアップ アーカイブ 『131ページ 』。アーカイブの暗号化オプションとパスワードをバックアップ オプション 『131ページ 』で設定すると、そのアーカイブに属する各バックアップは、エージェント 『127ページ 』によって暗号化されてから保存先に保存されます。

AES 暗号化アルゴリズムは、暗号ブロック連鎖 (CBC) モードで動作し、ランダムに生成されるキーを使用します。キーの長さは 128、192、または 256 ビットからユーザーが指定できます。次に、暗号化キーは、パスワードの SHA-256 ハッシュをキーとして使用して、AES-256 で暗号化されます。パスワード自体はディスクまたはバックアップ ファイルに保存されませんが、パスワードのハッシュがベリファイには使用されます。この 2 段階のセキュリティにより、バックアップ データは権限のないアクセスから保護されますが、失われたパスワードを復元することはできません。

完全バックアップ

バックアップ用に選択した全データが含まれた自己完結型のバックアップ 『131ページ 』。完全バックアップからデータを復元するには、その他のバックアップにアクセスする必要があります。

高可用性 (HA)

クラスタ ハードウェアでの障害発生時に、クラスタ内の別のホストで自動的に仮想サーバーを再起動できるようにする **VMware vCenter** 固有の機能。

差分バックアップ

差分バックアップでは、最新の完全バックアップ 『134ページ』にデータの変更が保存されます。差分バックアップからデータを復元するには、該当する完全バックアップにアクセスする必要があります。

重複除外

同じ情報のコピーが複数存在している場合に、その情報を一度だけ格納する方法。

Acronis Backup for VMware では、レガシー モード 『134ページ』と **Always Incremental** 『125ページ』 アーカイブ フォーマットの両方のバックアップ アーカイブ 『131ページ』に対して、**Deduplication** テクノロジーを適用できます。この方法により、アーカイブによって使用されるストレージ容量、バックアップ トラフィック、およびバックアップ中のネットワーク使用量を最小限に抑えます。

Acronis Backup for VMware の重複除外は、1 個のバックアップ アーカイブに含まれるデータのみが管理されます。たとえば、バックアップが 2 つの異なるアーカイブに保存されている場合は（それらが同じ場所にある場合でも）、これらのアーカイブの間には関係が存在しないため、重複したデータが含まれることがあります。

増分バックアップ

最新のバックアップに対するデータの変更が保存されるバックアップ 『131ページ』。増分バックアップからデータを復元するには、同じアーカイブ 『127ページ』から、他のバックアップにアクセスする必要があります。

直接管理

コンソール 『128ページ』とエージェント 『127ページ』の接続を使用してエージェント 『127ページ』で実行する管理操作。

登録済みのコンピュータ

Acronis Backup for VMware エージェントで管理される仮想コンピュータ。登録済みの **ESX(i)** ホストまたは **vCenter** 上にあるすべての仮想コンピュータは自動的に登録され、**Acronis Backup for VMware** エージェントで管理することができます。

復元ポイント

復元可能なバックアップ データの日時。

分散リソース スケジューラ (DRS)

vMotion『127ページ』を使用して ESX (i) クラスタの自動的な負荷分散を実現する VMware vCenter 固有の機能。